

二次元
ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

cover illustration by ちょびぺろ

成年向け雑誌

カラーピンナップ

うるし原智志

俺P1号
白崎アロエ
ちょびぺろ

えっちマンガ

楠木りん
原作:Anime LILITH
天海雪乃
MISS BLACK
おおたけし
ぱふえ
海原圭哉
柳原ミツキ

今号の特集

花嫁 陵辱

立ち読み版

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

DIGITAL
EDITION
デジタル版

vol.77
2014 08

連載&
読み切り小説

上田ながの×A.S.ヘルメス / 高岡智空×からすま式 / 舞麗辞×牡丹
夜士郎×竹馬2号 / 空蝉×まうめん / 斐芝嘉和×ちょびぺろ / ICHICO×綿貫ろん

イネス姫の婚淫

いしほよしかず
小説 **斐芝嘉和**

挿絵 **ちよびぺろ**



清楚可憐な美姫が祖国を守るために、
憎き敵国の醜悪な皇帝に身体を捧げる!

高らかに鳴る教会の鐘、潮のように押し寄せてくる歓呼の声——道具立ては祝福なのに、バルコニーに立って広場を見下ろすイネス姫の顔は暗い。

(これでもう、私はグスタフ帝の妻……)

傍らに立って馴れ馴れしく肩を抱いている大男の圧倒的な気配に、心が押し潰されそう。

若くしてヴァンスタン公国を継いだ殲烈公グスタフは、どのような邪法を用いたものか、魔物の支配する辺境をたちまち平定。返す刀で帝国に叛旗を翻し、これもたったの三年で屠ってしまった。

帝となってもグスタフは止まらず、敵対国はもろんのこと恭順の意を示す周辺諸国までも次々と蹂躪し、白旗を揚げた軍すら殲滅して、いままなお大陸中に恐怖と怨嗟を拡大し続けている。

ヴァンスタンの刃を避ける方法はただひとつ、若く美しい姫を差し出すこと。

こうしてシオン王国第四王女だったイネス姫はグスタフ帝に嫁ぎ、十三番目の妃となった。

街に響き渡る鐘も、広場を埋め尽くした民衆の歓声も、ふたりの成婚を祝うものだ。

もちろん姫に喜びはない。

政略結婚は王族の常ではあるし、愛する民を守るためだと頭では理解しているが、相手が血に飢えた殲烈帝では恐怖しか覚えない。

まして、ここは帝都だ。

教会前の広場に蟬集し、血走った目をギラギラさせているのは、ヴァンスタン帝国の民。

邪法を用いて鬼族との混血を進めたという噂は本当だったのか、人間離れした体格や面立ちの者が少なくない。そもそもグスタフ帝自身が、熊のように大柄で筋骨隆々とした偉丈夫だ。

華奢で可憐なイネス姫は、狼の群れの中に迷い込んでしまった雛鳥のようなもの——と。

「……どうした、姫？ 獣じみた野蛮人相手では作

り笑いするのも惜しいか？」

鷹揚な笑みを浮かべて民衆の歓呼に応えていたグスタフが、イネス姫の柔らかな耳朶に唇を寄せ、低い声で囁いた。

「い、いえ、そういうわけでは……この衣装が少々私には贅沢すぎるもので、気恥ずかし……」

手慰みに一国を攻め滅ぼしたこともあるという暴君の機嫌を損ねまいと、姫は慎重に言葉を選びながら、震える声を絞り出した。

恐怖があまりに強すぎて羞じらう余裕はないのだが、帝王側が用意していたウエディングドレスは開口部が大きく、レースもふんだんに用いられていて、シオン王国の常識からすれば裸同然なくらい露出度が高い。特に胸の部分は美しい丸みの大半が細かな網目に包まれていて、瑞々しい柔肌はもろんのこと、野薔薇の蕾のように紅く可憐な乳首までが見えそうになっていく。スカート部分もレース越しに白い脚線美が透けて見えるし、あろうことか前中央が割れているので、柔らかな薄布に守られた恥ずかしい割れ目に何千何万という卑しい視線が集まっているような気がする。

(なんて下劣な……)

とは思うものの、グスタフ帝の機嫌を損ねてはならない。姫の細い双肩にシオン王国の存亡がかかっているのだ。強張る頬を懸命に微笑ませ、隣に立つ男に視線を向ける。

「それに、王族の作法は国によって異なるもの。私の国では妃は民の前に立たないのです。ですので、こういう場合にはどうすればよいのか……」

「なるほど、そういうことか」

意外にすんなりと納得され、姫はかえって面喰らってしまった。我ながら苦しい言い訳だと思っていたのに、欠片も疑われぬとは——いや、違う。

「我が国では、こうするのだ」

「え？ あ……きゃあっ?!」

不意に屈みこんだ大男に膝裏を掬われ、甲高い悲鳴をあげるイネス姫。

驚いて息を呑んでいるうちに、

(や……あ、あああっ?! こんなにたくさんの民の前で、こんな恥ずかしい格好……ッ!)

高々と担ぎ上げられた細い身体がバルコニーの外へ差し出され、膝裏を掬われた両脚が大きく左右に開かれてしまった。

「お、おやめください、グスタフ様……ッ!」

転落への恐怖に喉が詰まり、身体が強張って、背後の男の厚い胸に背を預けるような格好に。

(あ、ああイヤ……は、恥ずかしいッ!)

羞じらう意思に反し、シヨーツに守られた股間が自然と前へ迫り出してしまふ。

前方中央に深いスリットが入っているスカートも、外を向いた膝に引つ張られてあられもなく開く。辛うじてレースに隠されていた股間——ふつくらとした肉軟の柔らかな曲面や薄布に透ける恥ずかしい割れ目のラインを、眼下に集まる民草に見せびらかしているような格好だ。

それだけならまだしも、

「おおおっ! 今度のお妃様は土手厚だなっ! ぶにぶにマンコを、直に見てみてえ!」

「俺はあのムチムチの太股に頬摺りしたい!」

「あの形よいオッパイでチンコを挟んで、ムギユムギユするのも愉しそうだな!」

広場に集まった民たちが、濁声を張り上げてしきりに下品な言葉を吐き始めた。

(な……なんなの、この者たち……王族に対する畏敬の念を、欠片も持ち合わせていないのッ!)

高貴な者としての尊厳を傷つけられて息を呑む姫の耳元で、グスタフ帝が低く笑う。

「ほかの国ではどうだか知らぬが、我が国では懐か

ぬ妃を民に下げ渡す習慣があつてな」

「……ッ!？」

「先月興入れしてきた十二番目の妃は、どうしてもワシに尽くそうとしなくてな。三日で諦め、下げ渡したから、民は二十日以上愉しんだはずだ」

「あまりの下劣さに絶句したイネス姫のなよやかなうなじを、殲烈帝の太い鼻息がくすぐる。

「とはいえ、いかな美姫とて飽きる時は飽きる。そろそろおかわりが欲しくなってきたところへお前がやってきて、こうして披露されたわけだ。立場を忘れて昂奮するのも無理はあるまい」

「い、あ……や、ああ……」

「そう怯えるな。ワシとて鬼ではない。お前がワシに懸命に尽くしておる間は、けつして奴らには下げ渡さぬ。約束しよう」

「恩着せがましく言っているが、要は脅しだ。」

「(なんて卑劣な……ッ!)」

「カツとなりかけたものの、太い腕が前方へと動き、白桃のような美尻がバルコニーの縁を越えて宙空にはみ出すと、

「ひっ!! お、おやめくださいっ!」

「わななく唇から掠れた悲鳴が迸ってしまった。

「落下への恐怖以上に、仰向いてひしめく群集の血走った目が怖い。獣欲を剥き出しにした野蛮な笑顔がおぞましい。」

「早くこつちへ来てくださいよ、お妃様あつ! オッパイがとろとろになるまで、揉みまくってあげますからあ!」

「そのお口で、俺のチンポを啜ってくださいあい!」

「下品な声をあげる何百人もの男たちが、滾る熱情をバネにしていまにも飛び掛かってきそうだ。」

「あ、貴男に尽くします、妃として、精一杯お仕えます! ですから、ですから……こ、こんなお戯れはよしてっ!」

「うむ、イイ声だな。気に入ったぞ、イネス」

「牙を剥いて笑ったグスタフ王が、真っ青になった姫をようやくバルコニーへ戻した。」

「(た……助かった……)」

「ホッと安堵の吐息をもらしたものの、膝が小刻みに震え、腰が抜けたようになって、まっすぐ立つていられない。」

「しかし、座り込むことは許されなかった。」

「さあ、次は交歓の儀だ」

「え……あつ!？」

「片方の腕に背を支えられ、もう片方の腕で両の膝裏を掬われて——俗に言うお姫様抱っここの形に。」

「(ま、また……ッ!?)」

「再びバルコニーの外へ差し出されるのかと早とちりした姫は、慌ててグスタフ帝の太い首にひつしとしがみついた。」

「おお、あんなに力いっぱい抱きついて……新しいお姫様は、帝王様にぞっこんみたいだな!」

「見せつけてくれるねえ!」

「勘違いした群集に下品な声で囁し立てられ、耳の先まで真っ赤になるイネス姫だが、すぐにそれどころではなくなる。」

「華奢な姫を首にぶら下げた帝王が、バルコニーの横の階段に向かい、野蛮な笑みを浮かべている群集の中へ降り始めたからだ。」

「な……なにをなさるおつもりですかっ!？」

「安心しろ。まだ奴らに下げ渡したりはしない」

「怯える姫を落ち着いた声で宥めるグスタフ帝だが、その頬に浮かんでいるのは禍々しい笑み。」

「こ、コウカンの、儀……ですか? それはいつたい、どのような……」

「歓びを交わす儀式だ。王と妃だけでなく、王と民の絆をも強くする、一番大切な儀式だ」

「グスタフ帝の視線を追って前方に目を向けたイネス姫は、アツと短く息を呑んだ。目をキラキラさせた民の群れを真っ二つに割るように、紅いヴァーシロードが伸びていたのだ。しかもその幅が狭い。」

「あんなところを歩いたらきつと、鼻息を荒らげた下賤な者たちに掴まれ、撫でられ、服を破かれてしまうに違いない——と。」

「安心せい。奴らは指一本触れぬ。お前は帝王であるワシの嫁なのだからな」

「階段を降りきつたところで抱いていた姫を降ろし、自らの前に立たせたグスタフ帝が、怖ろしげな牙を剥いて低い声で笑う。」

「さあ、安心して四つん這いになれ。お前の尻を、ワシに向けるのだ」

「……っ!?! な、なぜそのような……」

「問いかけて、答えを待つまでもなく気づく。民たちの目の前で新しく迎えた姫を犯すことで、帝王の武威を知らしめるつもりだ。」

「(なんて下劣な、なんて野蛮な……で、でも、もしこれを拒んだら……)」

「苦痛に歪むイネス姫の顔を覗き込み、殲烈帝が凶悪な笑みを深めた。」

「ワシと姫との婚姻は、ヴァンスタン帝国とシオン王国の婚姻でもある。もしそれが気に入らぬと言うのなら……」

「き、気に入らないなんて、一言も……ただ、こ、こんなにたくさん人の目の前で……」

「王の歓びを民とともに分かちあうという、公国時代からのヴァンスタンの伝統だ。無論、姫が拒むと言うならそれもよし。軍馬を采配する悦びは、美姫を抱く悦びにも勝るからな」

「唇の端を吊り上げ、鋭い犬歯を見せる大男。あからさまな脅迫に、姫の心が冷えた。こんな男の妻にならなければならぬなんて、こんな野蛮な」

「(凌辱レオタード ~淫獄に墮ちた女子高生~) [アリシア 淫獄の姫騎士] [若妻の秘薬 墮ちゆく美沙子の爛れた日々] [トリプルとらぶるプリンセス] [学園戦姫 巴 淫辱の下剋上] [桃色看護日誌 ~女医とナースと僕の日々~]

国に骨を埋めなければならぬだなんて——。

だが、選択肢はない。

（シオンの民を守るなら、こ、これくらいの恥辱……どうということはないわ！ だって私は、王族なのだから……民を守るために身を投げ出すのが、王族の務めなのだから……！）

覚悟を決めたイネス姫は、深紅のヴァージンロードに跪き、下賤な民の視線を浴びながら怖ず怖ずと四つん這いになった。

途端、雷鳴のような歓声が湧き起こる。

「このお妃様、見た目は細くて儂げだけど、肝が据わってるなあ！」

「交歓だっ！ 交歓の儀だっ！」

歯を剥いて唾を飛ばし、足踏みまでして囃し立ててくる野蛮な男たち。

（い、いや……やっぱり、イヤッ！ こんな下劣な者たちの前で、た、大切な初めてを……こ、こんな怖ろしい男に奪われてしまうなんてッ！）

姫の中の乙女心が凄まじい悲鳴をあげて軋む。

王族としての使命感で必死に抑え込むが、蒼褪めて強張った頬を濡らす大粒の涙は止められない。

だが、泣くのはまだ早すぎた。

本当の恐怖は、これから始まるのだ。

「まずまず気に入ったぞ、イネス姫。泣くほど怯え、羞じらつておるのに、祖国の民のために己を犠牲にしようとは——素晴らしい！ 穴の具合がよければ正妃に据えてやろう！」

虎のように吼え、四つん這いになったイネス姫の尻に飛びついて、純白のウエディングドレスをびりびりと引き裂き始めるグスタフ帝。

「ひ、ひい……ひいっ!!」

犯される、辱められる——女にとつてもつとも大切な「初めて」を、こんなに大勢の人の前で、無惨に奪われてしまう——。

恐怖と恥辱に追い詰められ、掠れた悲鳴をあげるイネス姫を、

「イイ声で鳴くなあ、今度のお妃様は！」

「あの泣き顔も、そそのねえ。下げ渡されたら、毎日毎日泣かせまくってやろうぜ！」

野蛮な民たちが下劣な声で言祝ぐ。

そうこうしているうちにスカートがボロきれのようになり、白く瑞々しい太股が頭わになった。秘処を守っていたショーツも乱暴に塗りとられ、

（あ、ああ……い、いやああ……ッ！）

恥ずかしい割れ目が微風に煽られ、姫の心を支えている王族としての使命感が吹き飛びそうになる。

「お？ 見ろよあのオマンコ！ つるんつるんで、毛が生えてないぞ！」

「本当だ！ あんなに可愛いオマンコに、帝王様のあの凶悪なお肉棒が入っちゃうのかあ——」

「ああ、ああ……み、見ないでええっ！」

薄布越しの視線ですらおかしくなりそうなほど恥ずかしかつたのに、それを、直接——。

だが、恥ずかしがっている余裕はもはやない。

「どこへ行く気だ、姫？ 交歓の儀はまだ始まってもおらぬぞ！」

唸るように笑ったグスタフ帝が姫の細い腰を掴み、もう片方の手を仰向けて、眩しいほどに白い太股の扶間に荒々しく挿し込んだ。

「あっ!! や……い、いけませんっ！」

恥ずかしい割れ目に太い指が添えられ、柔肉の畝が押し分けられる。鉤に曲がった指先に粘膜花卉の縁を軽く掻かれ——。

「う……ッ!! ふ、ソうつ!!」

不意に溢れ出しそうになった声を、慌てて囁み殺すイネス姫。

（なに、これ……ま、魔力ッ!!）

柔肉の狭間に隠れた紅い粘膜が敏感なことは知っているが、軽く掻かれただけでこれほど気持ちよくなるのはおかしい。

「ソう……ふ、くらん……ッ!!」

ひそやかな潤みに触れた太くて硬い指先がゆつくりゆつくり前後するたび、恥ずかしい割れ目全体に温かな波紋が広がり、仔犬のような声が溢れ、うしろへ突き出した尻が勝手に持ち上がって、細い背筋がくねってしまふ。

「そう怯えるな。せつかく手に入れたシオンの姫だ、いきなり壊したりはしない。もつたないからな——」

牙を剥いて笑った殲烈帝が、イネス姫の瑞々しい秘裂に埋めた指先の動きを微妙に変えた。武骨な指の間に敏感な粘膜花卉の端を軽く挟み、滑らせるようにして、割れ目の端から端までぬちぬちゅと激しくしごき始めたのだ。

「あっ!! あっ!! あっ!!」

裏返った声が続けざまに溢れ出し、四つん這いになった身体が前後に揺れる。

（いや、いや……イヤああっ！ こ、これではまるで、まるで……）

すでに犯されているようではないか——。

羞恥は爆発的に膨れ上がるのに、淫らな動きは止められない。無垢な秘処に刻み込まれる絶妙な快感を、若い牝の脂肪が悦び始めているのだ。

「まだ分からないのか、姫。これは交歓の儀なのだぞ？ ここに集った民たちすべてが姫の歡びを知らねばならないのだ——」

「で、でも……ああでも、でもお……ッ！」

叫ぶ声が裏返る。

（やだ、ダメ……み、見られている……のにい！ か感じて、しまふ……気持ちよく、なつて……しまふううっ！）

下卑た笑みを浮かべる民たちに見下ろされる中、大男の指がもたらす淫悦に操られて身体を前後に揺

すつていると、胸も次第に熱くなってきた。

ぶるんぶるんと小気味良く揺れる両の乳房がドレスの裏地に抱き止められ、撫で回されているのだ。

細かなレースに乳肌がしごかれ、無数の網目に揉みまわられる。

「ん……ッくヒツ!!」

徐々に徐々に硬くなっていた可憐な乳首が、不意に網目を突き抜けた。胸の尖端に鮮烈な快感が閃き、頭の中が一瞬、真っ白に塗り潰される。

咄嗟に唇を噛み、衆人環視の中で果てるという王族にあるまじき失態はなんとかまぬかれたが、

「ふあっ?! や……んうっ?!」

痛いような痒いような、それでいて気持ちイイような、こらえがたくもどかしい感覚が弾む丸みの尖端にリズムカルに閃き始める。

輝くほどに赤らんだ勃起乳首の付け根にレースの細い布地が喰い込み、乳房が揺れるたびにキュッ! キュッ! と締めつけてくるのだ。

「やだ、イヤ……は、恥ずかしいッ! お願ひ、だれも、気づかない……でえ……ッ!」

細かな網目を突き抜けて丸見えになってしまった乳首も、それが硬く痲つていることも、付け根を軽く締めつけられて快感を覚えていることも、高貴な生まれのイネス姫にとっては耐えがたい恥辱だ。

嫁入りに必須の儀式だから、祖国の民を守るためにはこうするしかないのだから、見られながらの初体験だけならなんとか我慢できる。

だが、それで気持ちよくなるのは話が別だ。

「こんなところで、こんなことされて……こ、こんなに、はしたなく……感じてしまうなんて!」

王族や貴族ならば絶対にあつてはならないことだし、名も無き民草でも同じだろう。

たくさんの瞳に見つめられる中、淫らなことを悦びよがり、あまつさえ果ててしまったら、それはも

う犬畜生に等しい。

（耐え、なけれ、ば……）
上擦った吐息をこぼす唇を噛み、桃色の靄が立ち籠め始めた頭を振って、イネス姫は思う。

絶対に果てない、ながあつても我慢する。そうでなければ、人間でいられなくなる——と。

「帝王様、そろそろお妃様に挿入れてさしあげたかどうかです? ほら……マン汁がダラダラダラ溢れてますぜ」

「……ッ!!」
横から覗き込んでいる民の言葉に、息を呑む姫。そう言われてみると、太股がなにやら濡れているような気配。

太い指先に延々と掻き回されている秘裂は燃え出しそうなほど熱く、心地よく蕩けきっている。羞じらう姫がどんなに歯を喰い縛って我慢しようとも、若い肉体は正直なのだ。

妖しい魔力を発する熾烈の意外に器用な指先に、すっかり手懐けられている。蜜まみれになったピラピラを二枚とも抓まれ、愛液に潤んだ粘膜同士をヌチュ、クチユ、と摺り合わされると、

「うっ!! く……んうらうらうらッ!!」
いままで以上の快感が背を駆け抜け、頭の中がちまちま真っ白になり、四つん這いになった細い身体が弓形に反り返ってしまった。

（だ、ダメ……こんなにたくさんの人が、こんなに近くから見ている、前……ッ!）

辛うじて羞恥心が勝り、絶頂の寸前で踏み留まっていたが、もう一度同じことをされたらきつと耐えられないだろう。我を忘れ、あられもない声を張り上げて、人間以下の存在に墮ちてしまふ——。

イネス姫の理性は恥辱の瞬間を予感して焦り震えるのに、身体は逆にもどかしくなる。

もっと、もっと、もっともつと気持ちよくなって、

全身の細胞がさらなる淫悦を欲し、尻や太股、腹や乳房など、女性らしく柔らかな脂肪が、燃え出しそうなくらい熱くなる。
はあ、はあ、と悩ましい吐息をこぼす姫の、触れなば落ちんほどあやうい様子に、グスタフ帝も満足したらしい。

「これくらい濡ればよいか」
指に絡みついた甘酸っぱい蜜の匂いを嗅ぎ、凶悪な笑みを深めると、王衣の前をおもむろに開き、赤黒く照り光る巨根を誇らしげに振り立てた。

「う……あつ?! ひ、ひい……ッ!!」
なんとという太さ、なんとという長さ——。

シオンの民を守るためにと覚悟を決めたはずの姫の心が、目の当たりにした淫棒のあまりのおぞましさに激しく揺らいだ。

（む、無理……絶対に、無理ッ!）
尖端に膨らむ亀頭は紅々と輝いて、青臭い粘液を薄く滲ませてぬらぬらと輝いている。見るからに硬そうな肉茎は怖ろしい血管の網目を浮かべ、木の根のように緩く捻れて傲岸不遜に屹立している。

あんなものを大切な場所に挿入れられたら、一発で壊れてしまう。あまりの太さに身体が引き裂かれて、死んでしまうかも知れない。

逃げなければ、逃げなければ、逃げなければ——姫の理性が金切り声で叫びまくるが、それより先に腰が抜けてしまった。ただただ啞然とし、真っ青になつて震えているうちに、

「さあ、交歓の儀だ!」
吼えた大男に腰をガチツと掴まれる。

「ひっ?! あ……あぎいっ!!」
小さな小さな陰穴に、熱く硬い肉塊が荒々しく押しつけられ、力任せにねじ込まれ始める。

「い、痛い……痛い痛い、裂けるうっ!! お許しください、ぐ、グスタフ……さまあッ! さ、裂け

肉悦に抗えきれず
狂い咲く雌花!

軍属麗奴のバキ

淫れ散る三戦華

最終話 戦華のブーケ

たかおかちから
小説 NOVEL 高岡智空
にしき

挿絵 ILLUSTRATION からすま式

登場人物紹介



ツバキ=エンデュミア

黒髪の女兵士。冷静沈着な思考と類い稀なパワーウイングの操作術で、母国フィオーレの危機を数々救ってきた。



サイネリア=バプシオン

ツバキとともに戦う軍人。実剣類の武器攻撃が得意。金髪縦ロールのお嬢さまで、敵に対しては高慢な態度も。



リリィ=セシル

機械工学・薬学に関しては天才と言われた少女。開発機器の成果確認の名目で戦場に出る。子供体形。

前号までのあらすじ 三戦華として数々の敵兵を撃破してきたツバキ、サイネリア、リリィの3人だったが、敵国ドリオの策略により1人ずつ捕えられ、その美体は社の獣欲によって穢されてゆく。

ドリオに連れ戻されたツバキを——三戦華を待っていたのは、あのおぞましい調教室ではなく、おそらく基地内のブリーフィングルームと思われる、大きく広い部屋だった。

中央に運び込まれた拘束器具は、首と両手を嵌め込む枷と、膝立ちの四つん這いを強制する金属棒と金具、すべてを繋ぐ鎖——見るだけでも被拘束者を威圧する、冷徹な輝きを放っている。そして当然、彼女は見るだけでは済まされず、拘束具に身体を縛りつけられ、獣欲の捌け口へと眨められていた。

「うぐっ、あうっ、あううううっ……すまないっ、サイネリア、リリィ……んっくううっ！」

口惜しさに何度も噛み締めた唇はポロポロ、僅かに血まで滴っている。それほどまでに自分の過ちを悔いても、ツバキの肉体はドリオの薬と調教によって、意思ではどうにもならぬほどに蕩けていた。

肉棒を押しつけられ、尻谷間に這わされるだけで、刻まれた花弁を綻ばせて、腸奥からゴブウツと逆流するほどに精液と腸蜜を吐きもらし、裏返った肉皺がペニスに唾えついてゆく。それを心の奥底では恥辱に感じているのに、硬い脈動が菊壁を扶け、狭まった窮屈な淫穴を、内側から圧迫されると——。

「んひいっつ?! ひっ、ふぐうっつ……んおっ、くっつ、んふうううっつ! いひいっつつ!」

その甘い刺激に眉根が緩んで、唇がわななき、笑みを浮かべるように弧を描き、だらしなく舌が垂れた。荒い鼻息が下品にこぼれ、肉棒が捻じ込まれるたび、はしたない嬌声が溢れて牡を悦ばせる。

「ぎやはははっ! 随分弱ちくくなつたなあ、ツバキ……アナルがすっかり弱点かあ?」

「ほふううっ、んっ、は、はひ、くりゅうう……けっ、けひゅううっ、んっ、マ、マンコお……おぐっ、おっつ、ほおおおっつ!」

背筋が迸る快感にゾクゾクツと震え上がり、大きく跳ね返ってゆく。股間に奥まった小孔からブシヤアアツツと勢いよく透明飛沫が散り、四つん這いの膝の間に、新たな淫液溜まりが広げられた。

「そらあっ、アナルが陥落しやがった! 潮噴きの嬉ションは気持ちいいかよっ、戦華様あつ!」

（わ、私はあ……なぜっ、こんな……こんなに、あぐううっつ! 快感に、弱くっつ……）

緩んだ唇からダラダラと唾液が流れ落ちて、それを押さえるために唇を噛み、歯を軋ませて、口を塞いでいるというのに。太い牡槍に腸肉を貫かれ、拡張される刺激を受けると、全身の筋肉が弛緩してなにもも堪えることができなくなる。

「大好物だろ、まだまだお代わりがあるぜえ?」

敵兵たちの揶揄や嘲笑を耳にしながらも、表情が崩れて甘い喘ぎがもれるのを我慢できず、自ら尻を跳ねさせ突きだし、肉欲に媚びさせられた。

「あっつ、ぐうううんっつ、ほおおっつ……」

その姿から目を逸らさぬよう強制されているのか、二人の間はツバキと向かい合う形で、少し離れた位置に拘束され、床に膝立ちで座らされていた。リリィは両手に、サイネリアは両乳房に肉棒を包みながら、涙を浮かべてツバキを見つめている。

「ツバ、キい……んぐううっ! くああんっ、あうっ、ひっ……んひいんっ!」

乳房を押し捏ねられ、堪えきれずに艶声を上げる屈辱に歯噛みしながら、サイネリアはツバキに対して申し訳ない気持ちでいっばいだつた。おそらくは隣で唇を犯し続けられているリリィも、同じ感情を抱いていることだろう。

（ツバキが……あれだけ、時間を作ってくれたのに……わたしたちは、なぜあと少しを……）

彼女に対しては、快楽に抗えなどと無茶なことは言えない——きつと、そうしてしまつたのは自分たちのせいなのだ。

（わたくしとリリィは……んくっ、ひううっ……んふうっ、ふっ……か、快感に、だつてえ……それなりにつ、耐性がつきまじつたもの……）

調教は苛烈ではあつたが、自分たちは仲間が助けに来てくれるという希望を持ち、それを受けることができた。耐えられる強い心を保つていられた、だからこそ、快楽に流されずにそれを御する術を、いくらか身につけられたと言える。

しかしツバキは違う。彼女は自身が捕らえられたと同時に、希望を失つたのだ。その目の前で自分たちが、演技とはいえ快楽に屈した姿を晒し——彼女の絶望は、ますます色濃くなつたことだろう。

（逃亡中、そんな姿は……見せ、なかつたけれど……はうっ、あつ……んううっ……ツバキの肉体にはもう、おぞましい肉悦の、爪痕が……）

さらに不利な条件を上げるなら、淫紋を最初に刻まれたのも彼女だ。そしてその媚薬墨と反応する薬ガス、それを直接、大量に吸い上げたならどうにもならないだろう。僅かに吸つた自分たちでさえ、腰が抜け、膝が折れるほどだつた。いまの彼女の痴態は、自分を映しているのも同じだ。

(それでも、なんとか——耐えて欲しかったという
のは、わたくしの……わがままですわねっ……)
涙を流した大粒の瞳が、自分への謝罪を繰り返す
戦華のリーダーを見つめ、悲しみに潤んだ。

「ふふふ、躰け直しは順調のようだな……ああ、構
わん。そのまま続けていろ」

威感ある低い声を響かせ、その部屋に男が入って
くる。見るまでもない、入室と同時に走った緊張感
と、男を氣遣う兵たちの態度、それは自分たちを統
括し指揮する、国王の存在にひれ伏したものだ。

「トス、カーターアッ……あひいんっつ！ んぐつ、
くっふうううっ……いひはあああつっ！」

敵王の名を呼んで一瞬だけ瞳をツリ上げたものの、
その不敬をたしなめる牡槍の一突きにたちまち背中
が反り返って、ピクピクと全身を跳ねさせながら、
ツバキは絶頂の嬌声を響かせてしまう。

「ツバキか。それに残りの二輪も、随分と気持ちよ
さそうにしているではないか……それほど気に入っ
たなら、薬を開発した甲斐もある」

「ぎっ、きひや、まああつ……んぐつ、おうううっ
つ……きしやまの、せいれええつっ！」

枷を軋ませてそう叫ぶが拘束は堅く、しかも快感
に蕩けさせられ、まるで四肢に力が入らない。悔し
涙を浮かべるツバキを、ニヤニヤと下卑た笑みで見
下ろしながら、トスカータの手がツバキの黒髪を掴
み、頭を上げさせる。

「うぐうっ……あ、ぎっ……さ、まあっ……」

「ふふ、確かにな。お前がそんな目に遭い、身体を
根底から調教されているのは、俺の企み通りだ……
しかし、これも平和のためだぞ。それに見る」

向けさせられた先には、肉棒を擦りつけられ
れ瞳を垂れ下げる仲間たちだ。

「お前の仲間たちも、お前と同じく気持ちよさそう

ではないか。憎くて堪らん相手であろうと、こんな
姿を隠せんほど、牝の悦びを得ているのだ。軍人と
して生きるより、よほど心地いいだろうに」

「そ、んなあつ……んぐつ、はふうっつ……こ、こ
ひよっ、はあんっ……ん、だ、あああ……」

快感に抗いきれず、喘ぎながら言い返す姿が、情
けなくて堪らなかつた。そんなツバキの様子に領き
トスカータは自分の入ってきたほうへ、合図を送る
ようにあごで指示を送る。

「まあ——お前がいくら拒もうと、すでに戦況は変
わってしまった。それを教えてやるとしよう」

「なにを……我が国の兵は、たとえ残り一兵にな
ろうと……んふっ、はっ……あ、諦めたり——」

反論しながらも、促されると反射的にそちらに目
を向けてしまう。そしてツバキは、そこで言葉を切
つた。いや、絶句させられたのだ。案内され入室し
た男、その顔を見た衝撃のあまりに。

「おお、これはこれは……相変わず見事な調教風
景ですなあ。我が国の戦華も見事に嵌まり、ウマそ
うに仕上がっている……なあ、ツバキよ」

「そ——ん、な……なぜ……あつぐううんっ!？」

身体中の感覚が薄くなり、血の気が引いた。けれ
ど直後に尻穴を穿る鋭い刺激に、腰が跳ね震えて
ツバキの頭が理解させられる。これが現実だと。

「お……じじ、さま……っ……なんだ、これは……ど
ういうことなんだ、ラディマス大佐っ！」

萎えかけた心が再び奮い立ち、噛み締めた唇が干
切れて血が流れ、真っ赤に染まった瞳が見開かれ
相手を——フィオーレの前線司令である、ラディマ
スIIミルター大佐を睨みつける。

(なぜ……叔父様が、大佐が……こんなこと、あり
得ないっ……あつてはならないだろうっ!)

ショックが大きすぎるが、目の前にいるのは間違
いなく、亡き父の兄であるラディマスだ。笑みを絶

やさなかつた穏やかな表情が、獣欲を滲ませる下卑
た色に染まっている以外は——。

「う——裏切ったのかつ……貴様あああつっ！」

「はっはっは、人聞きが悪い……ワシはフィオーレ
と平和を愛する軍人だよ。故に、祖国を疲弊させぬ
よう、あらゆる手を尽くしていた……というところ
か。まあ、微々たる対価は受けていたがね」

そうそう、先日送られた少女はなかなかだった
——などと敵王に伝え、和やかに談笑している叔父
の姿に、乾いた吐息が喉奥からヒュッともれた。

(少女——対価が、少女……ドリオから、少女を……
女を、もらつただとっ……本気で——)

「本気で——性根まで腐っていたか、外道っ！ 殺
すっ……絶対に殺してやるぞっ、ラディマス！」

ブツツと頭の奥で、なにかが切れる音を聞く。同
時に叫び放ち、金属枷が壊れるのではと思うほどの
勢いでツバキは暴れ、けたたましい音を響かせる。

けれど、そんな態度に聴した様子も動じた姿も見
せず、ラディマスは小さくため息をつき、困つたよ
うな口調で告げた。

「——確かに、女性である君がそう思うのは無理も
ない。だが本当に、被害者だと思われている彼女ら
は、いまの生活を苦に感じているのかな？」

「なっ——」

ポカンと口を開けて、思わず呆気に取られる。欲
望に忠実な自分の行為を棚に上げ、女性たちが苦痛
を感じていないなどと、よくも言えたものだ。握り
締めた拳、その手の平に爪が食い込み、ジンジンと
熱い痛みが込み上げる。

「私たちが、故国と女性のためにどれほど……」

「うむ、望まぬ人身売買などは許されぬかもしれん
……だが、ワシもドリオという国を見てきた上で言
わせてもらおう。調教を受けたという女性の姿も
多く見てきた上でのことだ」

穏やかな中に威厳を含ませ、表情を引き締めたラディマスが言葉が続ける。

「ワシの見る限りでは、女性らは初期に少なからずショックを受けるものの、現在では悦んで男の相手を務めているようだ。そして男も、決して彼女らの人権を踏みにじっているわけではなく、衣食住を保証した上で、彼女らの望む快楽を与えている」

「つつ——詭弁だ！ そうするように躡け、身体や頭を弄り、人形のようにして売買するっ……そんなことが、許されるわけないだろう！」

「——それは、価値観の相違ではないかね？」
動揺を抱えながら叫ぶツバキに対して、ラディマスはあくまで冷静に、紳士的に回答する。

「その価値観の相違は君らも奮起させ、救いだされたい——とされる女性もいるようだ。だが彼女らの多くははまだ病院の施設で拘束され、肉悦を求めてやまないというじゃないか。隔離中に心を病んでしまった女性も、多数見られると聞くぞ？」

「そ、それはっ……すべて、ドリオが——」
「そうだ、つまり——ドリオが与えた女性の新しい生き方と喜びを、フィオーレが奪ってしまったとは考えられんか？」

なにを言っている——と、即座に反論することができなかった。理屈はともかく、理路整然とした受け答えには、彼の確固たる信念さえ感じられる。なにより、自分の身を襲った想像を絶する快感が、深層心理でそれを否定することを躊躇^{ちゅうちゆ}させていた。

「そ……そんな、ことは……ないっ……」
迷いの生じたツバキの瞳が泳ぎ、反論を淀ませ、言葉を濁らせ、声を詰まらせると、ラディマスは穏やかな口調で続けた。

「とはいえ——お前の気持ちも、わからなくはない。諸君の活躍により、一時は国土の大半を奪われた我が国が、いまの戦線まで復帰できたことも、ワシは

非常に高く評価しているのだ」

「つつ……ならばっ、なおさらこの戦いは——」
負けられないはずだと、声を大にして訴えようとするツバキ。しかしラディマスの告げた言葉は、それを正面から否定するものだった。

「だからこそ——いまが潮時なのだ、停戦のな——」
「——てい、せ、ん……だと……」

「そうだ、と。厳かに、叔父の神妙な顔が頷く。
「戦線を回復したところで、我が国は小国に過ぎん戦華の活躍があれば、それ以外の戦場では分の悪い戦いが続いていた。物資、資源、資金、それらで劣る以上、ジリ貧になるのも当然なのだよ」

言いたいことは、痛いほど理解できる。ギリギリの物資を細い補給路で前線へ運ぶ、そのことにも人員は割かれ、部隊の兵数は減る一方だ。そして国民もまた、ギリギリの物資をじわじわと削られ、これ以上に戦いが長引けば、不平が膨れ上がる。

「——だからっ……私を、私たちをつ……ドリオに売ったのか、大佐っ……」

「その通りだ……いや、そう考えてくれても構わんというところか。ワシは生粋の愛国者だ、国民と君らを秤にかけ、国民を選んだのだよ」
(なにが、愛国者だ……国民を選んだのだよ——)

ドリオから送られる女に骨抜きにされ、おそらくは多大な資金援助も受けていたのだろう。見返りを得て内通し、自分たちを窮地に立たせ、捕らえさせた——そんな裏切りを許すわけにはいかない。

「折よく、トスカータ陛下より提案を申し入れ、戦華を渡せば、受け入れてくださると——」
「つつ……ふざ、けるなっ……お前のしたことは、部下を——同胞を敵に売り、屈辱に塗れさせ、誇りを奪った……最悪の裏切りだっつ！」

「——本当にそうなのか？」

叔父の言葉が上から被せられ、同時にピクンッと大きく腰が跳ね上がった。見れば彼の手が乳房の先端を痛み、痛烈に捻り上げている。

「なっつ、ひいひいんっつ!! んなあぁっ、な、にひっつ……おっ、ほおおんっつ!!」

そして背後では腰が僅かな力で緩やかに引かれ、その何倍もの勢いで激しく叩きつけられた。腸肉を深く抉り、直腸を開拓して均し、S字結腸に亀頭を食い込ませる、牡肉の圧迫感——。

「んあっ、ら、めっつ……あうっ、んぐううっつ……くひうっつ、んっつ……くくくくくっつ!!」

瞳をギュッと固く閉じて唇を引き絞り、だらしないアクメ声だけはもろさずに済んだ。けれど嘔み締めた唇の端からは大量の涎と、喘ぎの掠れた吐息が溢れ、緩んだ尿口からはジャッ、ジャッ! と勢いよく牝潮が噴きだし、床を叩く。

全身の紅潮に発汗、尻肉房を震わせて跳ねる腰の動きからも、ツバキがオルガスムスに悶えているのは、その部屋の誰にも明らかだった。

「イッたようだな、ツバキ……それが答えではないか? 屈辱に塗れ誇りを奪われたと言うが、お前の肉体は快楽に対して素直になり、それを与えられて悦べるほどになった。お前が犠牲者と呼んだ女性と同様、女の幸せを得たというわけだな」
「んぎっつ、ひゅっつ……んきゅううっつ……ほん、らっ……こ、こほ、はあ……んっ、ひうっ……」

ブルブルと震え、甘えた声でそう訴えるのが精いっぱいだった。だが相手の言葉通り、自分の肉体がこれ以上ないほど喜び、はしたない反応を見せるのを、自覚させられてしまう。そして牡の逞しい感触を求めて膣肉が痺れっつはなしになり、腸肉がグニグニと蠢いて肉棒を咀嚼しているのが、感覚ではつきりと理解できてしまった。

「思い込みを改めることは、確かに屈辱を伴うだろう

う……だが、味わつてみて理解できたな？ 女としての喜びを、その解放感を——軍人として張りつめて生きてきたお前には、なおさらではないか」

ラディマスだけでなく、トスカータにまでそんなことを言われ、性感帯を弄られる。快楽を注がれる肉体が、その言葉を肯定するようにビクビクと跳ね頭の中がカアツと熱く火照りを孕んだ。

(あうっ、んふううう……わら、ひっ……のおっ……おふっつ、おとおおっつ……)

考えをまとめて反論したいのに、突き込まれた牡脛が腸肉を掻き混ぜる刺激に表情が歪み、唇を突きだして喘いでしまい、軍人としての姿ではなく、牝としての本性を晒してしまう。それを見られ、嘲笑われていると自覚しても、無様なアへ顔を隠すことができず、尻房を振って思考が乱れてゆく。

「トスカータ様と、てめえんとこの偉いさんがおっしやる通りだぜ。自分のケツ穴がこんだけ男に媚びてんだ、とつくに気づいてんだろ！」

「わだっひいっつ！ あひっ、んおお……ひやめっ、おひりいっつ……ひぐうううんっ！」

摘まれた乳首をビクビクと跳ね震えさせ、またも潮噴きを披露しながら、ツバキは腰を振り続けていた。尻穴奥へ熱い进りが浴びせられ、菊壺が淫悦に灼け蕩かされ、背筋が快感に躍動する。萎えた肉棒が抜かれると、大量に注がれた精液と、自ら溢れさせた牝腸汁の奔流がゴブウツと勢いよく噴きだし、刻まれた椿の淫紋が熱く疼き、痺れたした。

(んっ、くふううっ……ち、違うう、私はっ……女である前……フィオーレの、軍人……皆の希望である、せ、戦華……あはあっつ！)

別の亀頭が淫紋へ押しつけられると、待ち望んでいた餌を求めて肉皺が伸び、ツバキの想いを裏切つて、ペニスにむしゃぶりつく。腸肉は自意識でもあるかのように蠢いて、ズブズブと奥まで、一瞬に

して肉棒を呑み込んでしまう。

「ふふふ、そうだ、それが女の幸せなのだ。ようやくツバキも理解しだしたようだ……サイネリアくん、リリイくん、君らも同意するだろう？」

そんなわけがない——と、叫び返したいのに。

新しく挿入された肉棒の硬さを味わうだけで喉が蕩け、甘えて媚びた喘ぎしかもれず、唾液がダラダラと流れ落ちていった。瞳はトロンと蕩けて、視界が桃色に霞んでいる。

「ふ——ふざけるのはありませんわっつ！ 誰がそんなものをつ……尊厳を踏みこじられて、それを幸せだなどと、感じたりするのですか！」

そんな状況で、自分と同じように薬墨とガスによって、際限なく発情させられているのに——刺青を刻まれた乳頭を押し込むように犯されながら、力強く反論してくれる、サイネリアの言葉は最高の励みだった。なのに——。

(そっ……ふ、らあ……んっ、ふぐううっ……お、おひりがあ……んいっ、め、めくれりゅ……ほっ、んくおおおっつ……はふっ、はああ……)

彼女の言葉は嬉しくて堪らないのに、肛唇にてもたらされる狂おしいまでの快感の波が、ラディマスやトスカータの言葉が真実であるかのように、身体中に刻み込まれてゆく。

(ひいっ、ひやあ……くるっ、き、きひやううっつ……んあつ、だめっ、なのにいっ……ふぐっ、くあああ……我慢っつ、むりいっ！)

絶頂に震える腸壁を掻き抉られて肉棒を引かれると、その刺激だけでまたも、牝悦が極まり意識が飛んでしまった。頭の中を白く染めて、ツバキは髪を振り乱し、浅ましくガクガクと身悶える。

「おおぐううっ!? んくあつ、いぐいぐうっ、イクうううっ！ んいっ……くふうううんっ！」

その言葉だけは堪えたいのに、長らくの調教で教

え込まれたせいで勝手に唇が開き、短く小さいながら、絶頂を告げて全身を痙攣させてしまう。

そんなツバキの姿を、ラディマスは横目で窺っており、快楽に屈するアクメ声を聞いたのか、ニンマリと唇を緩め、いやらしい笑みを浮かべていた。

(あ……あ、あ……聞かせて……聞かれて、しまったっ、私のっ……くっつ、うううっ！)

火が点いたように耳が真っ赤に染まり、恥じ入った顔を伏せて唇を噛む。けれどその表情はアクメに蕩ける腸肉を抉り捏ねられると、たちまち緩んだ牝の笑みを浮かべて、跳ね上がったしまった。

「ツバキはあの子だが、サイネリアくんはまだ軍人の心を捨てておらんようだ……さて、それならリリイくんはどうだね？」

叔父の次の標的はリリイのようだった。だが彼の指摘の通り、先ほどまでは僅かながら抵抗を見せていた彼女の様子が、明らかにおかしくなっている。

「そ、それは……うっ、うう……んっ……あつ、な……なん、で……いふっ、んっ、ああ……」

あれだけ痛ましい眼差しでツバキを見つめていた少女の瞳は、ラディマスを見た瞬間から熱を帯びて潤みだし、頬が桃色に上気していた。しかもその視線は、元上司の顔ではなく、股間——軍服のズボン盛りを盛らされる、年齢にしては異常なほど若々しい、牡勃起の膨らみを凝視している。

「ははは、嬉しいものだ。リリイくんは女の喜びというものを、よく理解しているようだ……それほど熱烈に見られては、年甲斐もなく滾りおる」

笑いながらラディマスが近づき、膨らんだ股間をリリイの口元に突き寄せた。それを受けても少女は逃れようとせず、逆に鼻をズボンに擦りつけてヒクヒクと跳ねさせ、虚ろな瞳で男を見上げていた。

「リ——リリイ、しつかりして……っ……なにをさせていますのっ、この変態！ 子供相手……」

すぐにやめさせ、彼女から離れなさいな！」

隣にいるサイネリアが、突然の行動を見た少女を氣遣うように声をかけ、それを誘発した男を口汚く糾弾する。けれど、その言葉さえも、すでにリリーの耳には届いていないようだった。

「ふふっ、この中が気になるのか……まったく、記憶からは消しておいても、本能で覚えたものはどうにもならんようですな、トスカータ陛下」

「そいつがああの特徴だろうに……それより、続きをしてやったらどうだ。その娘の仕込まれ具合も、いいデータになるだろうからな」

そんな二人の会話を遠くに聞き、そして叔父が窮屈そうにズボンのベルトを緩め、フアスナーを下ろして股間を剥きだしにするのを止めることもできず、ツバキは霞む頭で必死に考えていた。

（記憶から、消した……ふっ、くあああ……ああっ、そ、それに、本能で覚えた……どういう——）

余裕のない頭で考えてもわからず、ただその成り行きを遠くから見守るしかない。だが、ラディマスが曝けだした、その黒光りする卑猥な肉塊をリリーの眼前に突きだした瞬間、信じられない光景がサイネリアとツバキの視界に広がった。

「んっ……あ、はあああ……あ、ええ……やら、なん、れ……ひっ、やあっ……んえおおお……」

自身でも戸惑いの表情を浮かべ、言葉を吐きながら、眼鏡をかけた幼い少女はスンスンと鼻をヒクつかせ始める。そして、淫紋が刻まれ、唾液でドロドロになった舌を目いっぱい伸ばし、桃色の愛らしい粘膜を平らに大きく広げ――。

「べえろおおおお……んえろっ、れりゅうううんっ……んじゅっ、じゅべろおお……」

肉塊をベロりと、夏場にアイスキャンディーをそうするように、根元から先端まで丁寧に舐め上げた。寸前まで、抵抗するように歪んでいた彼女の唇がた

ちまち緩み蕩け、瞳はうっとり細められ、開いた喉奥から、ハアアア……と感極まったような、少女の切ないため息が溢れだす。

「ああふううう……んひゅっ、はっ、はああ……お、おいひい……くひい……、おいひい……」

熱く湯気の立つ吐息が肉幹を包み、唾液の跡がテラテラと濡れ光る。濡れたことで臭いを増し、リリーの唇には男の汗と恥垢の濃厚な味が広がっているようだが、彼女はそれを不快に思うどころか、瞳を潤ませて熱っぽくベニスを見つめていた。

（リ……リイ、な……なにを、しているっ……）

愕然とするツバキの目の前で、リイはさらに二度、三度と肉棒を可愛らしい舌先で舐め回し、恥垢を拭いた唾液を吸り、コクコクと喉を鳴らした。隣にいたサイネリアも呆気に取られ、言葉も発せなくなり、瞳を丸く見開いている。

「んふうっ、はっ、えへあああ……んへえ……」

何度も舌を這わせたリイの顔は、この基地に捕らわれ調教を受け続けていたあるときよりも、さらに淫蕩で卑猥な牝の表情に染まっていた。ベニスが好き、快感が好き、などというレベルではない。このチンポがなによりも愛おしい――とさえ感じさせる、恋する乙女の可憐さと発情した熟女の色香、二つの相反する魅力を、同時に兼ね備えていた。

「んうっ、ふうううん……こえ、しゅきい……こつてりして、からみちゅくのお……んっ……」

その少女が幼い唇を尖らせ、亀頭の先端に口づけを浴びせようと伸ばす。けれどラディマスがそこで腰を引き、キスを躲すと、リイは泣きそうなほど瞳を垂れ下げて、媚びるように牡を見上げた。

「ご、ごしゅ、じ……んっ、ご主人、様あっ……ご主人様の、チンポ……お、お世話、させっ……させて、くださいませえっ……んふえええ……」
「リイ!? な……なにを言っていますの、正氣

に戻りなさいな！ リイ!!」

サイネリアが懸命に叫びかけるが、リイにはもう、その言葉は届いていないかのようだった。舌をくねらせて中年男に、その肉棒に媚び、甘えた声でご主人様と訴えかけている。

「ぐふふ、よく覚えておったな。いい子だ、ならば褒美をやらんといかん……しゃぶっていいぞ」

下卑た笑みを浮かべて腰を突きだすラディマス、その言葉に歓喜の表情を見せた少女は、眼鏡の奥に瞳をキラキラと輝かせ、肉棒にむしゃぶりついた。唾液をたつぷりと口内に蓄え、長距離の移動で疲労した元上司――現ご主人様を癒やすべく、肉棒を洗いながら口内粘膜と舌で熱烈に愛し、丁寧に舐め清めてゆく。そうして蕩かし、むせ返るような汚臭を放つ恥垢汁を吐きだすこともなく、クチクチュと口内で泡立して、喉を鳴らして飲み干していた。

「リイ！ お願ひ目を覚まして、リイ！」
「麗しい友情だが、それはもはや無意味――いや、元より意味などなかったのだ、サイネリアくん」
自分の牡槍を熱心に舐め、鼻を鳴らす少女の頭を撫でながら、ラディマスが続ける。それをツバキもサイネリアも、黙って聞くしかなかった。

「君らも知っているだろう？ 過去の事故により、彼女はこの媚薬に対する耐性が皆無どころか、依存と中毒症を抱えておる。そこに新薬を投与し、ワシ自らが調教する、という形を取ったのだよ」
「なっっ――」

彼女の呼吸器が薬品にやられ、刺激に弱いとは聞いていたが――実は彼女の身体が、薬物調教に最適な下地だったなどと、まるで想像もしなかった。

サイネリアの表情は真つ青に染まり、恐怖とショックに引きつる。そしてツバキのほうは、さらにひどい。白い肌が青を通り越してさらに白く透け、完全に血の氣を失っていた。

「日頃からオナニーを欠かさん、淫乱な性格もあってなあ……五日も経てば、すっかり従順なおしやぶり人形になってくれたものよ」

「んあぶつ、ちゅむつ、じゅるじゅるじゅるう……んちゅつ、ぼつ……ごひゅじんひやまあ、はじゅかしいれすう……んちゅつ、ふあむうう……」

「ははははつ、すまん。ちと、お前の自慢をな」

拗ねたような表情のリリイだったが、そう言われて頬を撫でられると、最愛の男に寵愛を受けたかのように頬を赤らめ、笑みを湛えた唇をますます窄めて、絡みつかせるようにペニスに吸いついた。

「着任の頃より、ワシ好みの愛らしさと明晰な頭脳だと買っただけが……こうして可愛がるうちに、ますます愛着が湧いてしまつてなあ。ドリオに渡すことに関係なく調教にも熱が入り、いざ手放すのも惜しかったわい」

要は、下卑た性欲を遙か年下の少女に抱いていたと、下衆な感想を口にされているだけだ。だということに、才媛のフェラチオ顔は最愛の相手から愛情を受けたように甘く蕩け、純愛に浸る乙女を思わせるほどの、淡い恥じらいを浮かべていた。

「この口には、ワシのチンポの味と形を隅々まで刻んでおる。記憶は調教のたびに深層心理に封じておいたが……身体は覚えていたようだなによりだ。どうだ、またワシの下へ戻つてごんか？」

「じゅるんつ、くちゅぼつ、ぬぼつ、むちゅううう……んぶあつ、ふふつ……わたしはいつでも、ご主人様へお仕えする気持ちです……あむつ」

喉奥まで一気にペニスを啜え込み、唇から喉奥までを密着させて窄めると、精液を吸い出すようなストロークを開始するリリイ。熟練の娼婦もかくやという甘く激しい愛撫に、女慣れしたラディマスも堪らず声を上げ、腰を振り立ててリリイの喉奥を犯し始めていた。

「こんな風に喉を突かれては苦しいだろうに、それでも構わんのかね、リリイくん？」

「んぐつ、ぐぶうつ……んぼおおつ、ぶちゅつ、んふううう……もひろん、れふううう……ご主人、しやまのおひんぼお……あむちゅつ、れるおお……こうひてえ、お世話するのがあ……わたしの、女の悦びれふからあ……んぐぶつ、じゅぼおお……」

建前でもなく、言わされている格好でもなく、洗脳されたようでもなく。瞳にはつきりと色を浮かべ、奉仕する男の顔とペニスを映し、キラキラと瞳を輝かせての言葉は、どう聞いても彼女の本心だった。

「さすがは聡明なりリイくんだな……よしよし、褒美として、自由にしゃぶらせてやろう」

「んふううう……つっ♡ほ、ほんろおお……？嬉しい……ごしゅじんしやま、しゅきい……ちんぼらいしゅきい、あむうつっ」

頬を窄めて唾液をジュルジュルと啜り、年端もいかなない少女とは思えない技術と勢いで、筋肉を頬張り、舌を這わせて堪能するリリイ。そのうつとりとした姿を眺めるだけで、知らずツバキの口内には唾液が溢れ、喉奥へ流れ込んでいた。

「つっ……んふつ、ぐつ……くふううつ……はあぐつ、あつ……あんなに、うまそうにチンポを……」

見ているだけで唾液が溢れだし、ダラダラと床に滴り落ちる。その状態で背後から尻奥を貫かれ、跳ね上がった頭が、美しい髪を舞い踊らせる。白く血の気の引いた顔には、興奮の上気が桃色の淫欲を浮かべさせ、だらしなく蕩けさせてゆく。

「……リイっ、お聞きなさいっ、リリイ……ほらっ、ツバ……もつ……声を……にしてっ……」

蕩けた頭と揺れる思考が、そして下腹部に渦巻く疼きと発情が、聴覚まで奪っていた。おそらくはサイネリアが叫んでいる、けれどその声が、とてつも

なく彼方から聞こえるように、小さく掠れている。

（これ……これが……女の……しあ、わせ……）

視界が歪んでいくのに、リリイの姿だけははつきりと映っていた。これまで見たことがある、辛そうな、苦しげな表情ではない。すべてから解放され、一人の男に尽くす悦びに目覚めた、晴れやかで眩い表情を見せている。それを導いたのは、やはり自分ではない——ドリオの王と、それと通じていたラディマスという、二人の男だ。

彼女は彼らと出会ったことで、それまでには得られなかった幸せと悦びを味わい、こうして嬉しそうに噛み締めている。原因は確かに薬だ、けれどいまの彼女の表情は、それだけが理由ではない。

「気持ち、いいんだな……リリイ、そんなに……男を相手にし、奉仕して、抱かれることが……」

散々吹き込まれた、女としての幸せな生き方——それを口にし、自分もそうなたらという考えがチラつくたびに四肢が震え、背筋が痺れたのだ。

「そ、うつ……そん、なにいいっ……あんつ、あぐつ……あひつ、んひいいいっつ……」

尻房を鷲掴みにされ、叩きつけられた腰を押し当てられながら、菊壺の最奥に粘液を注ぎ込まれる。フルフルツと肩を震わせてアクメに悶えながら、ペニスを抜かれる感触に寂寥感を覚え、切ない感情が胸を穿つようだった。

（はあつ、んつ……離れて、しまった……うくつ、ううつ……どうして、こんなにも……）

身体がなにかを欲している、いや、なにを欲しているのかは、うつすらとわかつている。けれど、それを求めていいものなのか——葛藤は言葉で躊躇わせ、ツバキはたまらず、肉棒にむしゃぶりつくリリイに羨ましがめ視線を向けてしまつていた。

「ふふふ、どうしたツバキよ……物欲しそうな顔をしているようだが、なにが気になっている？」



つつつ!! くあつ、んひああつつ……あつつ♥
「くくくつ、どうしたツバキよ。よそ見をしておつて、すでに別の男探しをしているのか?」

尻肉を鷺掴みにして引き寄せられ、子宮口に亀頭を捻じ込み、グリグリと腰で螺旋を描き、トスカータがツバキの最奥を蹂躪する。その刺激に目を白黒させ、ビクビクと背中を跳ねさせながら、ツバキは蕩けた瞳で王を見つめ、キスをねだる。

「んひゅうう……んむちゅつ、じゅるおお……んふう、ひ、がうう……ひよんな、ころお、しゅるわけない……はむつ、ちゅばつ、じゅばあ……」
なにか大事なものが消え、それが気にかかったように思ったが——いまはただ、なにも考えずに楽しんでよかったのだと思ひ直す。

(そう、らあ……んくふううつつ?! いひつつ、んはああ……ああ、これ……こえ、しゅき……奥までされるのつ、しゅきいっ!!)
子宮を小突かれ、数回目となるポルチオアクメに表情を崩したツバキは、それを見られぬよう夫の首筋に抱きついて、膣肉を激しく痙攣させた。墮ちた戦華のリーダーはそのまま、尻奥で躍動し膨らむ肉棒の感触を敏感に察知し、子宮姦の悦びに咽びながら、菊壺をもキツく締めつける。

「ひゅぐつつ、おうううんつつ……んつくうつつ、んひゅぐつつ……んはあ……んひゅぐつつ♥」
ビクビクビクンツと大きく弾けた肉棒が、腸奥に精液を注ぎ込んだ。熱い粘液に蕩けた菊肉を犯され、灼き焦がされる快感に身震いし、萎えた肉棒を排泄するように、腸が蠕動を開始し、菊穴が裏返って緩みだしてゆく。

「くひゅうつつ……んはつ、ひはあ……んぐつつぶぐううつつ?! おつほ、ほふううつつ……」
萎えた肉棒が抜け落ちるや、すぐさま別の牛肉が挿入され、精液がこぼれることなく腹へ溜め込まれ

た。一方で、いまだ射精をせずに硬く滾り勃つ、トスカータの牡槍に膣壺を穿られ、挟られ——ツバキはあられもない表情で、夫に縋りついて喘ぐ。
「んぶふううつつ、ふぐつ、んいっ……いひいっ……ひゅぐつつ、おおううんつつ!!」

鼻の穴を開き、菌を食い縛った、全力でセックスを味わうツバキの、あまりに浅ましい牝の表情。清楚で気高く、強く美しい——そんな評価を受け続けた戦華のリーダーとは思えない、あまりにも無様で下品な姿を晒してしまっている。

(んはああああ……わ、わらひはあ……い、いまつ、す、すぐおつつ……んつつ、すぐううつつ……あつ、あはあ……い、淫乱つ、淫乱に、なつ……なつひやつて、りゅううう……んぐうつ!)
そんな自分の姿を客観的に捉え、惨めさに下腹部が疼き、迸る快感に足先がキュッと丸まって、アクメの波にビクビクと身を跳ねさせた。

「ぐははは! どうだ、ツバキよ! 女の幸せを感じているか? いや、聞くまでもなかったな、その顔を見れば一目瞭然よ!」
「あんつ、やつ……やらつ、見ひやつ、やつ……んつ、んぐじゅつ、じゅるつ……んんうつつ!!」

肛姦オルガを迎えた表情を見られ、そのまま唇を奪われ、羞恥と快感にまたも小さく絶頂を迎えてしまふ。小刻みに動かされる腰の動きに、子宮口をネチネチと挟られ、亀頭を扱かされ、何度も背筋が跳ね返って、淫らな顔を晒させられていた。
「ふふふ、この喜びをフィオーレの女たちに伝え、皆で分かち合いたいとは思わんか?」
「んぐうううつつ?! そ、そんらのつ、ひやめつ……らめにつ、きつ……決まって、いりゅつ……らろおおつ! ひあつ、んつあ……つ!」

即座に答え返すも、望む返事でなかったことを叱るように、男の広がった肉傘がGスポットを押し込

んで挟り、ガリガリと引つ揃いて快感を注いでくる。背筋を反らせて真上を向き、ピンと舌を突き上げたツバキの表情は見る間に蕩け、冷静な思考力が桃色の淫らな感情に取り込まれるようだった。
「そえひやあ……つ! あぐつ、んおおおつつつ!! おぐううつつ……んぐつつ、くいっつ!

絶頂に視界を明滅させ、両腕を伸ばした体勢のまま、しつかりとトスカータにしがみつき、全身で小刻みな痙攣を晒させられる。涙目になり、引き締めた唇の端と鼻穴から荒い息を吐いて、ツバキは震える顔をなんとか持ち上げた。

「んふつ、ふううつつ……い、いひつ、なりい……あ、あんにやつ、はげしいのお……んぐうつつ!」
「ふははは! だがそれが心地よく、幸せなのだろう……それが愛されるということだ! その気持ちのよさを伝えることの、なにかいかん!」

「んはああああ……ひやぐつつ、んひよおおつ……ひよえつ、はつ、んくあああ……こく最奥の肉壁を捏ね回され、巨根で開ききつた膣口から、ダラダラと淫涎が垂れ流れた。王の問いに答えようとした思考は、すぐさま快感で霧散させられ、本能が反射的に口を開かせる。

「ひがつ、ううううつ! んうつ、いいつ、いいのおおつ! こんらつ、悪くつ、なひいっ!!」
「ならばフィオーレにも伝えるぞ! 女ども全員に牝悦と喜びを広め、驕けてしまふぞ!」
「あうううんうつつ! しゅきつ、にいいつ、しろおおつ! ふぐううつつ、んつくうううつつ!」

抱き寄せられ、子宮に捻じ込まれた肉棒が激しく痙攣し、子宮口を拡張するように大きく膨らむ。根元から小さな振動が込み上げ、性欲の気配が子宮に近づくを感じ、ますます波打った肉傘がベニスを

おおむね300年前
人間界をおびやかし
当時の英雄達によって
倒された「魔王」

その魔王が
復活したとの噂が
東の王国に届いた

東の勇者の一人
シエリオ・シェーラは
東南方王国議会の
命を受け

仲間とともに
先代勇者と親交が
あった北の小国
シルトランド王国へ
なんとなく旅立った

何やかやあって
王都に辿り着いた
ものの

一行は着いたその足で
魔族の軍勢に囚われて
しまった

勇者ご一行の
運命やいかに!?

Lust Resort!!

ラストリゾート セラテム

MISS BLACK

ミランダ・ミンリイ
モンク おんな
Lv27
じょうたい：
バインド

シエリオ・シェーラ
ゆうしゃ おとこ
Lv27
じょうたい：
バインド



不安と恐怖におののく心とは裏腹に
陵辱をうける仲間の魔法使いの
痴態を目にした勇者と修道士^{モンク}の身体は
淫らな期待に――

雑に勝手な
脚色をするんじゃ
ありません!!

フッァー!

お仲間がエロいめに
あつてるのに余裕だな
メイドさん

ちっと貧相だが
こういう体も
悪く――



ごめん俺には
難易度高いわ

…機械人形
搾精か…

マジかお前
レベル高えな



うふふん
さあさあ

やっ!?

あっ!?

やめなさい!

こっちもゴーモン
しましうねー



あっ
あの…っ

お王様は！
王様は
どうしたの!?

んー？
私達が召喚した時は
もう王様
いなかったけど？

王族っぽい人間は
お姫様しか知らないわ

！
あわせてっ



会ってナニする
気かなー？

ダメよ魔王様は
お忙しいの

ひゃう

え

魔王…って

あんっ



まずはお話
しましょうねー

隠れてるお仲間とか
帝国軍のこととかねー

そんなの居ません！
私達は4人だけっ

はいはい

ホントかどうか
正直そのなココに
聞いてみましようねー

うぐ

あ

す

やつ

いやあつ

す

セクシ



あらー？

何だかイイ匂いが
するわね？

セクシ

!?

今朝又いたあと
くびれの裏側あたりに
残ったままになってる
白いアレのスゴイ匂い
…みたいな

セクシ

セキッ
セキッ

なっ

そんなワケ
ありませんっ！
ウソです！

そうよねー大地母神教会の
フタナリ神官がするのは
寸止めオナニー修行で射精は
禁止だもんねー？

そそう…
です

日課の修行で
いっぱい先走らせた
おツユに混じって
溢れちゃっただけよねー？

あ…
う…う

それは…っ
魔法で付けられてる
だけのものっ

ひっ

ふーん？

あいつ

私のじゃなくて…
だからその…っ
か勝手にっ

んうっ！

へえー？

それじゃあ
ちよっとコスっただけで
今にもイキそうに
ビクビクしちゃっても
仕方ないな

んうっ

そそうっ

そうなのっ
仕方ないの…っ

でもコレ
完全に根付いちゃってる
みたいだけど？

んー？

…ええっ!?

ほっとけば2-3日で
消える術だけど

使ってる限りは
消えなくてそのうち
定着して産まれ「付き」と
同じになるの

そ…そんな…

この色カタチ…
ずいぶん
お気に入りなのね
曲がっちゃってえ

やっ

ちがっ
ちがうう



カラーン

プリンセス
セリア

貴女は
病める時も
健やかなる
時も――

はい♡
誓います

めでたき日に
望まぬ来客が!

これを愛し
助けることを
誓いますか?

よろしい
それでは

誓いの
くちづ――

敵襲――

獣欲の花嫁

～オークに妻られしエルフ姫～

漫画
COMIC

ぱふえ

オーク軍
だ――!!

おのれ!
この吉日に
迎え
撃つぞ!

はい!







それどころ
オデの嫁ニ
ふきつこー

たいした
魔法ダ!



!!



オーク王と
エルフ姫ノ
結婚式まで
ナァ!!

な...!?

今日ハ我ら
にとりてモ
めでたい日
なのダ

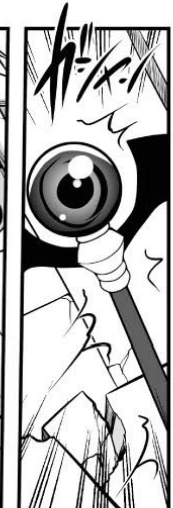
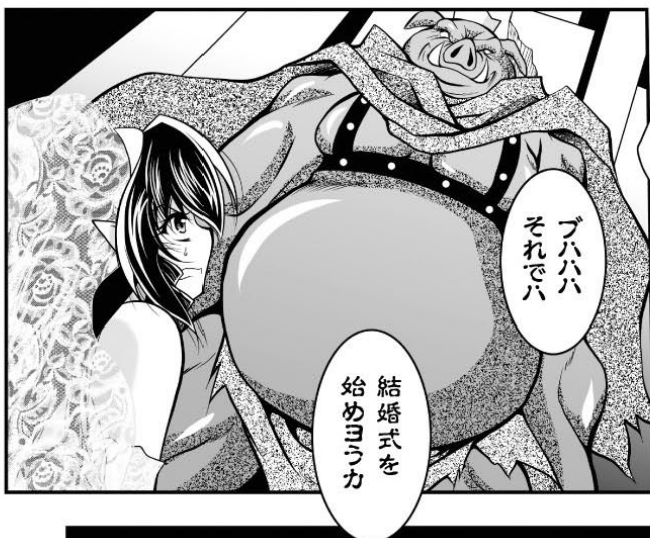


この距離なら
かわせない!

穢らわしい
戯れ言を!

私は豚などと
結ばれる気は
ありません

ヴァーミリ
オン...



カクーン

カクーン

姫という立場に
生まれたからには

ゆた〜と〜と
出てきて
そんな心配も
なくなったと
言うのに…

…それでは
誓いの言葉を

意に添わない
相手との結婚は
覚悟していました

ガハハハ
面倒はいや
誓う誓う

汝セリアは
これを愛し
助けることを
誓いますか？

私が逆らえば
王子の命が…

ち…うう
誓い…
ま…す…

でも…
オークと結婚
なんて…嫌…



神に仕える母娘が行き着くエンディングは
恥辱に満ちたウエディングか、それとも……

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

母娘巫女

淫花は肉嫁に墮ちる

小説 **夜士郎** 挿絵 **たけうまに ごう 竹馬2号**

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン 1

美しい、と思った。

目前で舞う一人の少女。その姿に、爛鬼は見惚れていた。

「いぎいぎい！」

「ぎやああつ！」

「糞……ひぎいがあつ！」

仲間が次々と屠られていく。

腕を断たれ、腹を開かれ、首を落とされて、血飛沫を散らし死んでいく。

人の寄りつかぬ、廃倉庫の中である。窓から差し込む月光に、刃が煌めく。

濃密な血の匂いに満ちてゆく世界。

少女はそのただ中で、優美なる舞を披露していた。

彼女の下半身は真っ赤だ。まるで、鮮血に染め上げられているかのよう。

それほどに赤い緋袴を穿いている。

上衣はうつつかわつて、眩いばかりの純白の小袖を身に着けている。

巫女の——神職の、衣装だ。

舞い踊る少女にその衣装は、あまりにもよく似合っていて。

ただ。

その両手で握られた無骨な日本刀が——

異様だ。

「せああ！」

桜色の唇から裂帛の気合いが迸り、

少女の前には、数匹の「鬼」がいた。

鬼——それは人の世を混迷たらしめる、魔のものの共の総称である。

どうも黒い体表、人にあり得ない巨軀

と筋骨。身体中にびつしりと、鱗を張りつけた者もいれば、腕が四本背中から、生えている者もいる。

異様、異常、異形、異物。

人の世にあつてはならない異なる者たち。それが、鬼と呼ばれる化け物だ。

爛鬼も、それである。

少女は、それを滅ぼす者である。

退魔巫女——美倉沙耶。

恐れをなし、動きを止めた鬼たちへ、

沙耶は白刃を突きつける。

「……観念なきさい、鬼共。人の世に、

生きる場所などありはしない」

鋭い瞳はその刃のように。

目前の、鬼共を撫で斬る。

(おお……)

その視線に——爛鬼の背中がゾクゾクと震えた。

鬼に産まれて百年を超えるが、人間にこんな感情を抱いたことはなかった。

(あんな小娘に、俺は、何を——)

月明かりに浮かぶ少女の面には、まだ幼さが残っている。つりあがり気味の瞳は大きめで、小鼻はツンと尖っている。花びらのような唇は、リップク

リームで艶めいていた。

しつとりと濡れたような輝きを見せる黒髪は、日本人形のようなおかつぱ

で、少女をなおさらに幼く見せる。

だが、そんな幼げな面貌といえど、

体つきは女性らしい丸みを帯びていた。

袴の内側で張りつめた尻の肉。和服

にはそぐわない、胸部の膨らみ——細く可憐な肢体なのに、小玉のメロンを

二つ胸元に実らせているかのような、豊満極まりない乳房である。

美倉沙耶とはそんな、大人と子供の境に在る、色づく蓄のような少女だ。

「くっ……！」

「お、おのれえつ……！」

「畜生、沙耶めがっ！」

仲間を殺された鬼共の怨嗟が少女へと突き刺さる。

その呪詛を前にして、けれど沙耶は

一歩も退かない。怯まない。

凛と前を見据える——その視線。

「情けない。こんな弱い乙女を相手に、何を恐れているの？」

沙耶の唇が、つりあがる。

「なにをっ！」

「キサマアア！」

挑発に乗せられた数匹が、彼女へ向かい突貫してゆく。二メートルを超える体軀、体重は三百キロを超えようか

地に響きを上げて向かいくるそれをまとも

に食らっては、少女の矮軀などたちまち

ひき潰され、自動車事故のような悲惨

を迎えることになるだろう。

ふ、と沙耶が笑った。

小袖が揺れ、緋袴が翻る。巫女が神

前で舞うがごとく、肢体は流々と動く。

——爛鬼の目は、巫女服の内側で躍

動するその肉体を確と捕らえていた。

鬼首を断とうと伸びる細い右手。追

随して、跳ねあがる乳房。

「イギヤア！」

首筋を半ば切断され、血飛沫を上げる鬼に構わずまた別のへと向き直る。

繰り出される鬼の豪腕を、しなやかな両脚を折り曲げて身を伏せ避ける。

同時に細腰を捻り、掬い上げた刀身は

鬼の胴を逆袈裟に斬り上げた。

「グギイイイ！」

裂けた腹腔からどぼどぼと鬼のはらわたがこぼれ落ちる。

その無惨に顔色ひとつ変えず、薄桃

色の唇がシュと窄まり息を吐く。鋭い、

矢のような突きが鬼の心臓を貫いた。

「ガ……！」

小さく呻き、絶命し倒れ伏す鬼。

「はふ……！」

と息を吐く沙耶の首筋はうつつすらと汗ばみ、紅潮している。小袖の胸元ま

で汗が染み込んで、豊球を包む下着の

型が浮かびあがっている。

鬨争の興奮に上気する頬。額やうな

じに、髪の毛が張りついていた。

(ガキのクセに、なんとも色っぽい)

なんて、爛鬼はそんなことを思う。

もう斬られる心配がないから、呑気

なものである。

「ひっ……ひいひいひい！」

「や、やつてられるかあつ！」

牙え渡る沙耶の剣技に恐れをなして、

数匹の鬼が逃走を始める。だが。

「逃すか！」

少女の豊満なる胸元から引つ張り出

された数枚の符が宙を駆ける。

「界！」

顔の前に二本指を立て叫ぶ沙耶。

同時に符は鬼共を取り囲み、中空に

制止した。

「けっ……結界っ……！」

それは魔のものを捕らえ、外へ逃さぬ法力の壁。沙耶の行使する符術である。

「た、助けっ……もう、人に手は出さねえ、だからっ……」

「そう言っつて、助けを求めた人間を……何人、食べたの？」

「そ、それはっ……イギヤアア！」

答えに窮する鬼の頭蓋を唐竹割りに「——悪鬼羅刹を調伏する。それが私の、使命」

「ぐぎやああああ！」

また一匹を肩口から斬り落とす。「あなたたちに救いなどない。さあお死になさい」

少女の面貌は冷酷に凍り、容赦のない刃が鬼共を切り刻んでいく。

（ああ……いいなあ。とてもいいなあ）

爛鬼はそれをうっとり眺めていた。容赦なく、慈悲なく、さながら悪鬼がごとく鬼を滅する美しい少女の姿を。

——最後の一匹まで、駆逐される。「ふ、う……」

刃を振り、血糊を飛ばし、可憐なる退魔巫女は息を吐く。

倉庫の中は一面の血の海だ。鬼の残骸が、散らばっていて。もはや動くものはない。

「終わったよ……母さん」

刀を鞘へ収め、少女は踵を返す。爛鬼はその背中へ、涎の滴るような視線を向けていた。

ああ。欲しい。沙耶が欲しい。

彼女こそ。

（我が花嫁に——相應しい）

「……？」

何かの気配を感じたのか。沙耶が、背後を向く。

けれどそこには、何もないのである。母のようになりたいと。ずつと、思っていた。

「お帰り、沙耶」

「ただいま、母さん」

神社へ帰宅した沙耶を出迎えたのは、もう深夜になろうというのに巫女服を着たまの母、美倉佳奈だった。

憂いを湛えた伏し目がちの瞳が、娘の身体を上から下まで眺め回して、ホツとしたように綻ぶ。

「よかった……怪我はないよね」

母も、元退魔士だ。鬼と戦うことの熾烈さは、誰よりもよく理解している。

沙耶の使命は、母から受け継がれたものである。魔を調伏する退魔の力。美倉の一族は、それを代々繋いできた。いつ命を落とすかもしれない、危険なお役目だ。それを娘に背負わせたことに、母が心を痛めているのは知っていた。

けれど沙耶はそのお役目が母から受け継がれたことを、何よりも誇りに思っていた。だから——。

「うん。私は大丈夫。だって母さんの娘だもん」

屍山血河を踏み越えてなお、沙耶は子供らしく微笑むのだ。

「だから、母さん。もう、寝て？」

このところ、少しだけやつれた母の顔を窺い、沙耶が言う。

娘の役目が終わるまではと、気を張ったままであった佳奈は微笑むと、

「……ふう」

と息を吐く。その物憂げな表情は、沙耶がドキリとするほど色つばい。

「今日も何か……されたの？」

「ん……なんでもないわ」

微笑み首を振る母の様子は、何かあつたと如実に語っていた。

このところ。神社の土地を狙つての、ヤクザの嫌がらせが続いていた。

直接的に脅しつけてきた連中を、沙耶がとつ捕まえ、叩きのめしたことがある。少女に暴力で屈して、連中は、ならばとばかりに執拗で陰湿な嫌がらせを始めたのだ。

根拠のない噂を流されたり、ゴミを撒き散らかされたり犬の死骸を捨てられたり……そんな嫌がらせが連日続けば神経もまいってくるというものだ。

由緒ある神社、その権威を守るには、世間体というものも必要だ。それなのに、ヤクザと係わっているというだけで、周囲は好き勝手な噂で退屈を紛らわそうとする。

退魔の力を沙耶へ譲り渡し、普通の人となった佳奈の身体は柔らかに肉付きを増している。胸元なんて巫女服の上からでもわかるくらいに大きくて、参拝に訪れる男性たちの視線を釘付けにしてしまうほどだ。

あの男好きのする身体で奉納金を募っているのだ——なんて。そんな噂まで、流れていた。

（馬鹿にしてるっ……！）

何度か警察に相談したが、まともに動いてくれたことはない。

まったく、あてにならない。

（……そのうち本当に、向こうもカタをつけなきゃね）

「大丈夫よ。沙耶ちゃん心配しなくていいの」

退魔の役目を負った娘に余計な心労をかけまいと、母は平氣そうに言う。

父、美倉一樹は今、他県で行われている神主の会合で不在だ。

家に一人で、不安な筈なのに——。母は、微笑んでくれる。

優しく、強い。

そんな彼女のように、なりたかった。だから。母を傷つける者は許せない。笑顔を浮かべる沙耶の——、

（後悔させてやる）

心中には……黒い炎が燃えていた。

「……それで俺らは、そいつを攫えばいいんですね」

ソファに腰掛けた、安藤斎の問いに「ああ」

向かいに座る瘦せた男が頷く。

「お前らもこの女には、痛い目にあっているのだろう」

「いや、まあ——」

安藤は決まり悪げに、脂の浮いた頬を掻く。彼の目の前、机の上には一枚の写真が張りついていた。そこに写っているのは、巫女服を着た美倉沙耶だ。その写真に向けて、いくつもの、きつい視線が注がれていた。

安藤の周囲に立ち並ぶ、男たち——厳めしい顔つきの彼らが滲ませる雰囲気は、一人の少女を相手にするにはあまりに剣呑だ。

雑居ビルの一室である。表には、安藤工業、と表札がかかっている。

「あの神社が欲しいのだろうか？」

「今は暴対法が厳しくてねえ。あまり直接的な手段には出られないんですが、しかしまあ——」

安藤の顔が、歪む。

どこからどう見てもまともな集団ではない彼らは、いわゆるヤクザと呼ばれる存在だった。

神社の土地を狙い、その家族を脅しつけようと乗り込んで——安藤一家は、たった一人の少女に叩きのめされた。ヤクザのメンツなど台無しである。

「いいでしょう。このガキをヒイヒイ言わせられるんならねえ。ヒビ——」

安藤の、男たちの唇がっぴりあがる。ひどく加虐的な笑みだ。人に暴力を振るうことを、躊躇しない者の顔だ。

そんな面々が。

「では頼む。日時は言った通りに」ソファの男が立ち上がった瞬間、怯えに染まった。

「それにしても」

ヒビ、と安藤が、卑屈な笑みを浮かべて男の顔を窺う。「鬼であるあなた様が人の手を借りようとは、ねえ？」

——男の頭蓋には角が生えている。

「なあに」

男は、安藤に合わせるように笑う。

「愉しきは、多い方がいいだろうよ」

「ヒビ。ちげえねえ」

安藤の愉悅に満ちた笑み。

（もうすぐだ）

男の、爛鬼の股間が滾っていた。

もうすぐお前を、俺のものにしてやるぞ。その身体を、その肉を、存分に味わい尽くしてやるぞ。

美倉沙耶。我が花嫁よ——！

街から外れた廃倉庫。

ついでこのあいだ鬼共を調伏したその場所に、沙耶は立っていた。

巫女服に、日本刀を掲げている。

つりあがった臍が憎悪に満ちていた。

（母さんつ……！）

母が、攫われた。

退魔士ではない彼女には、鬼の手が及ばぬように護符を持たせてある。

その上、神社には魔を寄せつけられない結界も張られているのに、佳奈は忽然と姿を消した。

そうして——この場所を指定した封筒が、沙耶の下へ届いたのだ。

「来てやったわよ！ 姿を現せ！」

叫ぶ。

その、彼女の声に応えたように、天井に設置されていたライトが次々と光輝を放った。どこからか、電気を引張ってきているようだ。

「ヒビ。来たかい、沙耶ちゃんよお」

ライトに照らされながら現れたのは、見覚えのある男たちだった。

安藤工業の安藤斎と、その一党。

神社の土地を狙い、嫌がらせをかけていた張本人共だ。

「やはり……あんたらか」

鬼には破れぬ結界も、人間を相手に効果がない。だから、もしかしたら、と思っただけだった。しかし、まさか、人攫いなどという強行手段に出るとは。

——愚かな。

沙耶は刀を握りしめる。

そうとなれば、遠慮はいらない。母を人質に脅迫させる暇など、微塵も与えてやるものか。即座に痛めつけ、居所を吐かせてやろう。

と、沙耶は安藤へ向かおうとした。その時だ。

「まあそう、慌てるな」

ヤクザ共の背後から、一人の男が姿を現す。

痩せた男であった。

その姿は人間そのもので、けれど頭部に生えた角が、男が鬼であると教えてくれる。

「鬼……鬼と人が、手を組んだの？」

「利害が一致したのだよ」

と、鬼が指を鳴らす。

「ムウウ、ムウ！ ムウ——！」

「か、母さんつ……！」

男たちに引きずられるようにして、後ろ手に縛られ、猿轡を噛まれた佳奈が現れた。

「……母さんを放しなさい」

さもなければ斬ると。

瞳に殺意を湛え、ヤクザ共を睨みつける。男たちが、肉食獣の前にした小動物のように凍りつく中、鬼だけはその口の端に笑みを浮かべ——母の喉を、掴んだ。

「月並みだが、言わせてもらおうか。刀を捨てろ。母の命が惜しいなら」

「……ッ」

齒軋りをする。

相手がヤクザだけなら、母を救出することは難しくない。

けれど、鬼を向こうに回しては——。母の目を見る。

母が、見返してくる。

私に構わず、鬼を倒せと。

そう、言っていた。

「……ほお」

鬼が、感心したように息を吐く。

——刀を暗眼に構えた、沙耶の姿を目にして。

「こ、小娘えつ！ 母親の命が惜しくはねえのかっ！」

安藤が、がなりたてる。

「——母も、元退魔士だ。使命に殉ずる覚悟は、できている。私も、その覚悟は同様に、完了しているッ！」

凜と、叫ぶ。

まさしく一本の日本刀のような、そ

の美しい立ち姿よ。

「ああ、それでこそ、それでこそ」

鬼が、感極まったように呻いた。

「そういうキミであるからこそ——踏みにじり、屈服させねばならないのだよ。クハッ！ フハハハハハ！」

鬼の全身が軋み、四肢が膨張する。筋繊維が肥大しているのだ。

「我が名は爛鬼！ 美倉沙耶よ、我がものとなれ！ お前の身体、我が花嫁としてもらい受ける！」

「気色の悪い……ことを、言うなあ！」

沙耶が、叫び。

爛鬼へ向かい、駆けてゆく——。

「あんの糞ガキヤ……どこまでもヤクザを舐め腐りやがって……」

憎々しげに、安藤は呻く。

沙耶と鬼は戦闘状態に入っていた。

赤白煌めく巫女服が疾駆し、人の速度を逸脱した剣撃が、爛鬼の身体に幾筋もの傷を描く。

だが——。

「こいつ……!!」

沙耶の顔に困惑が浮かんでいる。

爛鬼は斬られるに構わず、なお前へ進み沙耶を捕らえようと手を伸ばすのだ。そのために、刀身を充分に振り抜くことができず、鬼の強靱な体躯へ致命傷を与えられない。

とはいえこのままでは、いずれ爛鬼が敗北するは必定だろう。

「どうしますか、カシラ？」

「どうするか、カシラ？」

「どうするか……」

「どうするか……」

「どうするか……」

爛鬼が死ねば、次にやられるのは安藤らだ。戦いを見ればわかる。沙耶もまた、化け物だ。敵う相手ではない。

「あの鬼さんの言う通りにするのさ」

沙耶がこの工場に訪れる寸前に、指示されていたこと。それは——。

「ぶ、はうっ……」

佳奈の猿轡を、解く。

涎の絡まった荒縄が床に落ちる。

「はあっ、はあっ……あ、あなた、たち、なにを……」

口は自由になれど、腕を拘束されたままの佳奈は、周囲に立つヤクザたちに怯えた視線を向けていた。

「ビヒ。なあに奥さん、そう怯えなさんな。ちいっと楽しませようや」

啜う安藤の右手が巫女服の上から佳奈の豊かな乳房を握りしめる。

「——あウウッ！」

脂の乗った人妻の肢体が、ビクンと跳ねた。なかなか感度がよさそうだ。

「な、何をしようというのです……、恥を知らなさいっ」

「ふふ。恥イ？ そんなもの、知りませんなあ……ほおれっ！」

と。安藤は、小袖の襟元へ両手をかけるや——下着ごと強引に、左右へ引き裂いたのだ。

まろびでるのは、熱れに熱れきった豊満なる肉の果実。色素が沈着し、茶色に染まった乳頭がむしろ淫猥なその肉球が、ぷるん、ぷるんっと跳ね、躍り——

「き……きやああああつああああ！」

佳奈の悲鳴は、生娘のようであった。

「かっ……母さんっ！」

沙耶が、目を剥く。

己の母親が、野獣がごとき男共に囲まれている。胸元を開かれて、乳房も露わにさせられ揉まれていた。

「や、やめっ……んくふううっ!!」

必死に上半身をくねらせる母の、その口に、ヤクザの一人が股間を押しつけていく。ズボンの前が、開かれていて——そこに見えている器官は、初心な沙耶にとつてあまりにおぞましいモノであった。

ペニスだ。おちんちん——だ。

そんなモノを、母に押しつけている。

「きっ……貴様らああああああ！」

凄まじい怒りが脳を灼いて。

「余所見とはまた余裕だな」

「しまっ……グウッ！」

わずかな隙を突いた爛鬼の腕が、沙耶の体軀を薙いだ。壁際まで吹き飛ばされ、叩きつけられる。「ガッ……!!」

衝撃に目が眩み、身体が軋む。

「っ、く、ああ……」

刀、刀は……まだ握っている。

立て、立つてっ……戦え……。

「はあ……はあ、はあっ……」

何を考えているのか、爛鬼は追撃もせず立ち止まっている。こちらを眺めて、にやにやと口の端を歪めている。

——母の苦鳴に心を惑わされる退魔士の、無様な有様を嗤っているのだ。

「ヒグウ、ングジゅ……げぶ、い

や、やめっ……んぶうじゅるっ!!」

「おお、いいぜえ奥さん、奥さんの口の中、あつたけええ……」

母の、優しい言葉を紡いでくれた母の口腔に、ヤクザの男根が潜り込んで

いる。沙耶と同じ色艶の黒髪を掴み、頭蓋を逃がさぬようにして、ズボズボと肉棒を出し入れしているのだ。

「はむううっ、んぶぶっ！ んぶぐっ、ぐじゅるぶっ！ じゅぶ、んじゅゅ！」

喘ぎ、苦しそうに寄る母の眉根。

男が腰をぐっっと押し込むたびに、放り出された乳房がぶるると弾み、私たちの情欲を刺激していく。

「母さんっ、母さんっ……!!」

退魔士としての覚悟はあった。傷つき、斃れる覚悟。肉親を失う覚悟。

だが、これは、こんなものは——。

生々しい、肉の色。女を組伏す男の獣欲。それは、乙女である沙耶にとつて、たまらぬ生理的嫌悪を呼び覚ます刀を持つ手も覚束ない。

——いやだ。こんなのは、いやだ。

「母さんをつ、母さんを穢すなあ！」

「ならば——どうする？」

爛鬼が、ぬるりと問うてきた。

「う……うう、ううううう……」

私は。私は——。

◆……母を助ける

↓シーン2へ

◆……鬼を倒すことが私の使命

↓シーン3へ



救国のブレイブブライドは
醜き老王の淫呪に身を焦がす



呪縛の花嫁・ヒルダ

姫剣士は老練なる手の内に墮つ

小説
NOVEL

うつせみ
空蝉

挿絵
ILLUSTRATION

まうめん

「撤退！早くっ！殿は私が務める。皆、退きなさいっ……！」

血の香り立ち込める戦場に、ひと際凛と轟く声音。劣勢の味方を鼓舞し続けたその声に、痛切な悔しさが滲む。

古き歴史持つ国タリスの姫にして、随一の剣の使い手でもある娘、ヒルデガルド。ヒルダの愛称で広く民にも親しまれる姫剣士は、返り血に濡れた武器を纏い、後頭部で結わえた長い銀髪を靡かせて、一人でも多くの同胞を逃すべく最後まで奮戦した。

稀代の呪術師ベルバルト。彼が王として率いる隣の大国。その猛威に屈さんとする祖国の民の窮状を思えばこそ折れぬ鋼の心を得、姫剣士は刃振る手と、踏み止まる足に力を込め続ける。

（同胞の無念を思えば、この程度の痛みなど……。絶対に屈さぬ！）

格式と誇りを重んじるタリスの騎士たちは原因不明の流行病により、多くが不調のまま出陣。結果、無念の面持ちで散っていった。病はベルバルトの呪術によるものとの噂がまことしやかに囁かれる状況下にあつては、士気が上がるはずもない。わずか半月の交戦で戦力の八割を失う大敗を喫したタリス軍はあえなく敗走。殿の役目を果たしたヒルダも敗走から二日後、疲労困憊の有様で生まれ育った城に帰還した。

「ベルバルトより書状が届いておる。……和睦の意思を示す書状だ」

入城したその足で出向いた謁見の間で、父王より聞かされた言葉。それ自

体に特段の驚きは覚えなかった。勝利目前の国が自国に有利な和睦を持ちかけるなど、まああることだ。

「それも、条件付きだ。タリスの姫ヒルデガルドを妻に迎えたい。単身で我が城へ送り届けよ、願ひ叶うならば兵を引かせる……と」

「な……っ」

が、父王の口から告げられた続きの内容には、息を呑み絶句した。

「無論受け容れられる話ではない。あのような新興の蛮国に、誇り高きタリスの姫が嫁ぐなどっ……」

怒りを色濃く映した娘の心情を慮つて、王が言う。けれどその顔には苦悩の色が鮮明に浮かび上がっている。

（……そうするほか、ないのだ）

代々の王が築いてきた誇りを守る重責と、それだけでは覆せぬ現実との狭間で苦悩する父の姿。それを見て取つた聡明なる姫剣士の心は、苦渋の決意を固めてゆく。事情を汲み取つて以降の決断は、迅速だった。

「ベルバルトの下へ、参ります」

「ヒルダっ?! ならん、それだけは」

「民の安寧が第一でしょう。……ほかの方策はないではありませんか」

「なれどっ……」

食い下がる父王を説得するための弁も、すでに頭に浮かんでいた。

「彼の王が約束を違え、再び我が国の民に害なす素振りを見せたなら、私がこの手で、忍ばせた剣で必ず……」

傍で見張り、そして暗殺の機会を狙

う。国一番の剣の使い手たる身であればこそその言で父王を説き伏せて、姫は隣国への貢物となった。

※

興入れの日。婚姻式の壇上で、ヒルダは老主ベルバルトの挙動をつぶさに観察し、彼の力量、人となりを見極めようとしていた。

すでに齢六十を過ぎた老主ベルバルト。なれど、野心家に相応の覇気が老いの印象を掻き消している。中背の身体はでっぷり肥え太っていて、しわの刻まれた顔はまるで豚のようだ。ニタつくその面構えの中で、細められた眼光だけが異様に鋭くギラついている。

（こんな男に……娶られるのか）

形式上のこと。誇りまで明け渡すわけではない。そう幾度胸の内を反芻したところで、屈辱感は拭えない。

「では、誓いの口づけを」

（……とうとう……この、時が）

式は滞りなく進み、ついに唾棄すべき儀式の時が訪れてしまった。

「ヒルダよ、よいな？」

「は……は、い……」

ネチネチと響く老王の声音。しわがれた手で肩を掴まれる心地悪さ。面を覆うヴェールをめくり上げられ、思わず下を向いてしまった。悔しさと憂い、さらに羞恥。諸々の感情が煮詰まった顔を見られていと思うと、異様な怖気が背に奔る。

（貴様のような卑劣漢に、誰が誓いを立てるものか。これは偽り、全ては祖

国の民のために……！）

間近に迫る不細工が目を閉じ、互いの唇が触れ合う直前。ヒルダは己が唇を内に巻き込み、隠すことで直の接触を拒絶。せめてもの意思表示をした。直後に張り付いてきたぬめる唇との偽りの儀式を、胸掻きまじりたくなるほどの嫌悪を押し殺してこなす。

（んぐっ、うう。気持ち悪い……早く、早く終わって……）

握り締める拳の内に、嫌な汗が滲む。閉じた目のまわりに染みる悔し涙を表に出さぬよう、険も唇同様きつく食い締める。湿った触れ心地の不快感を喉元に押し止め、早く儀式が終わることだけ願ひ、待ちわびた。

ゆえに気づけなかったのだ。王の指先が奇怪な動きをしていたことに。

※

式後、控室へと戻つてすぐに、ヒルダは我が身の異変に気づかされた。

「……っ、は……ああ……っ」

身体全体、特に胸先が熱っぽい。気だるさ伴う火照りに包まれた肌が衣服と擦れるだけで過剰反応し、切なさを強く訴える。

「どうかしたかね？ ヒルダよ」

共に控室へと戻り向き合っていた老王が、笑みを隠しませず問うてくる。

「……っ、ベルバルト、王……っ」

嬉々として細めた視線を寄こす、偽りの夫。呪術師たる彼のその様相を見た途端「式の最中に何か施された」と勘づいた。

勘づいた。

「私に、何をされたのです……！」
極力感情を潜めたつもりが、存外の
怒気が言葉に滲んでしまう。

それでも老王は慌てることなく首を
縦に振って肯定の意思を示し、ネットつ
いた響きでもって説明を始めた。

「クク。身の芯が火照り、疼き、堪ら
ぬだろう？——我が呪の効果だ」

やはり、眼前の男の仕業だった。あ
つさり認めたとその上で、呪術師とし
ての実力を鼓舞するように喜色満面語
る様が、ひと際障りに障る。

「つ……呪……？」
「そなたを悦に縛り、我が物とするた
めの呪法よ。己が胸元をよく見よ」

得体の知れぬ言葉に感ずる不安と焦
燥に背を押され、言われるがまま目を
やった。そうして、見慣れぬ小さな紋
様を、そこに見出す。左右の乳の谷間
に刻まれていたのと、その紋の小さき
がゆえ、よく見て初めて認識すること
ができた。意識すると、疼きの根源は
確かにその呪の紋の中心にある。

（私を物にする……？ そのためにこ
んな真似をしでかしたのか？）
怒りのこもった顔を振り向けた先で、
老人は新たな衝撃を舌に乗せ吐き出す。

「そうとも。そのために戦を仕掛け、
今日こうしてそなたを手中に収めたの
だ。タリスに流れる古き血統と、麗し
くも情欲を煽るそなたの肢体が、わし
は欲しくて欲しくて堪らぬ」

クックと喉鳴らす老人の浅ましき
様相に、一瞬煩悶を忘れるほどの憤怒

がヒルダの胸中で荒れ狂う。
「ふぎ、けないでっ……」

どこまでも利己的な男の物腰に、噴
き出す憎悪を抑えられない。射殺す勢
いで差し向けた視線の矢を受け止める
老人の顔は、なお醜悪な笑みに彩られ
ていた。

「隠し持つつ刃でわしに斬りかかるか？
……無駄だ。我が身は魔力の障壁に守
られている」

自信たつぷりに告げる彼の言葉を裏
付ける事実がある。若きころより戦場
に出ているが、いまだ傷一つ負ったこ
とのない男であるという事実が——。
なればこそ、魔力の途切れる寝込みな
りを狙う腹積もりだった。今、武器の
携帯を見破られたのは完全に誤算だ。

（ここで襲い掛かったとして、仕留め
られる確証は……ない）

「失敗すればどのようなことになるか、
わかっておろう？」

和睦協定は当然反故となり、今度は
より長き戦乱となるだろう。また多く
の民が踏みまじられてしまう。

「くっ……う……う……」

血が滲むほどに食い締めた唇の奥に
屈辱を噛み殺し、姫剣士は忍ばせてい
た短剣を床に放り捨てた。

「聡き姫よ、それでよい」

にんまり笑んでにじり寄る老人の様
に危機感と悪寒が奔ったが、今はほか
に手立てがない。逸る心に機会を待つ
のだと言いつ聞かせ、下ろした両手のひ
らを開いて抵抗の意思がないことを示

してみせた。苦渋の決断を示した姫の
胸元へと、しわくちやの手指が迫り来る。
「では呪の続きを刻もう」

続き——その一言が、今我が身に奔
る恍惚の煩悶がまだまだ完全なものでは
ないことを示していた。

（この程度の恥辱……民に血を強
いことを思えば……）

婚姻の話が聞かされた時に、覚悟を
決めたはずだった。が、いざとなると
未経験ゆえの強張り、いまだ穢れな
き乙女の全身を支配する。

「ひっ……あ！ あう……うう！」

結果。乳の谷間に突っ込んできたベ
ルバルトの指を、棒立ち状態で受け容
れる羽目となった。温み、弾力、柔ら
かさ。触れ心地を愉しむように小刻み
に蠢く、卑しい指。その暴挙に、柔い
乳肌がたわんで弾む。

「はあうっ……く、うらんっ！」

むず痒くも切ない摩擦刺激を味わわ
された過敏状態の乳肌が汗ばみ、男の
指に吸着し。より鮮烈に刺激を甘受さ
せられ、見る間に膝が笑いだす。

「ほれ、ほおれ」

「やめっ……！！……ああ……」

そのまま真下へ引き落とされた老人
の指ごと、純白の花嫁衣装がずり下が
り、悶える乳房が剥き出しにされた。

「ほ。傷一つない白肌。きめも細やか
で、戦場に出ておつたとは思えぬな
それに、健気に尖る乳首が実に愛い
（や、あ。見られてる……！ し、視
線が、ああ、熱いいっ！）」

「ほれ、そなたも見てみよ、このよう
にツンと勃って……はしたない」

「こ、断つ、るっ?!」
羞恥に溺れ、外気の冷たさにも晒さ
れた乳首が小指の先ほどのサイズに膨
らみ隆起していた。そこを強めに摘ま
れ、捏ねられて、瞬く間に喜びの痺れ
が乳内に巡る。

「ひゃっ、あつ、ひー！ ひあアア！
ゆびっ、止めっ、つひいっ！」

乳房が楕円に伸びるほど、摘んだ乳
首を引っ張られた。乱暴な扱いをされ
ているのに、ただただ甘美な衝動はか
りが胸中にひしめく。ともすれば屈辱
の念が掻き消えてしまふようなほどの
悦を詰め込まれ、男の手を払い除ける
ことも、身をよじることもままならぬ。

「呪の続きを刻み付けておるで。し
ばし感覚が高まりっ放しになる。感じ
るまま、囁るがいい」

「だ、れが……あアッひん……！」

ヒヒと笑んだ老人の言葉を理解する
余裕は、すでない。それでも反射的
に口を衝いて出たのは、断固たる拒絶
の意志。そして抑えきれない煩悶その
ものな、甲高く響く嬌声だった。

（ジンジン、するっ、頭の芯まで……
ひ、響いてきてっ、るうっ）

摘まれた乳首を放され、身を離され
れば即座に膝から崩れ落ちてしまうに
違いない。そんな女体の不甲斐なきを
見越した上で、老王は絶妙に圧の加減
を変え、責め立ててくる。空いた指で
乳肌を撫でているのは、彼言うところ

「だ、れが……あアッひん……！」

の「呪紋」を刻んでいるのか。

「く、ひっ！ うああひッ、ひィ、いいインッ！ やああ、おかしく、なっ……るうううッ」

摩擦に乗じて乳に蓄積する火照りと疼き。延々投与され続けるそれは、放尿を我慢しているときにも似た、その幾倍もの狂おしい煩悶を引つ切り無しにもたらず。

「そのまま心も解放し、喜びの波に沈んでしまえ」

(駄目……え！ 民のためにも、こんなところで自分を見失えないいつ)

呪を刻む老人の指が左右の乳房を下から持ち上げ、手の内で弾ませて、好き放題に揉み捏ねる。乳輪を緩やかになぞりながら這い登り。

——ぎゅっ！

「くひいあああっ！ はっ……ひ！」

再度乳首をきつく摘まれた。直後ついに耐えきれなくなった女体が彼の肩にもたれ、重みを預けてしまう。切なる痺れが乳腺を焦がし、多量の汗と熱が毛穴より噴き出した。

「ふむ。呪はこれで終いじゃが……」

恐る恐る見つめた己の胸元に刻み加えられた、小蛇を思わせる奇怪な紋様。乳の丸みに這うように刻まれたそれに得体の知れぬ恐怖を抱かされる。

「うう、ふっ、う……うあっ?!」

「先ほどの式でのキス。もう一度、今度はココに直してもらおうか」

唐突かつ酷薄に響いた言葉の意味を頭で理解する間もなく、男の手に押さ

れるがまま赤絨毯に膝をつき、中腰で跪くことを余儀なくされた。

その鼻先に、手早く剥き出された逸物——老齢に見合わぬ凶悪な角度で反り勃つ剛直が押し当たった。初めて目にする男性器の肉厚の幹に目を刺いて、漂う蒸れた臭気に顔しかめる。

「や、つぁ！ 汚っ、んぐツッ！」

汚い、と告げかけた唇が、肉の幹でもって頬を二度三度とぶたれ、黙らされた。のけ反つたために揺れた乳房の頭頂部が、また痛切な疼きに見舞われる。声なき呻きを発する乳首を左右摘み直されて、捏ね潰されたそばから脳裏にけたたましく悦びの火花が散った。

「臭いか？ 蒸れておるからの。……」

先ほど反故にした誓いの代償に、この逸物に口づけてもらおうか

「ひはっ、は、つひ……いい……」

喘ぎすぎて息も絶え絶えの有様で、まともな返事がなせようはずもない。

悶え震える舌が拒絶の言葉を吐き出すのを待つことなく、肉勃起のエラ張り亀頭がねじり入ってきた。

「ふごおっ?! んぶっ、つふう……んぶふううううッ！」

ゴチュツと音立てて突き立った肉凶器の勢いに、えげずき、咽んで涙ぐむ。長時間衣服内に押し込まれ濃縮された臭みが、見る間に口内に充滿する。口蓋に溜まる唾液の海に、牡の饅えた味わいが溶け混ざっていった。

(用を足す部位を口に含ませるなんて……どこまでも人を愚弄してっ！)

そうした奉仕のし方があることなど知る由もない女の寄こす怨嗟の視線を、弛んだ老貌があつさりを受け流す。

「涙混じりのその強気な面。これより蕩かせると思うと、堪らぬな」

「ふぐうッ?!」

ほくそ笑む男の言葉を体現したかのように、口中の肉勃起がさらに一回り脈打ちながら膨張した。同時に乳首をギユツと半回転揺られ。

(いひやつぁあああ！ それえっ、強すっ、ぎついいいい……！)

亀頭に小突かれた喉元に生じるはずのえげずきが、即座に苛烈な疼きに成り代わる。床についた膝が無様に震え、突き入る肉棒との間のわずかな隙間から垂れた唾液の糸が、口端からこぼれて純白の衣服へと滴った。

「ふ、ううう……んふううッ！ ふーっ、ふ、つ、うう……んふううッ！」

吐き気の代わりにネットリと湿つた喘ぎの響きが轟いて、悶える舌と共に牡肉に届き、振動を与える。

「おうおう、愛い愛い。拙いのが、かえって興をそそりよるわ」

(悔、しいっ……こんなっ、の……)

拳動の全てが男の悦びを引き出す結果に繋がっている——抗いようのない状況への苛立ちがまた、より一層の煩悶を誘う。口中を占める肉棒が邪魔をして、喘ぎ足掻く舌が身動き取れずにいる。そのせいで息苦しさは増長の一途を辿っていた。忙しく呼吸する鼻息の荒さがみつともなく、また自然と目

頭に熱い物が滲む。

「抜いてほしいか」

——ココク。窒息の不安に駆られて、素直に首を縦に振った。

「なら、しゃぶることだ。己が舌で勝ち取ってみせよ」

可笑しくて堪らない。そんな様相で元から醜い面をより歪めたバルバルトがわずかに腰引き、姫剣士の口中に小さな余裕を生み出す。

同時に指の腹で乳首をくすぐられ、切ない衝動を植え込まれる。

(ふああ！ あはあっ……やああ、なんっ、でっ、どうして今度はそんな風に優しく撫でるのよお……！)

これまで比べあまりに優しく、小さな刺激だった。自然と渴望に乗せられた女の舌先が、さらなる愛撫をねだるように牡の肉幹へと擦りよった。

「ふうんんっ、んうう……んふうっ、ふっ……。……ちゅ……っ」

あれほど忌避した誓いのキスを、あろうことか男性器へと捧げる。その惨めさ情けなさに躊躇する思いは、乳房より去来する肉の疼きと渴望とに押し流され、惚ける脳内から霧散した。

「竿に沿って舐めるのだ。磨くように、唾をまぶして丁寧に」

「はぶ、ぶちゅっ……んはうっ、くう……うんんうんんっ！」

従えば、乳房が揉まれる。乳輪をなぞられ、指で挟まれた乳首が丁寧に扱われる。矢の如き鋭さで突き刺さる恍惚が連続して与えられた。

「ひび。美貌で名高いタリスの姫の面が間延びしておるわ！」

吸い付くために伸びた鼻の下。それを見、嘲笑う老人の顔を、上目遣いに見返して次なる指示を請う。

（今はこうするか。民のために恥を忍ぶと決めたんだつ、ああ……）

どこか言い訳めいた響きを自ずと感じつつも、鼻鳴らしてすがつた。

「よしよし。次は亀頭……わかるか？先端の割れ目と、エラの張った部分の裏を特に丹念に掃き清めよ」

また男の腰が引け、八割方肉棒が口中から抜け出てしまう。けれど、口中を占められていたためでなく、性的興奮に端を発している息苦しさは解消されぬままだ。

（やつぱり、舐めて、この儀式を終わらせるしか……ない……つ）

焦りにせつつかれたヒルダの舌が、おずおずと亀頭に吸い寄せられ。

「ぢゅぢゅつ、ちうううつ」

鈴口に吸い付き、浮いていた露を啜る。飲み下したその味が、やけに甘く感じられ、もう一度。二度。三度。

（臭くて汚いはず、なのに……。こんなはしたない真似……嫌なのにイッ）

捏ねくられる乳首に奔る喜悅の衝動が、そっくりそのまま舌先に伝染り、やめられなくなった。

「おっほ。こそばゆい。が、よいぞ。火照った舌の感触が実によい」

喜色満面で出っ張り腹を揺するペルバルト。下劣な老人に肉悦樂を与えら

れているという事実には、胸の奥が悲哀に咽ぶ。が、乳首より迸る恍惚の痺れが、即座に悲哀を押し流していった。

（こ、のままじゃ……倒れちゃうつ）

支えなしでは心許ない肉体の状態は、相変わず。垂れ下げた両腕はわずかに動かすだけでも剥き出しの乳房と擦れて、苛烈な煩悶を招く。だから、唇を狭め、抜けかけのかり首を締めることで、なんとか姿勢の維持を図った。

そうすれば男が悦ぶと薄々勘づいた上で、「早く終わらせるためでもある」との言い訳を自らに与え、唇と舌で奉仕を続ける。

「ビヒヒ。まるで腹の空いた乳飲み子の如き吸い付きぶりじゃ」

「ぶぐむうううつ！」

不意に男が腰を押し込んで、頬裏が突き刺さった亀頭の形に膨らんだ。

（擦られる端から疼くうう！）

ゴシゴシと擦り付く肉傘の、弾力があいつつも硬くみなぎる感触に、否応なく意識が惹きつけられる。火傷しそうなほどの熱気と臭みがまざまざと感じられ、自然と開いた鼻の穴がヒクリヒクリ蠢いた。

（見られている……ああ、死にたいくらい恥ずかしい、のに……つ）

吸い付きを強めたことでひと際間延びした鼻の下。火照り帯びる丸みを撫でくられ、切なさに悶える乳の肌。余さず観察されている事実を意識するほどに、身の内の熱が煮沸する。

（やつぱり、甘……い）

よだれこぼす唇で、小刻みに脈打ちだした亀頭を締め付け、愛撫する。舌先に覚えた、中毒性の強い甘み。味覚までも狂わされてしまったのか。疑問を吹き飛ばす勢いで、幾度も、幾度も亀頭が頬裏を穿つ。その都度染み漏れる牡の先走り汁を、背と腰に奔った甘美の疼きごと啜り飲む。

（んはああああ……この味、凄いつ癖になって……駄目なのに、わかっているのに、やめられないよおつ）

——グリュリユツ！

「んふつ！ ふうつ、うんうん！」

目一杯引つ張り伸ばされた乳首がジンジン疼く。本来生じるはずの痛みが何倍もの勢いで駆け巡る快楽に、四肢が、腰が痙攣しつ放し。堪らず前のめりに、鼻先を男の股間の茂みに埋め、白髪混じりの茂みのくすぐりにすら悶え、強く亀頭を吸い立てた。

（ふぐつ！ んはあ……ああ……どんだん口の中で大きく、なつてええつ）

知識としては知らずとも、それが何かの予兆であることは察せられる。

「このまま出すでの。唇窄め、舌で竿をねぶり回せ……！」

吠えた男の言葉に推測を肯定されるべくに頭働かぬ状態のまま指示を受け容れた。

「ぢゅぶつ！ ンンツふつ、うんん！んぶあつ……ンツぢゅううつ！」

きつく握られた乳房がたわみ、ひと際苛烈な恍惚を迸らせる。もう一方の手に千切れそうなほど引かれる乳首が、

真つ赤になつて喘いでいる。

（はひっイ……なにかくるうう！）

全身を巡る恍惚が集結し、一気に放出されようとしている。直感的に悟った姫の舌が、助けを請うように男根に吸いすがり。男の腰が押し引きするリズムに重ねて、教えられた通り、窄めた唇の内でもレルレルと幹を掃く。

「ふ、ははつ、出すぞヒルダよ……そなたの口にぶちまけてやるつ……」

（来るつ、口の中にも、お腹の奥にもなにか、ああっひひい！）

臉裏で繰り返す白熱が弾け散る。肉の悦に湧けた肢体の感覚が、甘美一色に塗り込められてゆく。

ねぶるほどに威勢よく跳ね回る肉の棒。その突端より染み出る汁を啜るたび、雌雄の腰が悦び弾んだ。

「そうだつ、目一杯吸えつ……！」

肥え太った腹を揺らし律動していた男の腰がビタリと止まる。止まった腰とは対照的に一層激しく脈を轟かす肉棒が、射出口を喉元に押し当てて爆ぜた。

「んぐつ、ン！ えぶつ！ ンツむぶうううう——ツツ!!」

ドボドボと雪崩れ込んだ粘着質な液体で、瞬く間に乙女の口内が満ちてゆく。目を見開き慄く女の顔を偷しげに見据えた男の腰が、二度、三度身震いし。その都度脈動した男根が、ヒルダの喉と頬肉を揺すり立て、子種汁を打ち付ける。

（ひひやあああつ！ こんらつ、のお



……ッ！ 嫌ああああああ！

その振動が、犬のリードの如く引かれた乳首にまで伝わって突き抜けた。悦楽の衝撃が腰の心底にまで達した瞬間。意識が飛散するほど苛烈な悦の波が去来し、痙攣を強めた女体が頹れた。「げぼっ……ンはああアア……ッ」

喉に絡む濁汁が、噎せた口蓋から泡立ち吹き漏れる。その様を見た老王が、なお反り立つ肉棒を誇示しつつ言う。「こぼさず飲めるようになるまで、毎朝昼晩仕込んでやるので。励めよ」

(毎……日？ こんな……の……)

初めて知った肉の恍惚が、男の身から離れ仰向けに倒れ伏す女体にひた走る。耐えきれぬかとの不安と、ようやく解放された安堵感。そしてまだ足りぬと疼く肉体の浅ましさをから目を逸らし、姫は白濁に濡れる臉を閉じた。

※

婚姻式から一週間が過ぎるころ。呪紋を刻まれた当日ほどの苛烈さこそないものの、常時身を情欲の波に苛まれ鬱屈とした時を過ごすことを余儀なくされた姫剣士は、日々疲弊の度合いを強めていた。

「はあ……は、ああ……つく、また」

日中意識のある間中、胸の疼きが治まらない。衣服の裏地に擦れるだけで甘美が奔り、腰がはしたなくくねる。意図せぬ間に胸に触れかけては、ハッと我に返り、手を離す。そんなことを繰り返すたび、心と身体が摩耗していく。呪紋と同時に刻まれた快楽の記憶が、

頭の中から消えてくれない。

(自分で慰めても、あの時のようには至れない。空しくなるだけ……)

昨日は夫に公務に連れ出され、席上密かに肌を触られた。ただの接触だったにもかかわらず、蓄積していた恍惚を巧みに引き出す男の指に翻弄された。「椅子が濡れるほどイキおつたのオ」

(黴つて、焦れる私の様を愉しんでいる、あの男の手でなければ……ッ)

あの手、指でなければ味わえない絶頂の味——それを、嬉々と弾むしゃがれ声と共に嘔み締めてしまった。

宣告通り毎日続けられている口淫奉仕の折にも、乳首を黴られ悦に咽び泣かされるのが恒例となつてしまつている。情けない。恥ずかしい。悔しい。積み重なる負の感情すら快楽の糧としてうな身が、恨めしくて堪らない。

(あの男は、いつも……いつもわざと私に判断を委ね……恥をかかせる)

口と舌での奉仕の際もそうだし、肌に触れて黴るときだつてそうだ。散々黴り女芯に火を点しておきながら、最後の最後で「どうしてほしい」と問うてくる。呪のせいでも過剰に湧ける身体

の求めに心が屈し、決まつた言葉を吐くとわかつていながら。絶妙の加減で追い込んだその上で、尋ねてくるのだ。その癖、たぎる生殖棒を女性器に近づけようともしない。故意に遠ざけ

ふとした拍子に女の視線が注がれるのを愉しんでいる。「望むなら挿入してやってもいい」——不遜な態度で屹立

した肉勃起を見せびらかす男の思惑は、嫌というほど察せられた。

「……私欲まみれの下劣な男つ。絶対に屈したり、しない……!」

疼き感う心身に言い聞かせるように、幾度も反芻した言葉が、空しく吹き抜けていった。

※

前触れなく急に老人の手による悪戯が途絶え、一月ほど経つた日の夜。純白の下着のみ纏つた姿で、ヒルダは初めて夫の寝室を訪問した。

「もう、眠つてしまわれましたか？」

足音を消して入室するなり、溜まつた情念の熱と媚を隠すことなくまぶした声で問いかける。ベッドの上には、半月ぶりに目にするベルバルトの姿。裸で寝る彼は臉を閉じ、起き上がる気配もない。眠っているのか——？

(なら、このまま……!)

背に隠し持つ短剣を突き立ててやる。起きていた場合も色仕掛けで油断を誘い、刃を突き立てる機会を窺うつもりだつた。どのみち今宵、暗殺を遂行する決意は揺らがない。

(これは、私にしかできないことなんだ。ベルバルトに娶られ、その下劣な性欲の対象となつている私にしか……)

下着姿の我が身は火照りを帯びていて、己でも扇情的に思えた。強烈な羞恥が胸内を焦がすと同時に、不本意ながらの恍惚に昂らされる。それら全てから逃れようと、凶刃を老人の胸目掛

け、勢い任せに突き立てた。

「……ッ!」

情欲に苛まれる日々に疲弊し、焦り逸つていった、そのことを。短剣を握る手に伝わった、硬い響きと。

——バギ……イイッ!

相手の身体を貫く直前で弾かれ、無残に割れ崩れた刃の姿。

「寝息も確かめぬとは。らしくないな、ヒルダよ」

さらに、追い打つように嬉々と響いた老人の声によつて悟らされる。

「呪に侵された身で放置されておつたのだ。己が誤りを恥じることはないぞ」理性を削ぐための放置であつたことを暗に示し、口端を吊り上げた男が嗤う。ジリジリと追い込まれていく日々が招いた拙攻。その代償は甚大だ。

(はめられた……っ、情けない!)

明確な殺意を示してしまつた上に、殺害そのものは仕損じた。最悪の事態を招いた己の浅慮に悲嘆する間すら、眼前の老人は与えてくれず。齢六十とは思えぬ力強さで、ベッドへと引つ張り上げられる。

「あう! な、なに、を……!」

寝室という場において差し向けられる、猥欲に満ちた視線。仰向けに寝た彼と向き合う格好で抱きすくめられ打ち震えている身も心も。何をされるのか、本当は理解していた。

「忍んできてくれた妻を愛でぬとあつては、夫として失格じゃからのオ」クックツと鼻鳴らし嗤つた男の手指



幸せそうな悪魔(!?)の結婚式.....



ああ

愛してるよミナ
ふたりでいっぱい
幸せになろうな

いよいよ式だね
アスモダイ



ババ...

クア...

クア...



うんっ!



じゃあ俺は
先に行ってるから

着替えたら
すぐに来いよ

アスモダイ

ダア——
イ!!

才 悪魔色 + ブライド

いやあああ
あああああっ!!

熱い要望に応じて
本誌2度目の登場!

アスモダイ!
ア…アスモダイ!?

嘘…

う嘘でしょ!?
何なのよこれえっ!

お前たち
人間だな!?

何でこんな
非道いことをっ

非道—
………?

キヤッ

悪魔を殺すのが
非道ですって?!

何よこれ…
何だよ…

何なんだよ
お前えっ…!

これは
おかしな冗談だ

ジヨオオ
オオオオジ

私は
ジョージ……

ジョージ!!
シンプソン!

私は神父の
シンプソン!!

神父の
シンプソン!

法王庁
直属

殺戮機関の
執行者!

聖人指定の
殺し屋

処刑人
シンプソン!

しかし
笑わせてくれますね
悪魔が結婚式の
真似事とは!

永久の愛を神に誓う
この神聖な儀式を
あなた達に穢されないで
本当に良かった

神の愛も知らず
誰とでも獣のように交わる
あなた達などに



私は…私達は本当に
愛し合っていたわ

それに私…
誰とでも交わったり
なんてしないっ!

アスマダイとだって
キスマでしか
なかったのに…!!

そうでしたか



何を...

!?

いやあああああ!!

クッ



では私がはじめての男というわけですね

はっ...

っあ

はっ

魔法少女ミレイ
敗辱のウェディングドレス

小説/NOVEL ICHICO

挿絵/ILLUSTRATION わたぬき 綿貫るん



悪を打ち砕く正義のヒロイン、魔法少女ミレイ!
囚われた人々を救うべく、悪のアジトへと乗り込むが.....

（このフロアに人質が集められているはず……、なんだけど……）

森園ミレイこと魔法少女ミレイは、超小型のタブレットで位置情報を確認しながら、息を殺しながら薄暗い廊下を進んでいた。

ここ数週間で、若い女性の失踪事件が頻発。事件の犯人が、地球征服を目論む怪物組織だと判明すると、すぐさまミレイに出動命令が下ったのだ。

魔法少女ミレイ——。普段は、ごく普通の女子校生・森園ミレイのもうひとつの顔だ。元来、正義感の強いミレイは、魔法少女として戦うことに抵抗はなかった。むしろ、進んで戦いの場に参じた。

無垢な正義感と情熱を表すように純白のマントをなびかせ、自分の背丈と同じくらいの大弓で立ち回る。敵を薙ぎ倒すその姿は華麗で勇ましく、国民の誰もがミレイの強さを信じていた。

ミレイ自身も、巨悪に立ち向かい、弱者を助ける「魔法少女ミレイ」にプライドを持っていた。

「あつた！ この部屋ね」

目的の部屋を見つけると、素早くパワードを打ち込む。承認を伝える電子音が鳴り、扉が開いた。

（こ、これって……）

部屋に足を踏み入れたミレイは言葉を失った。彼女の眼に映ったのは、鉄格子の向こうにいる少女たち。暗がりではつきりとは見えないが、ざっと数えただけでも20人以上はいるに違いない。

「もう大丈夫よ！ すぐに出してあげるからね！」

少女たちの嗚咽で我に返ったミレイは、鉄格子に駆け寄り、キーコードに手を伸ばした。パワードは、既にミレイの所属する組織から入手済みだ。

最後の数字を入力しようとしたその時——。部屋のライトが一斉に点き、まばゆい光がミレイを照らした。

「グケケケッ、正義の味方ともあろう者が、こうも

簡単に罠にハマるとはなあ！」

振り返ると、面妖な様をした男たちが剣を構えて扉の前に立ち塞がっていた。トカゲに似た狡猾顔とひよる長い身体に不釣り合いな尻尾。そのグロテスクな姿は、いつ見ても不快でしかない。

「くっ……どうりでセキユリティが甘いと思つたのよね。パワードのハッキングも簡単だったし。こつちだつて、こんなりスクは折り込み済みよ！」

ミレイは短く舌打ちすると、後ろに大きくジャンプして相棒の大弓を構えた。

「さあ、誰から申刺しになりたい？ いたいけな女の娘たちを誘拐するなんて、絶対許さない！」

「人間の女は、我々種族の繁栄には大事な道具だからな。ヒヤハハ……！！ ——!! グハア!!」

閃光のごとく放たれた矢が、その下劣な高笑いを遮り、トカゲ男は床に崩れ落ちた。

「アンタたちみたいな下衆野郎に、この娘たちは指一本触れさせないんだから！ くらえ！ ブレイズシューッッッッッッッ！」

ミレイは相手の攻撃を華麗にかわしながら、射程距離を計り、確実に敵を仕留めていく。そのたびに艶やかなロングヘアとレッドマークの赤いリボンが揺れ、可憐なピンクの戦闘服は凛々しく映る。

さすがに敵のアジトだけあつて、数の多さに息が上がつてくる。それでも、魔法少女としての使命が彼女を奮い立たせた。ミレイは、精神を集中して魔力の込められた弓を引き続ける。

「エレメンタルクラウ〜ッシュ！」

トカゲ男たちが次々と倒れると、少女たちから微かな歓声があがった。それが、ミレイの手応えに変わっていく。

だが、チラリと少女たちに視線を移した瞬間、弓を引く手が止まった。

「——嘘……でしょ？」

祈るように、縋るように戦いの行方を見つめる少女たちの中に、ミレイはここに一番いて欲しくない顔を見つけてしまった。

「ミズキ……どうして……？」

妹のミズキだ——。見間違えるはずがない、艶やかな黒髪につけられている髪留めは、ミレイが彼女の誕生日にプレゼントしたものだ。

今朝、笑顔で別れたのに……。ということは、捕らえられたばかりなのか……？

「お姉ちゃん、逃げてっ！」

ミズキの声で我に返ると、まさに目の前で鈍器が振り下ろされようとしていた。間一髪で避けたものの、反応が遅れて凶器がミレイの右腕を掠めた。

「ぐっ……!! やつとボスのお出ましつてわけね」

ミレイは痛めた右腕をかばいながら、鈍器を振り下ろした相手の男は、下卑た笑みを浮かべている。

「未来の夫を睨むなんて、花嫁失格だな。今だつて手加減してやつたんだ。感謝しろよ」

「なっ——。だ、誰が花嫁ですつて!!」

「決まつてるだろ、捕まえた女どもとオマエもだよ。このガイラ様の子種を孕むんだ」

欲望の色しか浮かんでいない眼に値踏みをされた嫌悪感で身体が総毛立つ。

「……させない！ この娘たちをアナタの悪趣味な欲望の犠牲になんてさせない！」

（ミズキだけは、絶対に守らなくちゃ……）

間合いを取り、右腕の痛みを堪えて弓を構えた。痺れで弦を引く指が震える。それでも、ミレイは渾身の力で矢を放った。

「ブレイズエクストリ〜ムッ!!」

力いっぱい叫び声と共に炎に包まれた矢は、ガイラの心臓を貫くはず……、だった。

怪我で威力の半減した矢は、いとも簡単にへし折

られてしまう。

「なっ!? 矢が素手で止められるなんて……」

呆然と立ちすくむミレイに、今度はガイラが拳を振り下ろした。2メートルを超える屈強なボディから放たれたパンチが鳩尾にヒットする。

「ぐっ……がっ!! ゲホッ……ゲホオ」

ミレイは堪らず、床に膝をついた。

「ギヒヒイ、そんなにこたえたか? 大切な花嫁に手荒な真似はしたくないんだがなあ」

歪んだ笑顔が怒りを増幅させる。だが、もう反撃する力などないに等しい状態だった。

「花嫁の第一候補はオマエだ、ミレイ。他の女どもを生かすも殺すもオマエ次第だ」

(嫌よっ……! 恋もキスもしたことがないのに、こんな怪物となんて……でも、でも……今の私は魔法少女……。みんなを守らなくちゃ……)

ミレイは怒りの眼差しを向けて、下唇をギョッと噛んだ。

「グハハッ! その強気な顔がいつまで続くか楽しみだな。フンッ!」

ガイラは床に転がっていた大弓を拾い上げると、ミレイの目の前で事もなげにへし折った。

「よ、よくも……私の相棒を!」

「今までは俺様の手下を相手に、人気者取りだったんだろが……。でもな、オマエの正義感や実力なんて、所詮この程度だ! ヒヤハハッ!」

ガイラは、さらに弓をバラバラに折っていく。

反撃したくても、既に手下に両腕を拘束されてしまった状態では、どうすることもできない。魔法少女のプライドが打ち砕かれた瞬間でもあった。

(でも、心までは絶対許さない……)

頑なにそう言い聞かせないと、涙が溢れてしまう身体を押さえつけられて、ガイラの前に跪かされたミレイは、剥き出しになったペニスから咄嗟に顔を

背けた。

グロテスクな肉塊は筋が浮き立って、牡の淫臭を放っている。人間の男のものと明らかに違う毒々しい色のペニスは、見ているだけで吐き気がする。

「まだ自分の立場がわかってないようだな」

「あぐう……ん、んっ……うぐうう……」

ガイラはミレイの鼻を摘むと強制的に口を開かせ、ペニスを振じ込んだ。初めて味わう男根の鮮烈な味と息苦しさで嘔吐感がこみ上げてくる。

涙で滲む視界にも、少女たちの怯える顔は、はっきりと見て取れる。

「お姉ちゃん、ごめんね。私が捕まっちゃったから……。ごめんね、私なんかのために……」

陵辱を受ける姉の前に、ミズキは涙を流しながら何度も呟いている。消え入りそうな声だが、ミレイの心にはしっかりと届いていた。

(ミズキ……泣かないで。お姉ちゃん、アナタのためにも負けないから)

「んぐう……んむっ……ぢゆるうっ……ん、んっ、レロッ、レロッ」

振じ込まれたペニスに恐る恐る舌を這わせ始める。口づけさえ交わしたことの無い唇が肉竿の上を滑る。

「ぢゆるう……んぐう、んぶうっ……。本当に、みんなには手を出さないでしようね?」

ミレイの問いかけに答える代わりに、ガイラは髪の毛を掴んだまま腰を前後に動かし始めた。熱を帯びたペニスが口内で乱雑に蠢く。

「んごお……うぶう……ぢゆるう……ぢゆるう! んぐう、ハアハア……苦ひい……」

強引なピストン運動に必死で舌を絡ませた。鈴口から滲み出る透明な粘液が喉に絡みつく。

(何このネバネバしたの……。気持ち悪い。早く早く終わってよお)

半ばヤケになりながら、ミレイは頭を振った。口

元からは、ゆるゆると唾液が垂れ落ちていく。

だが、屈辱的な奉仕に抗う気持ちとは裏腹に、ミレイの身体には変化が起こっていた。下腹部で燃り始めた疼きに、無意識のうちに太腿を擦り合わせてしまう。

狡猾で淫虐な男が、その様を見逃すはずがない。顎で指示を出すと、傍にいた数人の手下の手が、一斉にミレイの身体に伸びた。

「きゃっ……!! 嫌ッ! なんでコイツ等まで!」

「ギヒヒイ……花嫁様に奉仕させてばかりじゃ、申し訳ないからなあ。それにオマエも待ちきれなかっただろ?」

「なっ……!! そんなわけ……。んぐう、あああんっ! やめ……てっ! あくうう……」

戦闘服の上着をずり下ろされ、弾力のある乳房が晒される。薄桃色の乳首を抓られて、ミレイは思わず甘い声を漏らしてしまった。

「違っ……今のはびつくりしただけで……」

ミレイの言い訳に、ガイラたちはニヤニヤ薄笑いを浮かべるだけで、責めの手を休めることはしない。ついに、鋭い爪でクロッチの部分が破かれる。

「ダメッ! そこだけはダメなのっ!」

「何言ってるんだ。ここが一番大事なんじゃないか。頬を染めて、嬉しそうにスケベ汁をダラダラ垂れ流してろくせに」

手下の指が膣口から溢れ出す蜜汁をすくい取り、充血した突起物を何度も弾く。

「きゃふう! あああんっ……あっひい、ああんっ。んああ……これは感じてるんじゃないの。身体が勝手に……。んぐうっ、ぐふおっ……」

言葉を通って、ガイラはさらに奥深くペニスを押し込んだ。上気していた肌が一段と朱に染まる。

(負けちゃダメッ! ダメな……のに、身体が熱くなっっていく。どうして……?)

吐き気をもよおすほど悍ましかったペニスなのに、自然と舌を感じる場所を模索してしまう。

裏筋やザラついた陰囊にまでチロチロと舌を這わせ、先走り汁を舐め取っていく。奉仕に没頭してるミレイの尻に一人の手が伸びた。

「ひゃんっ……そ、そこは違っ！ 汚いから！ あふう、あああん……あああくう」

ふいに、愛液まみれの指がアヌスを撫でると、ミレイは今まで一番甘やかな淫声をあげた。もちろん、その指が止まるはずはない。アヌスの入口を執拗になぞって解すと、円を描くように指を押し込んでいく。

「ひゃうっ……ああんっ、汚い穴……ダメえ。んぢゅう、ぢゅうう……んぶう、ぢゅぽおお」

目の前のペニスをイカせることに集中しようとするが、クリトリスとアヌスを刺激する指の動きに合わせて、尻尻を揺らしてしまふ。

そのたびに、熱を帯びたアヌスは、異物の侵入を迎え入れて、キュッキュッと指を締め付けている。

「どうした、ケツ穴が嬉しそうにヒクついてるぞ。処女のくせに後ろの素質も充分だとは……。随分と淫乱な魔法少女だな。腹ポテの時は、そっちの穴でたっぷり可愛がつてやるぞ」

腹ポテ……。その言葉に、ミレイの背筋が凍った。ただ純潔を散らすだけではない、嫌というほど精液を注がれて、異種族の種を孕まされるのだ。その現実が、すぐそこまで迫ってきている。

「はぐう……んぐっ……それだけはイヤア！ 誰がアンタの子どもなんて……んぶうっ……ぢゅうう、ぢゅうう……！」

「口答えしないで、ちゃんと啜えろ！」

ガチガチに膨らんだペニスは、既に射精感の限界を超えていた。ミレイの頭をがっちり掴むと、ガイラは激しく腰を振り続けた。

「グアアアッ……！ 射精すぞ！ いいぞお……！ ガハアアアアッ！」

「んびい……んぐうっ、んぶっ……んぼっ……！」

獣のような雄叫びと同時に、亀頭を喉口まで押し込まれ、大量のスペルマが注がれる。

（かはっ……ドロドロで臭いの……、喉にこびり付いて気持ち悪いよお）

口腔を犯された苦しさで、瞳には涙が滲み、鼻からは精液が垂れている。だらしなない表情に、凜々しく可憐な魔法少女の面影はない。

「さあ、いよいよメインディッシュといくか」

大量のスペルマを放出したにもかかわらず、ガイラのペニスはまったく衰えていなかった。むしろ、処女肉を味わう欲びで滾り満ちている。

（こんな悪夢すぐに終わるんだから！ 私が我慢すれば……みんなが……ミズキが助かるの）

そう心の中で幾度となく言い聞かせても、手下たちに強制的に足を開かされ、露わになった秘部に欲望の凶器が押し当てられると、恐怖で歯がカチカチと震えた。ついに泥濘んだ聖裂にペニスが侵入する。

「ひいっ！ 嫌ああああつ！ んひいっ……！ ああああ……挿つてくるう。あぐうう……」

カリ太の亀頭に蜜肉を押し広げられ、破瓜の痛みが全身を駆け巡る。ミレイは屈辱と恐怖で瞳を固く閉じた。

だが、ガイラはミレイの所有者が誰であるかを、はつきりさせるかのように、強引に眼を見開かせた。極太ペニスが自分の胎内に埋まっていく様が、はっきりと視界に入ってくる。

「ああ……あああつ！ 早く抜いてえ……」

「まだ、半分も挿つてないぞ。そらっ！」

「んひいっ……！ あがつ……ひぐう！ 壊れるう！ 身体がおかしくなっちゃうっ！」

全体重をかけられて、子宮口の最奥目掛けてペニスが入り込められると、ミレイは堪えきれず悲鳴をあげた。華奢な身体に不釣り合いな大きさのペニスで貫かれ、淫唇は不格好に振がっている。

「グヒイッ……さすが選ばれし魔法少女の処女肉極上だ！ 嬉しそうに纏わりついてくるぞ」

ガイラは愉快そうに高笑いすると、極太の凶器で強張っている肉ヒダを解していく。

みっちり奥まで埋まると、ミレイの両足を掴んで持ち上げ、子宮口をノックするように亀頭を叩き付けた。さらに深い挿入感が、魔法少女の牝の扉をこじ開けていく。

「う、嬉しくなんか……全然……ない。あああつ、んはあつ！ はあつ……はああつ！」

まだ残る破瓜の痛みと、新たに湧き上がってくる快感との狭間でミレイは顔を歪めた。ズリユズリと膣道をこねくり回されるたびに、白く泡立った愛液が噴き出してくる。

（ダメッ……こんな奴のモノで感じちゃ、ダメなんだからっ！）

だが、ガイラの言葉通り、瑞々しい蜜肉は貫かれるたびに、大きくうねって肉竿に絡みついていく。

「ああうう……負けないの……、私は魔法少女。心までは許さないの。んぐう……」

「そう思ってるのはオマエだけかもしれないぞ。そら、見てみろ」

妹のミズキだけは俯いたまま、神に祈るようには両手を握り合わせているが、他の少女たちがミレイに向ける眼差しは、先ほどとは打って変わって侮蔑と哀れみに満ちていた。

（みんなのために私が犠牲になっっているのに……どうして、そんな瞳で見るの!!）

「怪物の好物でヨガリ狂ってる正義の味方には、用はないってことだな」



キラ
早くベッドに
あがれ

やめ…っ

ああ!

うう…くそ
貴様…
こんなこと…

何が
こんなことだ

涉外任務なら
当たり前だろう

娘もガツツリ
大股開き!

監獄靴艦3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3 BRAINWASHING ROUTE OF ROLLING SAND

episode 03 肉体改造メンテナンス

漫画 ^{くすのき} 楠木りん
COMIC
原作 / Anime LiLiTH



だからこんなに
なっている
クク…

…っ!
く…うう…



男はみな
破廉恥で
ケダモノだ

この破廉恥男!
ケダモノッ!!

でも…お母様にも
あんな酷い事…

いいナイフだ

死神の持ち物に
相應しい

俺の右腕を
斬り飛ばした
忌々しい代物

なに…する
つもり…!?

ナイフが
何のための
道具か…

よく知って
いるだろう?
死神

や…っ
やめっ…

おっと
動くとき女として
使い物に
ならなくなるぞ

ひ…っ!!

あ…ああ
はあはあ…

チ●ポを
入れる
穴を開けた
ただだぞ

死神のくせに
とんだ
臆病者だな



よし
いいだろう

あ…



う…
優しく…
愛撫して…

入れる前に
優しく愛撫して
欲しいか？
なら俺に
お願いしてみろ



チポを入れる前に
マコを優しく
愛撫して下さい
お願いします…!

チポを入れる前に
マコを優しく
愛撫して下さい
お願いしますだ!



まだ濡れが
足らんな
もう少し
濡らさないと
相当痛む



馬鹿めつ!!
今だ!!

おあああ

グチィ

痛い痛い痛い
痛あああいい!!

グチィ

痛いか!
そうか!
ハハハハ!!



あああ!!
いだいいい!!

やめてやめて
やめてええっ!!

確かに処女だ!
綺麗な血が出たぞ!!

クハハハ!!
処女には
それくらい痛がって
もらわんとな!

あうう...や
やさちく...
してっで...
頼んだのに
嘘づぎい...!!

ふん
約束した覚えは
ないな

お前に
切り裂かれた
腕の痛みは
こんなもんじゃ
なかったぞ!!

それに俺は
お前を痛めつけたくて
しょうがないのだ

な...んだと...?

つまり
こういう
事だっ!!

おかあさまあ!!

痛いお腹痛い
おがあさまあ!!

もうこんなの
イヤああっ!

許ちで!
わだちのからだ
壊れちゃうッ!!

ハハハハ!!
いくら
助けを呼んでも
無駄だッ!!

あああ

ダメだな!!
お前にはもっと苦しみを
与えてやる!!

俺のザーメンで
妊娠させてやる!!

それだけは絶対に
イヤあああ!!

やめてやめて
わだち赤ちゃんなんか
欲しくないのおっ!!

キラ・クシヤナ!
俺のザーメンで
妊娠しろ!!

処女喪失で
妊娠して
しまえ!!

やだああ! 出てるう!
汚いの出てるう!!

痛い!!
お腹焼けるうう!!
もう出すなあッ!!

クハハハ!!
まだまだ出るぞ!!
チポ10倍強化
させた
言っただろう!?

妊娠確率も10倍
いや100倍だ!!



思春期なアダム

E U I L E E S

第11話



好評につき増刷出来！
コミックス 第1巻 絶賛発売中!!

前号までのあらすじ

エンジユに強要されてマンションを訪れたラスメイトのマキナとエンジユする睦月。二人の色気にあてられ、逆に戸惑うエンジユだが、彼女はマキナの正体を訝しみ、剣を向ける！

どうやって
ココにきた？

マキナに迫るエンジユ！

天海雪乃

原作：がで
さかき 傘

web版コミックヴァルキリーでも連載中!
[http://www.comic-Valkyrie.com/](http://www.comic- Valkyrie.com/)

や...やめなよ
エンジユ
伊部章さんが
困ってる.....



..ツ



ホウ...

リングラフイ
動態形成
良好.....

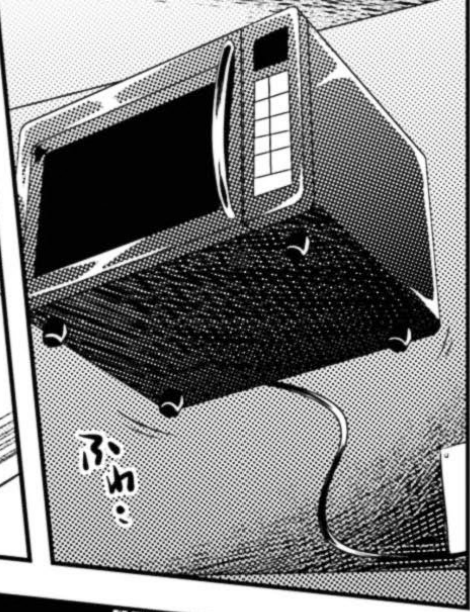


さっきの針ね!?



わあ!

部屋中の
家電が…!?



ふん!



対天使
捕獲再開……

Positive



!!



捕獲開始!

パネイリ
機兵…!!

逃げなさい
睦月むつき!

その女から
離れて!

逃げるって
伊部草さんから?
なんで……

あの女は
FETUSよ!

針についた発信機で
このマンションまで
来たの!

そんな…!

聖騎士牧場

家畜に堕ちた戦姫たち

第三話「家畜」

うえだ

小説
NOVEL

上田ながの

挿絵
ILLUSTRATION

A.S. ヘルメス

著者近刊

「勘違いしないでよね! アンタの事なんか大好きなんだから!」呪いで本音しか言えなくなったツンデレお嬢様



好評発売中!

両性具有を曝け出される少女、
恋人の眼前で犯される女騎士……

激化する騎士達への
種付け家畜化陵辱!!

登場人物紹介



フェリア=アルガスタ

アルガスタ騎士団の騎士団長。ガブランドの王子と恋仲だが身分差が障害となっている。

ノノン=クルザス

幼い容姿に反して200歳を数える副騎士団長。フェリアの育ての親でもある卓越した魔法の使い手。

リナ=アートランド

フェリアに憧れる新人騎士。従順で家事など身の回りの世話を得意としている。

アルト=モドゥーナ

騎士団随一のグラマス体型を誇る女騎士。自由人で男勝り。身の丈ほどある巨剣を操る。

前号までのあらすじ

人類を超越した力でガブランド王国の平和を守る巫人女性騎士団。しかし、彼女達を襲うのは魔物だけではない。巫人女性を家畜化し、増産・兵力の増強を目論んだ王国民によって、巫人女性騎士全員が種付けの為のランク付けをされてしまうのだった。

「そ……それじゃあ場所をか……かかか、変えるんだな」
 Cランクに振り分けられたエメラルダ達の痴態を見つめながらコスタルは呟く。
 その言葉に従うように、兵達がフェリア達の首輪につけられた鎖を引っ張ってきた。
 「あぐあああつ！」
 ギュッと首が絞まる。一瞬覚える苦しみに、騎士達は苦しげな呻きを漏らす。
 「申し訳ありませんなフェリア殿。ですが……貴女達は最早家畜なのです。巫人兵を生み出す家畜。そのことを十分認識していただかなければならないのですから……人と同じようには扱えないのです。皆もそのつもりでアルガスタ騎士団の面々に接するよるに」
 苦しんだところでバガルドは動じない。宰相が兵達に下した命は、どこまでも無慈悲なものだった。
 「力が……戻ったら……バガルド……必ず貴方を斬ります！ いや……力が戻らずとも……殿下が戻れば……」
 殺意を、憎しみを視線に込め、バガルドを睨む。
 「くくく……これはこれは、怖い目だ。ですが、何

度も言いますがこれは国の為の行為なのです。殿下だつて必ず私の想いを理解してくれませう。あまり期待はしない方がいいと思いますよ」
 「そのようなことあり得ない！ これが……こんなことが国の為になどお」
 血が滲みそうな程に奥歯を噛み締める。
 このようなことあつていいはずがない。いくら魔物に勝つ為とはいえ、国の為には戦ってきた騎士達が犠牲になるなど……。
 だが、フェリアの想いは男達には届かない。
 *
 城の外れにある牛舎——地下牢から連れ出された騎士達が全裸に首輪、しかも立つことも許されず四つん這いという状態で連れてこられたのは、そんな場所だった。
 だが、牛舎だというのに牛の姿はどこにも見当たらない。
 「どういうことだ？ 牛は？ 家畜はどこへ行った？ 何故オレ達をここに連れてきた？」
 城の食料を賄う為の牛がいない牛舎。明らかに異常である。
 アルガスタ騎士団遊撃隊長アルトモドゥーナは眉間に皺を寄せながら、ウサギ耳をヒクヒク動かしつつ、周囲をいぶかしげに見つめた。

「あ」
 そこで気がつく。
 牛舎の周囲に男女関係なく何人もの人々が立っていることに……。
 「あれ……城のみんなか……」
 彼らの顔には見覚えがあつた。
 皆、城で働いている侍女や侍従である。
 「どういうこと？ これはなんのつもりですか！？ 何故皆が集められているのです？」
 フェリアもそれに気がついたらしく、鋭く瞳

を細めて睨み付けつつバガルドに問う。
 「何故？ そんなもの簡単な理由ですよ。皆に知ってもらわんです。アルガスタ騎士団の騎士達は最早騎士ではなく、家畜になったのだということをおね」
 「なん……じゃと……!?!」
 ノノンが驚き、瞳を見開く。
 そのような驚きを気にすることなく、バガルドは話を続けた。
 「口で説明することも考えたのですがね、それではなかなか理解できないでしょう？ ですから、直接見ってもらうことにしたのですよ。皆様が種付けされる様をね。百聞は一見に如かずという奴です」
 「た……種付け？ どういうこと？ 何をするつもり?!? それはどういう意味!!」
 「どうって……けへへ……そ、そのままの意味なんだな。おおお……お前達牝を犯す。今、ここで烙印の効果でお前達は発情状態になっている。その状態で男に抱かれれば、相手に対して……情が湧くんだな。この相手の子供が欲しい……という情がけへ……けへへへへ」
 バガルドの代わりにコスタルが答える。男は相変わらず気色の悪い笑みを浮かべつつ、パチンツと指を鳴らした。
 すると兵達はその音に反応する様に動き出す。グイッとアルト達の首輪を引っ張り、牛舎内に押し込んだ。しかも、それだけじゃない。ただ牛舎に入れるだけでなく、両手足を鎖で拘束してくる。
 「このっ！ やめろっ！ やめろおおっ!!」
 四つん這い状態で牛小屋に拘束される——これでは乳牛以下の扱いだ。牛だつて舎内に繋がれ、自由を奪われることなどあり得ないというのに……。
 騎士として、戦士として戦ってきた者にとつて耐えがたい屈辱だ。いや、違う。騎士としてだけじゃない。人としてあつてはならないことだった。

だからアルトや——フェリアをはじめとする騎士達は抵抗する。必死に、必死に……。

が、やはり力が入らない身体では男達には敵わない。結局何もできぬまま、牛舎に繋がれることとなつてしまった。

「畜生……：てめーら、絶対許さねえからな！ 自由になつたら……力が戻つたら……殺してやる！ 絶対にぶつ殺してやるからな!!」

共に戦つてきた仲間達に対して殺意が湧き出す。悲しいことだが激情を抑えることができない。

普通の人間ならば感じただけで腰を抜かしそうな程の殺気を、アルトは全身に漲らせた。

「すみません姉御。ですが……国の為なんです。家族を守る為なんです。魔物共に勝つ為にはこうするしかないんです。許して下さい。そう……国の……国の為には俺は……俺は……犯します。姉御を……アルトの姉御を犯す」

しかし、このような状況のせいだろうか？ 自分を牛舎に拘束した兵は怯んだ様子を見せない。

それどころか、ねつとりと熱の籠もつた視線を、アルトの下半身——剥き出しになつたブリツと張りのある、**⑧**という印が刻まれた尻へと向けてきた。

「お……犯すだと？ ふ……巫山戯た……巫山戯たことを言うんじゃねえ！ オレ達は仲間だろ？ 仲間になんかことしていいと思つてんのか？ やめろ……今なら間に合う。だから……」

男の視線に恐怖すら感じてしまう。けれど、女戦士としての矜持が、怯えを見せることを許さない。

恐れを必死に隠しつつ、男を止めようとする。

「すみません。姉御……すみません」

だが、兵は謝るばかりで、こちらの言葉など聞き入れてはくれなかつた。

「さ、さあ……ははは……始めるんだな。犯せ。牝共をお、犯すんだなあ」

それどころかコスタルの言葉に従うようにして、男は自身のズボン脱ぎ捨てる。

「——なっ?」

視界に男の下腹部が——痛々しい程に勃起した肉棒が映り込んだ。

（これが……お、男の……で、でかい……う、嘘だら……）

大きく膨れ上がった亀頭に、幾本もの血管が浮かび上がった肉茎。大きさはちよつとした短剣くらいはあるだろうか？ 醜悪さすら感じさせる肉の塊は、三日月を描くように反り返っている。

アルトにとつて、初めて見る男のものだった。思わず硬直してしまふ。

自分は夢でも見ているのでは？

なんてことさえ考えってしまう自分がいた。

「挿入れます。これで……姉御を孕ませます。犯す俺は……姉御を犯す!!」

だが、これは夢ではない。現実である。

ゆつくりと男がアルトの腰に手を添え、グイッと引き寄せてきた。同時に腰を突き出し、肉先を秘部へと近づけてくる。

（犯される？ こいつに……オレの処女が奪われる？ この……この男に？）

発情した牝の顔を向けてくる兵に純潔が奪われる。奪われてしまふ。

それを考えた瞬間——。

「や……やめろっ！ やめろおおおおっ!!」

皆に見られているというのを気にする余裕もなく、アルトは悲鳴を上げていた。

いや、悲鳴を上げるだけじゃない。男から逃れるように腰を左右に振りながら、手足を拘束する鎖を引き千切るうともがいったりもした。

けれど、それでも男は止まらず——。

ぐじゅううっ!

「くひいっ!」

身体検査の際に流し込まれた魔力や、尻に刻まれた刻印の効力によって濡れた花弁に肉棒を押しつけられてしまふ。

ヒダヒダにペニスの熱気が伝わってくるのを感じた。肉体がビクツと震える。

（触つてる……。お……オレの……オレの大事どころに……熱くて、き、気持ち悪いものがふ……触れている）

同時に血の気が引いていくのを感じた。

感じるのは、魔物と戦っている時でさえ感じたことのない程の恐怖……。

「あ……や……やめて……頼む……頼むから……頼むからやめてくれ。お願いだ。お願いだからオレを……オレを犯さないでくれえ」

気がつけば、アルトは男に対して懇願する様な言葉さえ向けてしまつていた。

「やめてくれて……なんだか……姉御らしくないですね。姉御がそんな情けない声を出すなんて……どうしてそこまで？ 何故？」

普段のアルトとはあまりに違う姿に、兵士が戸惑いを見せる。

「何故って……それは……」

兵士の問いに戸惑いつつ、ふとアルトは牛舎を取り囲む城の人々を見つめた。

そこで、一人の青年の存在に気がつく。

今にも泣き出しそうな顔をして自分を見つめる青年——ロブの姿に……。

五年前。

「オレ……騎士になるよ。騎士になつて、この国を守る」

故郷の村でアルトはロブにそう告げた。

幼なじみ——ずっとずっと、本当の姉弟の様に過

「オレは……オレには……恋人が……好きな男がいるんだ！ だから……頼む……やめてくれ！ お願いだ。お願いだから……」

必死に懇願する。許しを請う。

「けへ……す、好きな男がいるのか……ふむ、だつたらそいつに種付けさせた方が確実か。けへ……けへへへ……」

すると、意外なことにこれにコスタルが反応を見せた。

「そ……そうだ！ その通りだ！ お前は……オレ達の特性をよく知ってるんだろ？ だつたら……確実に子供を孕ませることを考えるべきだろう！」

これにアルトは乗る。

（みんなの前でせ……性行為をする……。そんなことあり得ない。したくない。だが、逃れられないのであるならせめて……せめて……）

好きな男に——ロブに純潔を捧げたい。

「お……お前の言う通り。そそ……それ、採用してもいいんだ。ただ、問題が一つ。その相手がどこの誰か分からないということなんだ。すぐに連れてこれないのならば……その話はな……なしなんだ。あ、相手は誰だ？」

「分かっている。相手は……」

コスタルの問いに答えようとする。

「ぼ……僕だ！ 僕がアルトねえの恋人だ!!」

が、アルトよりも早く答える者がいた。

牛舎を囲む群衆の中から、ロブが姿を現す。

「ほ……ほう……なるほど。けへへ……す、すぐそこにしたわけか。なら話が早いんだ。お前……いま……ここでその牝を抱け。その牝に種付けするんだ。な。けへへへへ」

「こ……ここで？」

「そうだ。無理ならこの話はなし。お前以外の男で種付けするんだな」

「な……や……やるよ！ 抱く！ アルトねえ……抱くよ！」

コスタルの言葉に一瞬怯みつつも、ロブは強く言いかけた。

「いい返事だ。じ……じゃあ牛舎のな……な……中に入るんだな」

男の言葉に無言で頷きつつ、ロブはアルトが拘束された牛舎へと足を踏み入れてくる。

「こんな形でごめん……アルトねえ……」

「いや……オレの方こそすまない。だけど……嬉しいよ。オレ……ロブに初めてを捧げられるなら、どんな形だつて嬉しいよ」

この気持ちに嘘はない。相手がロブであれば、どんな辱めにだつて耐えられる。そんな気がした。

「ありがとうアルトねえ……。そ、それじゃあ……行くね」

「ああ、来てくれ」

そして、ロブとの行為が始まる——はずだった。

が、それから凡そ五分程が過ぎたのだが、未だアルトの身体は純潔のままだった。

その理由は単純なものである。

「ごめん。もう少し、もう少し待っててアルトねえ」

ロブのペニスが勃起していかないからだ。

「焦るな。焦る必要なんかどこにもないからな」

ロブは必死にこちらを見つめながら、自分のペニスを扱っている。しかし、勃起しない。何度ペニスを扱いても、肉棒が屹立することはなかった。

「こ……この状況に緊張して勃起しないか……。けへへ、情けない男なんだな」

ロブをコスタルが嘲笑う。

「ち、違う！ ロブは情けなく……情けなくなんかねえ！ 巫山戯たことを言うなつ!! 大丈夫だぞロブ。大丈夫だ。そう、大丈夫。気にする必要なんか

なにもないからな」

笑われる幼なじみに優しく声をかける。

「あ……う……うん」

これにロブは頷いてはくれるのだが、その表情はどんどん冴えないものに変わっていった。同時にたださえそれ程大きくないペニスがより小さく収縮していく。

どうすればいいのだろうか？ どうすればロブを勃起させることができる？

必死にアルトは考える。考えに、考え——

「ろ……ろ……ど、どうだ？ こういうのは？ こ……興奮するか？」

いつかロブと結ばれる時のことを考え、実は密かに勉強してきた知識を総動員し、アルトはロブに対して挑発するように尻を振ってみせた。

城の人々にも見られてしまうが、気にしている余裕はない。ロブが勃起しなければ、自分は恋人以外の男達に穢されることになってしまうから……。

「ほ……ほら……ロブ……」

ブリッとしたヒップを左右に振る。これを見たロブ以外の男達が喝采を上げるが、それを気にせず振り続けた。頬を赤く染めながらも……。

いや、それだけじゃない。この様を見たコスタルが「手伝ってやるんだな」といって左足を拘束していた枷を外してくれたので、アルトはまるで小便する犬のように片足を上げて、ロブに対して自身の秘部を見せつけたりもした。

（恥ずかしい。恥ずかしすぎる……。でも、オレの身体はロブだけのものだ。ロブ以外に抱かれるくらいなら、この程度の恥ずかしさくらい……）

羞恥を必死に抑え込む。

そして、それから更に約十分——。

「これはもう……し、失格なんだな」
残酷な言葉をコスタルが口にした。

「し……失格？ ど、どういう意味だ？ あ、焦る必要はないだろう？ オレは……ロブに抱かれさえすれば子を成すことができるんだぞ！」

「そ、それはそうなんだな。でも……こんな情けない男の子じゃ役に立たないんだな。ば……バガルド様のご注文は強い亜人の子……。誰の種でもいいというわけじゃないんだなあ。だから……」

コスタルの視線が痛々しい程に肉棒を隆起させた兵士へと向けられる。

「イエツァー!!」

これに、待つてましたとばかりに兵は答えると、肉槍の先端部をアルトへと向けてきた。

「なっ！ や……やめろ！ それを……それをオレに向けるな！ オレを抱いていいのはロブだけだ!!」

「……だとよ。ほら、姉御がお前を求めてるぞ。お前も男なら恋人の願いに答えてやれよ」

ゲラゲラと兵士がロブを笑う。

「あ、待つて！ 待つて！ すぐ……すぐだから！ だから待つて!!」

今にも泣き出しそうな表情をロブは浮かべながら、必死な様子で何度も何度も何度も、肉棒を扱いて扱いて扱きまくった。

が、駄目。

緊張の為だろうか？ 何度してもロブの肉棒が屹立することはなかった。

「残念だったな坊や。どうやら……お前は姉御と結ばれることはできない運命らしい」

「やつ！ く、来るな！ オレに近寄るなあつ!!」

兵士が自分に近づいてくる。それが恐ろしい。だが、逃げることはできない。ただ拒絶の悲鳴を漏らすことしか、アルトにできることはなかった。

「やめろ！ アルトねえに近づくなあつ!!」
悲鳴の様な絶叫を響かせると共に、アルトに近づ

く兵にロブが飛びかかる。

「邪魔だ」

「あぐああああつ!!」

しかし、兵士が腕を振るうとそれだけで、ロブは吹き飛ばされてしまう。牛舎の壁に激突し、そのまま躓ってしまった。

「ろ……ロブ！ ロブっ！ 貴様！ 貴様あつ!!」

「すみません姉御。ですが、姉御にあんな男は相応しくない。姉御を孕ませるのは俺です。それを教えてあげますよ。あんな情けない奴より、俺の方が男として数段優れているということを、姉御の身体に直接刻んであげます!!」

ぐちゅううっ！
言葉と共に兵士は再び肉先を膣口に容赦なく押しつけてきた。

「くひんっ！ あ……や、やめろ！ 駄目だ。それは……それは駄目だ。オレはロブのことを愛しているんだ。だから……だから……」

「すぐ……忘れさせてあげます」
聞く耳など持つてはくれない。

そして――

ブヂッ！ ブヂブヂブヂイイッ！
「ひっぎ！ ふぎっ！ んぎひいひいっ!!」

容赦なく肉棒が挿入された。膣奥まで肉槍が容赦なく突き込まれる。

「あああ！ は、挿入って来る！ んっぎ！ はぎいひい！ オレの……オレの膣中に……こんな……ロブの……ロブ以外の男のものが挿入ってくるううう！ んぎっ！ ひぎいひいっ!!」

ブチブチと何かが裂ける音が聞こえた。同時に凄まじい痛みが全身を駆け巡る。結合部からは破瓜の血がタラリッと垂れ流れ落ちていった。

「痛い。あああ……痛い……。こんな……こんなこと……ふっぐ……あぐあああ……。はあつ

はあつはあつ……ぬ、抜け！ 抜けえええつ！ これ以上……これ以上奥に挿入れるなああつ!!」

汚されていく。自分の身体が穢されていく。耐えがたい状況だった。だからアルトは殺気を飛ばす。本気で殺すぞと訴える。

「大丈夫。痛みはすぐに消えますよ。そう聞いてます。すぐに……すぐに俺の子を欲しくなりますよ」

「ありえねえ！ 馬鹿なことを……ふっぐ……んぐうう……ふうっふうっふうっ……い、言うんじゃねえ。斬る。てめえを斬ってやる！ 八つ裂きにしてやるううう!!」

「怖いなあ。でも……どうやるつもりですか姉御？ この状態でどうやって俺を八つ裂きに？ ほら……ほらあ!!」

じゅずぶっ！ どじゅっ！ じゅずぼおおっ！
「あつぎ！ ふぎっ！ んぎああああつ!!」

何を言ったところで、どんな感情を向けたところで男は止まらない。それどころかより腰を突き出し、ペニスを肉奥に挿し込んでくる。膣道を肉茎で拡張してくる。まるで身体に巨大な穴でも開けられていくような、そんな状況だった。

「そんな……そんなあああ……」
この光景を隣りながらロブが見つめてくる。ポロポロと涙を流しながら……。

その姿に胸が痛んだ。心配をかけたくなかった。きつとロブはこう思っている。僕のせいでアルトが犯されることになってしまったんだと……。

「ごめん。アルトねえ……ごめん……。ごめん……。ごめんなさい……。ごめん……」

それを証明する様に、何度も謝罪の言葉を口にしてくる。その姿にアルトの胸は痛んだ。

同時に心配をかけてはならないという感情が膨れ上がってくる。

本当は「見ないでくれ。お願いだから……い、い

221



「まのオレを見ないでくれ！」そう叫びたかった。が、アルトはその感情を押し隠す。悲鳴を上げる心を静めつつ、幼なじみに対して敢えて笑顔を見せてみせた。

「だ……大丈夫だ……。き、気にするな。ロブの……ロブのせいじゃねえ。大丈夫。こ……ふっぐ……この程度なんの、問題もねえ……。なにを……ふっぐ……んくうっ……なにをされたって……オレはお前のものだ。こんな奴等には屈さねえ。だから……泣くな。泣かないでくれロブ」

この程度なんでもないと振る舞ってみせる。「姉御……かっこいいですね。実に男らしい。ますます惚れ直しました。だから……俺の……俺の子を産んで下さい姉御！」

だが、そんな態度は陵辱者を喜ばせる結果にもなってしまう。腔中に挿入された肉槍が更に大きくなっているのを感じた。

「誰がためえの子なんか!! オレはロブ以外の子なんか産んだりはしねえ! 絶対に! 絶対にだ!!」
「姉御らしい言葉です。ですがその言葉、すぐに撤回させてやりますよ! 俺の子が欲しいって言わせてあげます! いきますよ姉御オ!」

「ずっじゅ! どじゅぼっ! ずじゅっ! ずじゅ! ずっじゅずっじゅずっじゅ——ずどじゅう! 言葉と共に男は腰を振り始める。必ずアルトを屈服させてやる! とでもいうように、強く、強く腰を叩き付けてきた。

「あっぐ! ふぎっ! んぎいいっ! ふぎっ! ひぎっ! あっぐ……くっくっ……ふぐうっ!」

(う……動き始めた。オレの腔中で硬くて熱いものが動き始めた! かき混ぜてる。ロブ以外の男がオレの腔中を……イヤだ……。こんなイヤだああ)

おぞましい。おぞましいおぞましいおぞましい。吐き気がする程の嫌悪を覚える。それに、痛い。

破瓜の痛みがまるで引かない。男が腰を振るたびに、身体が二つに裂けてしまうのではないかと、と思う程の苦しみを覚えてしまう。

「だというのにどうしてだろう? 痛いの、気持ちが悪いのに、何故か全身から力が抜けていく。結局からは愛液が溢れ出してしまおう。」

「凄量のまん汁が出てますよ。いきなり感じすぎです姉御」

「か……んじ……すぎ? ふ、巫山戯るな! ありえねえ! オレは……オレは感じてなんか!!」

何度も首を左右に振る。男の言葉を否定する。「嘘ついても無駄です。姉御は無理矢理処女を奪われてすぐに感じちまう……チョロい女なんですよ」

「ふ……巫山戯るんじやねえ! オレは……オレはそんな女じゃねえ!」

「その言葉いつまでもつか。実に楽しみですよ」
「じゅっず! どじゅぼっ! じゅずぼおっ!

「あぐあっ! あっあっあっあっ——くひいいい!」

笑いながら男は腰を振ってくる。烙印によって発情したアルトの肉壺を容赦なく蹂躪するように……

これに対してアルトにできることはない。ただ犯されるがまま、無様にブルンツブルンツと乳房を揺らすことしか……

「さあ、挿入されるよお嬢ちゃん。いくよ」
ニタニタと笑いながら、男が肉槍の先端部をグジュツと花弁に押しつけてくる。

「ひっ! や……やだっ! 許して……。お願い。許して! 許して下さい! お願いですから! 助けて……助けて下さい!!」

伝わってくる熱棒の感触にビクツと身体を震わせつつ、リナは牛舎に四つん這いに拘束された状態のまま許しを請うた。

「駄目だよお嬢ちゃん。これも騎士として立派に務めなければならぬお仕事なんだから。我慢だよ。お国の為にたくさん赤ちゃんを産んでね」

けれど男は聞き入れてくれない。それどころかリナが怯えれば怯える程表情を楽しげに歪めていく。肉棒をより大きく屹立させていく。

(どうして? なんでこんなことになっちゃったんですか? 私は……私はただ、フェリア様みたいになりましたか? たっただけなのに……)

国の英雄であるフェリアの様な立派な騎士になる。それを夢見せずと頑張ってきた。怖かったけれど

魔物と戦ってきた。
(フェリア様みたいになれば、こんな普通とは違う身体の中でもみんなに受け入れてもらえると思っ

たから……。なのに……。なのに……)

どうして自分は今、犯されようとしているのだろうか? 何か悪いことをしたのだろうか?

「助けて……。誰か……。お願いですから私を……」
牛舎を囲む人々に救いを求めるような視線を向ける。集められているのは城の人々だ。

「リナちゃんはいつも頑張っていて偉いねえ」
「いつも守ってくれてありがとう。感謝してるよ」

いつも優しく自分へと声をかけてくれた仲間達である。きつと助けてくれる。きつと自分を救ってくれる……。助けて……。助けて……。

だが……。
「ごめんリナちゃん。これも国の為なんだ」

「怖いんだよ。魔物が……。だからごめん。俺達のが……。頑張ってる……」

返ってきたのは絶望だった。
「そんな……。ど……。どうして?」

「国の為にバガルド様が説得したんだよ。最初は反対派が多かった。でも、バガルド様が国を憂う気持ち

は本物だ。それをみんな分かってくれたんだよ」

新たな生命の源を流し込まれて

刻を越える 魔導師

漫画 COMIC おおたたくし

新しき人類の
精子の味は

どうだ
イフよ

あとは
お前の卵子から
人間の形質を
取り込めば…

新たな人類
甲蟲人の完成
だぜえ…!!

ぬ
ぎ
あ
あ
あ





は

ああつ

お

卵子と結合した
みたいだなあ

あひやああつ

ククク

どんどん成長して
いくぞお

人間よつ

妾を
殺してつ

ダ…ダメツ

こんな生き物を
産むくらいなら
…つ…

原初の母よ

それが
貴女の
望み
なれば!!

おおっとー!

ジャマは
させねエ!!

感情に左右されず
完全な統率を誇る
昆虫の行動原理こそが
究極の平和を実現する

失敗作は
甲蟲人のエサに
なるんだよ!

お前らには
不可能な
楽園だ

生意気な
魔術師め
テメエはここで
歴史の目撃者に
なってる!

新人類最初の養分に
してやるからなあ!!

ぐあっ



あっ
ダメっ
こんなのは
ダメえっ!!

そろ何やってんだ
さっさと
卵ひり出すんだよ!!



今からその
ハラシ中の
モノ:

押し出して
やるから
なア!!



おおお

おなか...

かき...ま
...せちゃ...

あっ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょびしょ

ホラホラ

ハラん中
いっばいに
なってきただろ

ひっ

ひろがるう

おしりの
あな
ひろげられてっ

いきながら
抵抗するの
か

おとなしく
俺といっしょに新人類を
産みまくろうぜえ♡

イグー!!





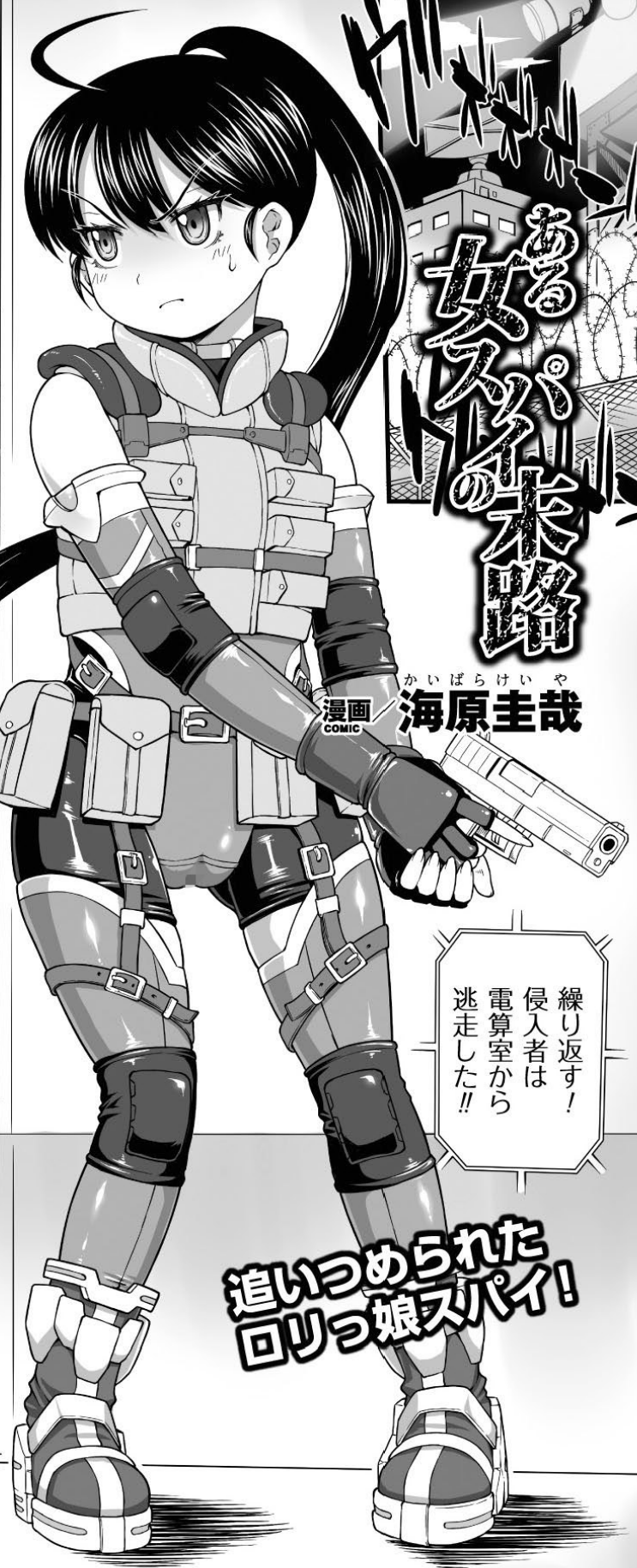
侵入者は
電算室から
逃走した!!



おるの末路

かいばらけい や
海原圭哉

漫画
COMIC



繰り返す!
侵入者は
電算室から
逃走した!!

追いつめられた
回リっ娘スパイ!



待ち伏せされたわ!
情報が漏れてるん
じゃないの!?

何だと!?
バカな!!



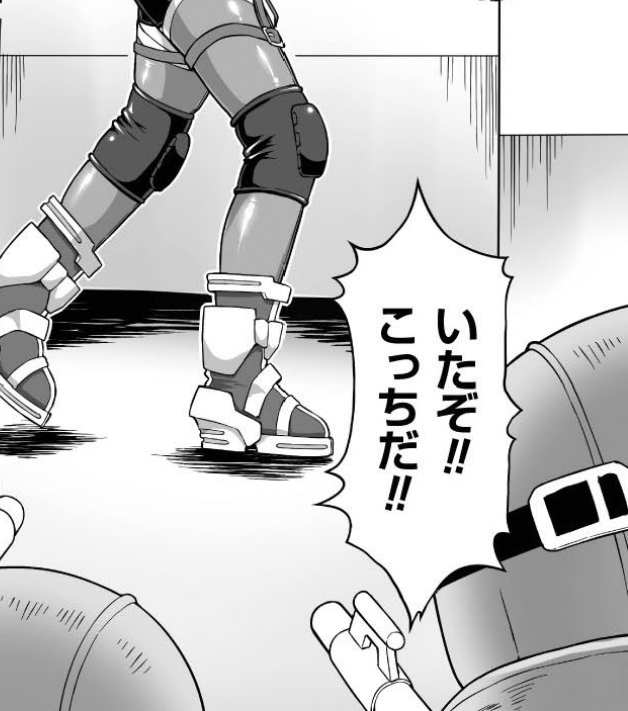
とにかく
脱出しろ!!
急げ!!

言われ
なくても…

チツ!!



パッ



いたぞ!!
こっちだ!!



なんだあ？
侵入者ってまだ
じゃねえか

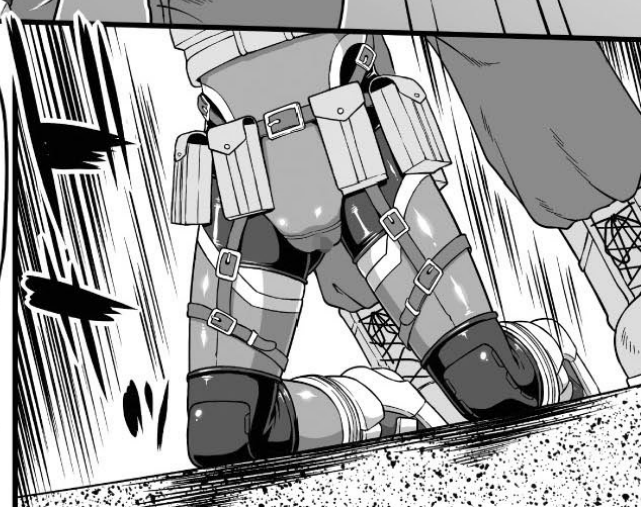
くツ：
放せ！！

じたばたすんな
スグに落として
やるからよ

こんな歳から
人殺しとは
感心せんなあ



殺しはしねえ
お前には
聞くことが
あるからな



こんなに
可愛い工作員なんて
はじめてだわあ

へへへっ
こりやあ尋問の
し甲斐があるぜ

……う……

あら
気がついた
みたいね

うーし
そんなじゃ
始めるか

そうか……
私は捕まって……





さて…と
まずは名前と
所属を教えて
もらおうか

…臭い息を
吐きかけないで
くれる？



だめよ暴力は♥
尋問はもっと
効率的にね？



でもよオ
あまり舐めた…

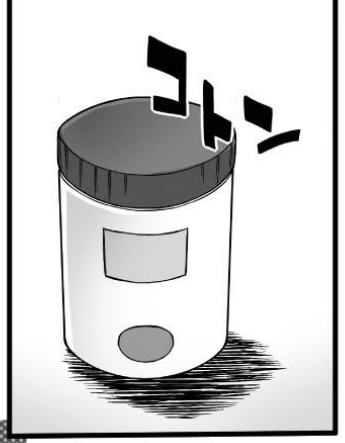
余裕だな
ええ？



ちゃんとコレ
つけないと

直に触ると
危ないのよね

なんだ...?
何かの薬品?



何よ...
これ

これは未発達な
性感帯を大人に
してくれるお薬よ

すぐに
熱くなるから

冷たいけど
我慢してね

スゴイのよ?
神経剥き出しに
なったみたいに感じ
ちゃうんだから

バンドベルグ帝国をも支配した魔王。
かつての領地——イセリアに向かい、
解き放たれた配下を揃えるとともに、
アリオナを領民の前で公開陵辱し、
人外の花嫁に墮とす！

イセリア 英雄戦記

the legend of the Iseya war

イセリア城の最上階。玉座の間は今、場違いな狂宴の真っ只中であつた。

「くっ、殺せえっ!!」

亜麻色の長髪を持つ見目麗しい女騎士が、怒気を孕んだ声を荒らげる。まだ少女と呼んでも差し支えないほど年若い騎士は断頭台の枷にも似た拘束具で両手と首を縛られ、四つん這いの姿勢を強要されていた。

上半身こそ美しい銀の甲冑を身に纏っていたが、腰から下ではスカートはおろか下穿きさえ奪われている。日頃の鍛錬によつてキュッと引き締まった美尻が隠しようもなく曝け出され、股座には赤子の手首ほどもある凶悪な一物が杭のように突き立てられていた。

「そんなことを言いながら、ここは随分こなれてきたようだがなあ?」

口端からだらしなく涎を垂らしつつ少女騎士の処女を食い散らかしているのは一匹のオークだつた。名はマグダミ。オークはもちろんミノタウルスやサイクロップスといった魔物を使役するオークキングであり、主を失い民を失いすつかり荒廃したこのイセリアの王城を占拠している実質的な支配者だ。

マグダミは領内で逃げ遅れたニンゲンを狩り集め奴隷として使役する一方、その中にお眼鏡にかなう女がいればこゝろとして慰み者にするのを趣味としていた。特に好むのは文武に長け凛とした騎士の女。激化する戦局の中をういつた獲物は手に入りやすくなつており、淫らなオークのねぐらと化した玉座に

は夜な夜な女騎士の悲鳴が絶えない。現に室内には他に何人も女騎士が彼女同様捕らえられ陵辱を受けていた。

「ひうんっ……お、やめろおお!!」

「ぐふふ、やはり騎士の女はそこらの村娘と違つて締めつけが違つ……これだから女騎士狩りはやめられんっ」

皆最初は死して虜囚の辱めを受けずとばかりに騎士の矜恃を見せようとすゝるものの、純潔を散らしてやると故郷の思い人の名を叫んだり子供みたいに泣きじゃくつたり十人十色の本性を見せ面白。それに彼女たちは大抵剣の道に励むあまり人並の恋さえ知らぬから、老練なマグダミのテクニクの前では赤子も同然。一晩も犯してやれば自分から腰に脚を絡めて受精を乞い願うほど容易く墮ちるのだ。

「お前はどれくらいもつかな——?」

「じゅぶっずぶっぬぐう……!!」

「ひんっ♥ いやっ、負けないっ……」

わたし負けないんだからああ……!!」
健気に堪え忍ぶ騎士の尻を抱え、生娘には酷な巨根を駆使し彼女のブライドを崩しにかかったマグダミだったが、「たっ、大変ですマグダミ様あつ!!」

パンッ!

突如扉が開け放たれると城門付近を警備させていたミノタウルス部隊の長が転がり込んで来た。

「ええい、ここには立ち入るなと言つて——お前、どうした」

家臣の無礼に叱責しかけたオークキングであつたが、その姿を見るやギョ

ッと目を見開く。

体軀だけならマグダミを凌ぐ牛頭人は全身を真っ赤な血に染めており、背には何本もの矢が突き立っていたのだ。「とつとにかく、外をご覧に——!!」

「むう……」

少し考えてからマグダミは犯している最中の女を抱きかかえると、繋がつたままで窓のほうへと近づいてみる。

「おお……」

それはまるで洪水によつて街全体が沈水しているかようだった。おびただしい数の兵士たち。二千、三千……いや、まだ足りない。蠢く人波は大きなうねりとなつて今にもイセリア城を飲み込んでしまふような勢いだ。

「すでに城下は完全に制圧されております! 我らミノタウルス部隊は壊滅、敵は破城鎧にて正門を攻略中!! 城門を突破されるのも時間の問題です!!」

「あれが例の南下してきているという魔王軍とやらか。グラマトンに加え陥落した帝国の軍勢をも率いていると聞き及んではいたが——おおう、これは聞きしに勝る大軍勢よ。たとえひ弱なニンゲンどもによる烏合の衆とて、この数で押されれば大抵の国はひとたまりもなからうな」

敵軍の勢いを目の当たりにしたマグダミは初見こそ面食らつていたものの、それを眺めているうちに何故か嬉しうにニヤニヤと口元を綻ばせた。

「ですから一刻も早く撤退を——」

「撤退だと? 馬鹿め、わからぬか。

ここがつけ目なのだ」

部下の言葉を一気に付したイセリアの支配者はその岩のようにゴツゴツとした手を日傘がわりに窓からしばし眼下の大軍勢を見下ろしていたが、やがてその中で一際目を引く漆黒の神輿へと目を止めた。

「あれが魔王だな——よし」

「じゅぶううっ……言うが早いかマグダミは弄んでいた乙女騎士からペニスを引き抜きその場へと捨てる。

「ひうんっ……!!」

女の呻きを気にもとめず男根に纏わりついた処女の証を手早く拭い去ると、オークキングはその体軀に似合わぬ俊敏さでテラスの最前へと躍り出た。

シュバババババツツ!!

すぐさま眼下の兵の海から一斉に弓矢が放たれる。まさに矢の雨、鏃の豪雨。しかしそれがテラスに立つ標的に届くより先に。

ヴォンツ!!

マグダミは跳んだ。その巨体から想像もできない跳躍力で、肉弾と化したオークキングは敵軍最中に飛び込んでゆく。兵士らが慌てて弓を引くがあまりのスピードに目標が定まらない。そうしている間にも空を舞う巨体は重力に引かれるまま一気に軍勢の中に飛来して——。

ドオオオンツツ!!

まるで隕石のように。先ほど目に止めた神輿の目の前に、そこにいた何十人も兵士を押し潰す形で降り立った。

「ぎよあああつっ!!」

巨大な大砲の球でも打ち込まれたように、圧死した者のみならず周囲の軍勢もその風圧だけで四方に吹き飛ぶ。

神輿を担いでいた強力たちも今の風圧にやられて倒れ込んでいたが、何かの魔力によるものか神輿は宙に浮いたままだ。

「このイセリア王・マグダミ様に刃向かおうという愚か者はお前か」

砂と埃の舞い踊る中、空に浮かんだ神輿を見上げたオークキングが鋭い声で吼える。しばしの沈黙を挟んだ後、呼び声に応えるように緞帳が捲り上げられた。中から顔を出したのはまだ幼い少年だ。

「やはりな——」

(文字通り神輿に担がれた餓鬼か)

敵軍の将を認めたマグダミが不敵に笑う。魔王だなど単なるこけおどし。大方誰か老獪な者——おそらくグラマトン聖教会の教皇辺り——が陰で糸を引いているに違いない。

(ならばその名を、ワシのために利用させてもらうぞ)

この場で魔王として祭り上げられている目の前の小僧を殺せば、自分は魔王を討った者として苦もなくその力を大陸中に誇示できる。それに軍勢の規模が巨大なら巨大なだけ、頭を失った兵は統率が取れず瓦解するもの。混乱した兵を降伏させ自軍に取り込むなど造作もないことだ——そう、帝国でこいつらがやったように。

大陸の臍であるイセリアはすでに押さえた。さらにバーンドベルグ帝国に

グラマトン聖教会という二大国家まで手中に収めることができれば、もはや自分は名実ともに大陸の覇者だ。(くっつ、これぞまさに漁夫の利よ)

グンツッ! マグダミは先ほど見せた力強い跳躍から一転軽い身のこなしで神輿の端にひよいと飛び乗り魔王との間合いを一気に詰める。今や大陸の盟主の座は目と鼻の先にあつた。

「死ねい、小僧」

間合いに入ったマグダミはすかさず少年の心臓を強襲すべく勢いよく腕を掲げた。少年は抵抗する気配だにない。所詮お飾り、反応もできないのだから。と、その時。

ふっ!魔王が軽く口元を窄め、軽く息を吹いた。テーパーの上の埃を落とすように。あるいは蒲公英の綿毛を飛ばすみたいに。他愛ない動作、しかしそれがもたらした結果は凄まじかつた。

ヴォオオオツツ!!

まずドラゴンの雄叫びにも似た大気を切り裂く唸り声が目をつんざいた。同時に先ほどのマグダミによるものをはるかに凌ぐ烈風が巻き起こり、それに巻き込まれたオークキングの巨体は一瞬のうちに秋風に舞う枯葉の如く天高くまで吹き飛んでいった。

「ぎやああああああ——!!」

(吐息だけでもみしながら、マグダミはようやく自分の当て推量が完全な誤算であつたことに気づかされた。

(かっ、勝てるわけがない……格が、違いすぎるっ……!!)

マグダミも馬鹿ではない、自分の身の程くらいは知つている。知つているからこそ漁夫の利を狙つて大陸の王の座を得ようとしたのだ。逆に言えばそうでもしなければとても自分にその力はないと——理解していた。

ところが目の前の少年は——いや、魔王は。まさしくその器であつた。自分を含めこの場にいるすべての者が束になつても彼ひとりには敵わないだろう。

(マズイぞ、これは絶対的にマズイっ——こつ、ここはどうかこやつに取り入らねばっ!!)

魔王が起こした烈風に、マグダミの自信はすでに一片も残さず吹き飛ばされていった。頭の中にあるのは「さてどうやって自分に有利な形で魔王に取り入るか」その一点であつた。とにかく再び地面に叩きつけられたらすぐさま土下座し降伏しようと決めた。

しかしおかしい。もう随分長い間空を飛んでいるというのに、いつまでたつても地面に叩きつけられる衝撃がやつてこないのだ。確かにかなりの高さまで吹き飛ばされたが、それにしても限度というものがある。不審に思つたオークキングが下を見下ろすと。

「な……うっ、浮いている——!!」

自分の置かれた状況にマグダミが驚愕する。地上から数メートル上空で彼の巨体はまるで目に見えぬ巨大な手に掴まれたようにピタリと静止していた。いや、よく見ればマグダミは実際巨大な手に囚われていた。黒煙のような濃霧が彼の身体を取り巻いて宙に磔にしていたのだ。

「なっ、どうしたことだこの霧は!!」

「もしやレジスタンスどもの仕業!」

周囲の兵士らがわかにざわめく。気づけば王城周辺はどこもかしこも深い霧に閉ざされていた。まるで深い洞穴の中、一寸先にいる相手の顔さえ判別できないほどの深い霧だつた。

兵士らの動揺ぶりからして魔王軍によるものではなさそうだが——?

「ほう、これはまた懐かしいな」

「面妖とも言うべき異常気象を前にし、魔王は配下の兵士らとは打つて変わつて嬉しそうにニイ、と笑つた。「まったくもつて——お懐かしゅうございませうぞ」

その時、敵かな声とともに霧の中にふたつのシルエツトがゆらりと浮かび上がった。ひとつは屈強な男のもの、そしてもうひとつは輪郭だけでもわかるほど熟れた女性の曲線だ。

「ガデルバロンにリファアーネ——それにシャドウ・ラウもか。やはりお前たちもメイズの封印から解放されたか」

魔王がその名を呼んだ瞬間、彼の目の前だけヴェールを剥ぐように黒霧が暗れ、ふたつの人影の全容が露わとなつた。

「魔王様もご健勝のようで何より」

「な……うっ、浮いている——!!」

自分の置かれた状況にマグダミが驚愕する。地上から数メートル上空で彼の巨体はまるで目に見えぬ巨大な手に

ガディルバロンと呼ばれたのは燃えるような赤い髪と鋼のように屈強な肉体を有した身の丈二メートル超の大男だ。その肉体美はオークキングの粗野な巨体とはまるで違い無駄がない。背中には常人では持ち上げることすら困難であろう大剣を二本も背負っている。幾多の修羅場をくぐり抜けたのである。その相貌はまさに阿修羅の如くで見る者を射抜くような鋭い眼光を一目見ただけでも彼が高位の魔族であり、同時に相当の剣士であると知れた。

「その新しいお身体もおつてもステキですわぁ♥」

女性のほうは艶やかな銀髪に褐色の肌を持つ切れ長な瞳の理知的な美人だ。ガディルバロンが男性の肉体美を象徴しているとすればリファエネと呼ばれたこの女はまさに女性の美を体現していた。女にしては上背があり、腰の位置も高い。身に纏っているのはやや露出過多なドレスのため、彼女の女らしい身体つきをより強調していた。深いスリットからは常人離れした美脚が覗き、大きく開いた胸元ではメロンのような双丘が深い谷間を形作っている。薄いドレス生地が浮かび上がる逆ハーフト型のヒップラインもまた何とも扇情的だ。

尻尾が伸びて触手のように中空を泳いでおり、彼女が淫と邪を司る淫魔の一族であることを告げていた。

しかし魔王は確か三つの名を呼んだはず。それでは残る一体は——マグダミが不審に思いながら眺めていると。

「して、あのゴミはどのように?」

主への挨拶を終えた赤髪の魔戦士が唾棄すべきものでも見る目つきでこちらを一瞥してきた。

「わっワシは——」

このままで殺されてしまう。どうにか取り入ろうと口を開きかけるも、ギリッ……ギリギリギリ……!!!

「ぐああああっ?!!」

身体を取り巻く黒い霧が荒縄のようにオークキングの肉に食い込み骨を軋ませた。

「こつこれは……なっ何なんだあつ?!!」

もがいても暴れても纏わりついた霧が離れない。こちらからは触れられないのに向こうはこちらの体軀まで持ち上げていた。

「ふふ、今貴方を捕らえているそれ、ただの霧じゃないのよ。シャドウ・ラウ——瘴気と淫気を糧として生きる、我ら魔王様に付き従う旧臣のひとり」

なるほど先ほど魔王が呼んだ三つ目の名はこの霧のものだったらしい。しかしそんなことに感心している余裕など、今のマグダミにはなかった。

「ついでこの間までメイズに封印されていたからお腹が空いているんですって。貴方みたいな雑魚の生命力でも少しは

腹の足しになるみたい!」

霧型魔族の通訳を買って出た淫魔の言葉に全身から急速に力が抜けてゆく。

「すつ、吸われてる——たつ、助け……まだ死にたくないイッ?!!」

指や足の先といった末端神経が痺れを帯び、どれだけ深く息を吸い込んでも息苦しい。まるで溺れ死んでゆくような感覚——死を予感したマグダミが身も世もなく泣き叫ぶと。

「シャドウ・ラウ。離してやれ」

助け船は意外なところから出された。意外にも神輿の上の魔王が情けをかけたきたのだ。

「あら魔王様、いいんですの?」

「仮にも魔王様に楯突いた愚か者。役に立つとも思えませぬしこのような小者、放っておけば獅子身中の虫となるやもしれませんぞ」

銀髪の淫魔と灼髪の魔戦士が口々にマグダミの処刑を進言するが、

「フツそう言うな。我は今、お前たちの顔が見れて気分がよい——それに、コイツにはまだ使い道がある」

言った魔王は神輿から身を乗り出し空に囚われたマグダミを見やると、

「マグダミとやら。聞けばイセリアの領内ではオークどもが人間狩りをしては城に集めているという。あれは貴様の差し金であろう?」

「は? はっはいっ?!! 城の兵や召使、戦火の中を逃げ遅れた者など数百名ほど、捕らえておりますすハイ!」

「そうか——ではそれをこの城で一帯の大広間に集めておけ」

手短かに命じた魔王は神輿の中に視線を向ける。中に誰がいるのだろうか。ヴェールの中を見やりながら魔少年はまたも口元をニイッ、と歪め笑った。

※

「なあ、俺たちこれからどうなっちゃうんだ……?」

「知るかよ……!」

イセリア城の中、ざわめいているのは国外へ逃げ遅れマグダミ配下の魔物に囚われたイセリアの民たちだ。つい先ほどまで暗く窮屈な地下牢の中に閉じ込められていた彼らは今、晩餐会などで使われる大広間に集められていた。大理石の床には赤絨毯が敷き詰められ、天井から吊るされた豪華なシャンデリアの明かりは窓のない室内をまるで昼間のように明るく照らす。

平時であれば憧れの対象であろう晩餐会場に集う人々の表情はどれも皆硬い。それも当然で辺りにはオークやミノタウルス、サイクロップスといったモンスターが自分たちを監視していた。

「これで全部か?」

「はっ、間違ひなく残らず集めておりますす、ハイ!」

指示を出しているのは阿修羅のような形相の赤い髪をした魔族だ。それを受けてへこへこ頭を下げているのは確かマグダミとかいうオークの長だった。イセリアの新たな王を名乗っていたはずだが、愛想を振りまき手もみで

答える様子は完全な小間使いだ。

「ふふ、貴方たち幸運ね。これから大陸の盟主たる魔王様のご尊顔にお目にかかれるんですもの」

魔物の群れの中から現れ人々に声をかけてきたのは銀髪の見目麗しい美女。しかし頭からは禍々しい角が伸びており一目で人外の存在と知れた。

「まっ、魔王……だど!?」

褐色の魔女が放った言葉に、人々の間に戦慄が走る。

「ま、まさか俺たちを生け贄にでもするために集めたのかっ!?」

誰かが叫んだ言葉に、その場にいる誰もが無意識に後ずさる。

「ふふ、そんなに脅えることないわあ。貴方たちの敬愛するアリオナ女王陛下も一緒に来たのだし」

サキユバスが続げさまにアリオナの名を出した途端、人々の間のざわめきはより一層大きくなった。

「女王陛下が!? 本当かっ!?」

「こんな魔物の言うこと信じらんじやない、女王様が魔王などと一緒にいるなど——」

「あらウソなんかじゃなくてよ? ほら、噂をすればいらつしやったわ」

女が大広間の大扉へと視線を投げると、それを合図にしたように重厚な音を立て観音開きの戸が開け放たれた。

現れたのは整った顔立ちの浅黒い肌をしたひとりの少年だった。全体に金の刺繍が施された法衣にも似たそれは大変豪華なもので、一目でただの子供

ではないとわかる。彼が先ほどの淫魔の言う「魔王」なのだろうか?

魔王と目される少年は手に鎖を持っていた。自分よりも体格のよい家畜を連れてくるのだ。シルエットだけならベットの散歩に付きあうたいいけな子供にしか見えないが——。

「なっ!?」

「え……ああっ!?」

やがて近づいてきた少年の連れた家畜の姿を認めた人々はほぞつて驚愕した。少年の連れていた家畜……家畜と思われていたそれこそ、紛れもなく彼らが主君、アリオナIIプリティッシュ女王陛下その人だったのだ。

美しいブロンドの髪を引きずりながら四つん這いで綱を引かれる女王が身につけているのは麻の布切れ一枚だけ。辛うじて前後を隠すだけの奴隷の装束では女王の爛熟した女体を包みきるなどなど到底叶うはずもなく、脇からは豊満な胸元が零れ落ちて今にも先端の紅の色づきが垣間見えそうだったし、丈が短いところに四つ足の姿勢でいるためムッチリとしたヒップの下弦が布地から覗いて歩く度プリンとした肉の躍動が隠しようもなく覗いていた。

「なっ、何という不敬なっ!?」

群衆の中から若い男がすかさず食ってかかろうとするも、

「ダメよ、おとなしく見ていなさい」

サキユバスが片手で制すると男はまるで目に見えない壁に阻まれたかのよう

にその場でつんのめる。

家畜女王を連れた魔王が広間の中央へと足を進めると、集められた人ごみが左右に割れ最奥に設えられた玉座まで一直線に赤絨毯の道が出来上がった。

悠然とした歩みの魔王に連れられた女王は周囲の騒ぎにまるで気づいていない様子で、目の焦点は合わずまるで夢遊病者のようだ。息苦しいのか常に口を半開きにしてはあはあと絶えず深い息をついていた。熟れすぎの桃を思わせる巨尻を左右にフリフリと揺さぶりながら進む様子は淫婦のようで、その場にいる男性すべての視線が自然と熟れ桃に突き刺さる。

やがて広間の最奥にたどり着いた魔王は玉座に腰掛け、本来の主であるアリオナはその足元に、まるでペットのように座らされた。

「アリオナ、顔を上げてみる」

少年が鎖をクイツと引いて促すと、

「はあんっ♥ はっ、はいっ……」

魔王に命じられた四つん這いの女王は言われた通り上を向く。しかしその碧眼は周囲に気を配ることなく一心不乱に主である少年に注がれていた。

「わからぬのか? イセリアに、お前の城に連れてきてやったというのに」

「私の……城オっ……?」

重ねての魔王の言葉にアリオナは後ろを振り返り自分を注視する民を一瞥する。辱めを受ける女王が自分たち

どのような言葉を紡ぐのか——ざわめいていた人々が水を打ったように静まり返った。

広間に響くのはアリオナの吐息だけ。しばし人々を見回すように首を動かし、

「そんなっ、そんなことどうだっていいのおっ!! 魔王様お願いですからあつ……早くつ、早くアリオナのオマンコ愛してええっ……!!」

くるりと玉座に向き直したアリオナは自分よりはるかに背丈の低い少年に媚を売りまぐわいを乞い強請る。それが王城に帰還を果たした女王陛下の第一声となった。

「久方ぶりに民の前で吐く台詞がそれか。移動中は昼夜を問わず自分で慰めていたようだが、それでも足りぬか?」

「だつてこのピアスっ! いじわるなオマンコピアスのせいでザーメンなしじゃいけないんだものおっ!! 朝から晩までいくらおマンズリしてもイけないなんて地獄よおっ!! おっ、お願

いしますからザーメンちょうだいっ、魔王様のあつっいザーメンでオマンコイカせてくださいいいいいいっ!!」

女王は破廉恥な言葉を躊躇いなく吐いて、尿意を我慢する女兒のように内股をすりすり擦りあわせてみせる。

「あの皇帝め、遺した玩具、絶頂封じのピアスがそんなに辛いのか。堪え性の

ないお前が民の前で恥をかかぬようにとつけてやったのに逆効果であったな

どうだ、そんなにコレが欲しいか?」

魔王が自ら一物を取り出す。少年の

ような体軀からすれば明らかに異形ともいえる、天井を向いてそそり立つ魔

羅。青筋を浮き立たせるそれを目の当たりにした瞬間、女王の喉がゴクリと音を立て瞳の奥に情欲の炎が揺らいだ。「ああ……おつオチンポおつ……♥」

「さあ、どうする」
困惑するアリオナに対し魔王は冷たい口調で二択を迫る。
為政者として迷う必要などない選択のはずだった。自分の欲望ひとつ押し留めれば大勢の民の命を救えるのだ。

魔王の男根を視界に捉えるや、青い瞳は眼前の剛直を愛おしげに見詰め、花のように美しい薄紅色の唇がはしたない言葉紡ぐ。
「だらしな女だ。すでに亡国同然とはいえここはお前の城なのだぞ？」

魔王の言葉に四つん這いの女王は目の前の肉棒と背後に立ちすくむ人々を幾度も見比べていたが、やがてすつくと立ち上がり自分を注視する無辜の民へと向き直ると。
「ごっ……ごめんさい、ね……♥」

「はうらんっ♥ おっぱいそんなっ、苛めないでええ……!」
胸を蹴られた女王は切なそうに身じろぎながらも嬉しそうに頬を緩ませる。「まったく……まあそこまで欲しくば入れてやつてもよいぞ。ただし——」

しかしそれ以上に期待を隠しきれず口元を淫らに綻ばせながら。民に一瞥をくれた女王は彼らに尻を向け魔王へと——その陽根へと歩み寄る。
「そつ、そんなっ……!」

魔王が片手を掲げる。その手のひらが青い光を孕んだかと思うと、足元で傳くアリオナの下で小さな金属音が鳴った。四つん這いの女王の胸と股間の辺りにはピアスが三つ転がっていた。
「お前を苛んでいたピアスを外してやつたぞ。これで存分に果てることでござよう——しかし、果てるな。もし果てればその数だけ、お前の民を殺す」

人々の間から驚愕にも似た眩きが発せられたが、それが女王の耳に届くこととはない。自らべろんと尻を捲り屹立する魔王の上に跨がると、
「はあああああ……♥」

魔王の発したその言葉にまた衆人がどよめく。
「だつだめでそんな酷いこと……!」

主の凶悪な魔根を根元まで一気に飲み込んだ女王は頤を仰け反らせ、広間じゅうの者に恍惚の表情を振りまく。
「いいや答えろ——さあ、さあ!」

「ならば再びそれをつけて過ごせ——」

それまでは虜囚とされた女王陛下が痴態を演じるよう強いられているのだと信じていた民もいたが、その顔を見れば女王がこの屈辱を無理強いされていないことは明らかだった。しかし当のアリオナはといえば絶望の漂う眼下に目もくれず、ようやくありついた大

好物を一心不乱に貪り食らう。
「ふ、民の手前ももう少し遠慮するかと思えばすぐさまがつつきおつて……お前ほどの淫売だ。亡き夫とも公務の合間にこうして戯れたのであろう？」
魔王はアリオナの耳朶を甘噛みしつ、亡き夫まで侮辱してくる。
「んあああつ、そんなっ、あの人はそんな破廉恥なことつしませんでしたものつ……んをおつ♥」

「んぐうあああつ♥ 魔王さまあつ! 魔王様のおチンポのほうが全然いいのおつ!! あの人のじゃこんなっ、こんな気持ちいいのつ味わったことおつ……なつ、なかつたのおおおつ♥♥」
ブロンド髪を振り乱して、女王は堪らず屈辱的な告白を泣き叫んでいた。「ふはははは! よくぞ言つた。ほおれ、そのまま果ててしまえ」

「んっ、んあああつ……あつ、あの人の……と……?」
女王は最初問われた意味も介せぬ様子で抜き差しに励んでいたが、やがてハツとしたように目を見開くと。
「そつ、そんな……言えませんつ、あの人が悪くてそんなのせつたに言えにやいいいひいっ♥」

「ひやあわわあつ♥」
それまでアリオナの腰振りに任せていた魔王が下から軽く突き上げた。与えられる抽送に、女王は夫を裏切ったことも忘れてあられもない嬌声を漏らしてしまふ。

何かをかばうみたい髪を振り乱し必死になって返答を拒否した。それはもうほとんど答えを口にしていようなものだったが、魔王は許さない。
「いやや答えろ——さあ、さあ!」

「んひいっ♥ だめつ、魔王様のほうからズボズボするのらめええつ!!」
魔王が自ら動いたのはせいぜい十往復かそこらだった。しかしそれを呼び水にアリオナの尻は再び肉悦に飢え、ぐりんぐりん和楯形を弧を描き卑猥なダンスを踊り出してしまふ。

「んほおおつ♥ そんなっ……言わせ

「あああつ、止まらないいっ……腰いっつ、女王はどうにかはしたない腰振りを

「んほおおつ♥ そんなっ……言わせ

「んほおおつ♥ そんなっ……言わせ

押し留めようと頑張っているらしかったが、はたからはまるでそうは見えなかった。桃尻のダンスはいよいよ激しさを増し、肉と肉とがぶつかりあつてパンパンと拍手のような肉音を奏でた。「お前にしては堪えるな。しかしこれならどうだ!？」

ぎゅむつ、ぎゅむうううつ!!

魔王は勃起乳頭を摘んでいた手を大きく広げると、目の前で狂つたように躍る乳釣鐘をふたつ手繰り寄せるように遠慮なく驚掴みにする。

「いやあつ、んっんひいいい………だつだめえええ——っつ♥♥」

びくっ! びくびくんっ!!

乳腺まで握り潰すような力強い搾乳に女王は子犬みたいに甲高い悲鳴をあげ、否応なく絶頂を迎えさせられた。顎を仰げ反らせ色白な喉を晒しながら肉付きのよい肢体をぶるんぶるんと痙攣させ法悦を極める。

「果てたな?」

耳元で囁く魔王の声は死刑執行人のものように冷ややかだ。

「果て、果ててまひえ……んぎい!!」

最後の理性で民の命を救おうとしたのだろう。咄嗟にウソをつきかけたアリオナだったが、虚偽を罰するように魔王の指が陰核をギリりと抓り上げた。

「主人相手に偽るつもりか? それではここで終わりにしてしまふぞ?」

まぐわいを中断する——その言葉はどんな脅しより効果的だった。

「ごめんなひや: 果てつ果てまひたあ

つ、わたひつ魔王様のオチンポにい: っイカされちやいまひたあつ♥」

さらなる快感に飢えるアリオナはここで首を縦に振れば民の命がないと知りつつ絶頂を認めてしまふ。

「ふふ、認めたか。しかしいいのか? お前が果てた数だけ、我は民を殺すと

言っているのだぞ?」

「ああつ、らめれすうつ: けどお腰止まらないのおおつ……きつ、気持ちいいのがずつと続いて……またあつ♥」

「果てる時はしつかり口にしろ」

「んああ……イキますつ……許してつ、皆さん許してえつ!! 勝てないつ、オチンポになんて勝てるわけにやいのお

つ……んああつまたイクううつ♥♥」

民に許しを乞いながらも、女王にはすでに快感を堪えようという素振りすら見えなかつた。魔王の膝の上ではしやぐ子供みたいに腰を跳ねさせ自ら抜き差しを繰り返して快感を貪り、絶頂を繰り返す。

「またイクうつ、イツたばかりなのにまたイツちやうのおおつ……いやああんつ、イク間隔つどんどん短くなつて

るうううう——っつ♥」

玉座の前の赤絨毯にはアリオナの漏らした汗や牝汁が四方に飛び散り、立ち上る牝の濃厚な発情臭は広大な広間の隅々にまで満ちていた。

「イクッ、イツてるのにまたイクのおつ♥ だめなのつ、ずつとイキつばなしでつイクの止まらないのおつ♥」

それからというもの魔王が腰をひと

つ突き上げる度、あるいは女王自ら尻をぐりんと艶かしく振り立てる度アリオナは喉を哽らして絶頂を告白した。

魔王が戯れに乳先や桃穴を刺激する度女王はあつけないオルガスムを迎え続け、遂には——。

「あらやだ、女王様がイツた回数もうここに集めたニンゲンの数超えてます

わよオ?」

イセリアの民とともにその様子を眺めていたリファアネがクスクスと笑いながら指摘する。淫魔の持つ蛇の目に睨めつけられた市井の人々は文字通り蛇に睨まれた蛙のように恐怖で硬直する。しかし同時に、女王の晒す破廉恥極まる艶姿に男は誰もが股間を膨らませ、女も密かに股を濡らしていた。

「まったく、これでは余興にもならんな。この淫売女王が——民の命と引き

換えに、存分に果てるがいつ!!」

ズクンツ!!

魔王は女王の尻穴をくじりつつ、その体躯に似合わぬ力強さで腰を突き上げそのまま膣内へ白濁のマグマをぶち

まけた。

びゅくりゅつ!! びゅるつびゅくつ

びゅびゅびゅううう——っつ!!

「んほおおおおおつ♥ いくうつ

ザーメンイクつ、子宮でいくうううう♥♥♥」

受精した女王はまるで落雷に撃たれたかのようにブルンと豊満な肉体を揺

さぶり、断末魔の悲鳴にも似た絶叫を吼え立てながらそれまで以上に激しい

エクスタシーを迎える。

「ひい……んつ……!!」

ずにゆふううう……!!

限界まで仰け反つた女王はそのまま

仰向けに倒れ込み、魔王の足元に転げ

落ちる。開かれた陰部は熱れきつたア

ケビの実のようにパツクリと口を開き、

紅色の肉を覗かせながら注ぎ込まれた

白濁をコブコブと嘔き零していた。

「……残念ねえ。女王様は貴方たちの

命より魔王様の寵愛を選んだわよ?」

そんなアリオナの様子を見届けたり

リファアネが、民のほうへと振り返りニ

イツ、と蛇の瞳で人々を見回した。

「お願いだ、助けてくれえつ……!!」

「何でもするから、命だけは——!!」

主君にすら見捨てられたイセリアの

難民は皆一様に床に膝をつき額を擦り

つけて魔族相手に命乞いをする。

その様子を楽しそうに目を細めつつ眺めていたサキュバスだったが、

「そうねえ: 貴方たちにもチャンス、あげてもいいわよ?」

やがてそつと耳打ちするような口調

でそう囁いた。

「ほつ、本当かつ!!」

「ええ、本当よお——私にちよつとだけ、手を貸してくればね」

縦るような目つききの民を見回す淫魔

の瞳には、妖しい輝きが覗いていた。

※

(ああいつそ死んでしまいたい——)

民の前で魔王に抱かれ、はしたない

絶頂を繰り返した後、ここ数日来全身



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>